

山田美妙著

新體詩歌形迹

嵩山堂發行



本間文庫
文庫 14
D 133

80

75

70

65





文庫14
D133

はくがき

新體詩の名目でやうく行はれるに至つた韻文、
うの作法の指南のものがまだ世に無い處から、
またおぼくうの必要を促がされもする處から、
こゝに此書を編纂して、さしあたりの方針を示
す事にした。

明治卅五年

八月

美

妙

新體詩歌作法目錄

新年	一	頁
雪	二十一	頁
○春			
立春	三十七	頁
磯菜	四十	頁
春寒	全	頁
鶯	四十一	頁
梅	四十五	頁
春の風	五十七	頁
霞	五十八	頁
遊絲	五十九	頁
若草	六十二	頁
つき穂	六十三	頁
芦づの	六十三	頁
薦の若葉	全	頁
野あろび、つみ草	六十四	頁
椿	全	頁
歸雁	全	頁

燕……………六十四頁

柳……………六十八頁

茅花……………七十頁

萍……………全頁

三月三日……………全頁

桃……………七十五頁

連翹……………七十七頁

蓮華草……………七十八頁

春分……………全頁

遲日……………八十頁

春雨……………八十七頁

春月……………八十七頁

櫻花……………八十八頁

春曉、春眠、春夜、春夕、九十八頁

蝶、堇、白魚、蛇、蕨、春空、

春水、菜花……………百一頁

○夏

藤、牡丹、更衣、新樹、郭公、

菖蒲、端午、梅雨、螢、夏

夜、夏月、夏曉、蟬、大暑、夕立、

納涼……………百四頁

蠅、はへり、蝙蝠、蚊、蛇、蜂、

蟻、蝸牛、ひるね、べに

の花、うち水、夕顔、朝顔、

晝顔、瓜……………百十六頁

○秋

初秋、七草、萩、雁、蟲、露、

秋風、霧、秋雨……………百二十二頁

秋夜、鶉、月、擣衣、演習、遠

足、菊、紅葉、おるこ……………二十七頁

○冬

落ち葉、しぐれ、かれ野、

冬こだち、こがらし、霜、

氷、千鳥、冬の月、みぞれ、

うづみ火、歲暮……………百四十六頁

○韻文新體の作りかた……………百五十五頁

句格總論……………百五十九頁

句格の四種類……………百六十頁

句格表……………百七十五頁

用語の音調についての

注意……………百八十頁

作例……………百八十五頁



新體詩歌作法

山田美妙 著

◎新 年(チン)

[語 句]

(五)

かどまつを
かどまつに
かどまつの
かどに立つ
みどりなる

かどのまつ
かどまつや
かどべなる
ときはなる
まつのいる

ふかみどり
いろふかき
あさひかげ
日の影の
かゝやきて
はたざるし

かはらぬを
まつ立つる
あさひこの
日のみかげ
さしのぼる
くにははた

玄のゝめの
 わかみづを
 水きよき
 にこりなく
 このとしの
 あらたまの
 あらたなる
 にひこよみ
 としのかず
 いはひつゝ
 たのしみて
 よろこびて
 うれしげに
 あをそらや
 ちとせまで
 千 年^{ねん}の
 よろづ世や
 けふをこそ
 けふはしも
 いで今日^{けふ}は
 あさばらけ
 あけがたに
 あけはなる
 あけがらす
 あけ告ぐる
 はつ 鶏^{けい}の

にはひ照る
 くむ水の
 心^{こころ}ま^まで
 まし^まみ^みづ^づの^の
 としのはに
 あらたまる
 立ちかほる
 あたらしき
 年をそへ
 ことはぎて
 いそしみて
 うちゑみて
 世の中の
 つるぞ舞ふ
 ちよろづの
 千 歳^{せんざい}に
 八千代かな
 けふよりは
 けふなれや
 さらば今日^{けふ}
 あかつきの
 玄のゝめの
 朝つく日
 いさましく
 よびさます
 うたふ 鶏^{けい}

とし立てば
 ひなみやこ
 人こゝろ
 おしなべて
 玄めはへて
 かいみもち
 くすり酒
 屠蘇^{とそ}汲めば
 屠蘇^{とそ}ぶくろ
 つかさびと
 うまぐるま
 雲井^{うんせい}かな
 むらさきの
 とりの聲
 君がよの
 大みよの
 夜のまより
 あまの戸の
 あくる間^まの
 けさ見れば
 日のもと
 とつくにも
 からくにも
 神代^{かみよ}より
 人々の
 山ざとも

ひさかたの
 あまつそら
 くまもなき
 玄め繩^{なは}の
 餅^{もち}かな
 ざふにもち
 屠蘇^{とそ}のさけ
 くむ屠蘇^{とそ}の
 屠蘇^{とそ}の香の
 朝賀^{あそか}にと
 きしりゆく
 くもの上^{うへ}の
 大そらに
 にはとりの
 大きみの
 みよなれや
 白^{しろ}み^みゆく
 をさな子や
 おいたるも
 けふ見れば
 やまとなる
 もろこしも
 いにしへの
 千代^{ちよ}いはふ
 もろこゑの
 はつゆめや

あをそらや
 ちとせまで
 千 年^{ねん}の
 よろづ世や
 けふをこそ
 けふはしも
 いで今日^{けふ}は
 あさばらけ
 あけがたに
 あけはなる
 あけがらす
 あけ告ぐる
 はつ 鶏^{けい}の

つるぞ舞ふ
 ちよろづの
 千 歳^{せんざい}に
 八千代かな
 けふよりは
 けふなれや
 さらば今日^{けふ}
 あかつきの
 玄のゝめの
 朝つく日
 いさましく
 よびさます
 うたふ 鶏^{けい}

とりの聲
 君がよの
 大みよの
 夜のまより
 あまの戸の
 あくる間^まの
 けさ見れば
 日のもと
 とつくにも
 からくにも
 神代^{かみよ}より
 人々の
 山ざとも

にはとりの
 大きみの
 みよなれや
 白^{しろ}み^みゆく
 をさな子や
 おいたるも
 けふ見れば
 やまとなる
 もろこしも
 いにしへの
 千代^{ちよ}いはふ
 もろこゑの
 はつゆめや

こゝのへの
蓬萊の
こほりかな
また春は
むろ咲きの
むろの梅
はがため
破魔弓やに
てまりつく
こぎの子の
穂長ほさす
齒朶しだの葉に
橙だいだいや
小ざゝはら
風さむみ
ゆきぞらの
うめが香の
はちのうめ
福壽草
はつこよみ
破魔矢やかな
はこいたに
ほだはらや
うらじろの
ゆづり葉の
かざりえび

ふとき箸はし
わか葉かな
はつそらに
禮者かな
やちまたの
もりすなの
(六)
まつを立てゝ
かど松をぞ
わがかどべに
まつと竹と
かへぬ常磐
松のいろに
ふとばしの
四方拜
はつがらす
いかのぼり
まぢくくの
くみかはす
かどに松を
かどのあたり
かどなる松
いろは常磐
みどりふかし
さゆる緑

から栗の
かすの子を
たからぶね
なみしづか
むつみあふ
かるた取る
ざふにもち
あま海苔のりの
むすび昆布こんぶ
獨活どくわくの芽の
かいみもち
福びきの
やぶかうじ
かはらぬかな
あさ日のかけ
日影たかし
日はかゝやく
さしのぼる日
國のみはた
あかつき空
明け行く空
くむわか水
くみ取る水
水のいろも
心すめり
むねも清く
とりかひの
粥かゆるの
なみまくら
よつのうみ
うたがるた
田つくりと
ざふにかな
海苔のりの香かほの
よる昆布こんぶ
くし柿かきの
まつのうち
福わらや
ことのばら
ふかき色に
あさの日かけ
照る日のかけ
照りはゆる日
はたのえるし
たかきみはた
やゝあけ行く
にはひ照りて
年わか水
水もきよし
水のかゝみ
澄むや心
にこるさまも

あさ日のかけ
日影たかし
日はかゝやく
さしのぼる日
國のみはた
あかつき空
明け行く空
くむわか水
くみ取る水
水のいろも
心すめり
むねも清く
あさの日かけ
照る日のかけ
照りはゆる日
はたのえるし
たかきみはた
やゝあけ行く
にはひ照りて
年わか水
水もきよし
水のかゝみ
澄むや心
にこるさまも

すきとほりて
こけしみづの
この年のほ
ことし今は
かすをかさね
かはるこよみ
つもるよはひ
年をそへて
ことほぎつゝ
心たのし
むつみあそび
たれかれ皆
ゑまひこぼれ

いはしみづの
清き水に
としのはじめ
あたらし年
年をかさね
見るやこよみ
わが行くさき
年をくはへ
いはひうたひ
いとたのしく
ともに陸み
うたひ遊ぶ
ゑみかたむけ

さもうれしげ
年立ちつゝ
年は立てり
ひなと都
人のこゝろ
おのがまゝに
みなおしなべ
引くまめ繩
まめかざりの
まめ打ちはへ
かゝみもちひ
さふにもちを
さふに汁の

この世の中
年立ちぬと
年と共に
あまつみそら
おもひおもひ
隈もあらぬ
おしなべつゝ
引くや注連の
まりくめ繩
まめをはりて
人のかゝみ
いはふさふに
屠蘇のかをり

とその袋
屠蘇くみつゝ
顔もあかく
さくらいろの
よはひを延の
これ 萬歳
くるまきしる
つかさ人の
うまの車
遠きくもぬ
雲の上にと
大みそらに
つるぞ舞ひぬ

くすりの酒
屠蘇 白散
あからむ顔
顔のいろに
これ 延年
さしるくるま
大みや人
朝賀せんとして
くもぬはるか
雲のうへに
その大そら
あをきそらの
舞ふ田鶴の音

つるの聲を
ちとせの後
千代よろづよ
三 千 歳
只けふをぞ
けふより早
このあかつき
まのゝめそら
夜は早あけ
闇にかはる
告ぐる鳥
鳥なきさて
聲いさまし

いくちとせの
末をちぎり
千々 年
八千代までも
只けふのみ
いでけふわれ
あかつき頃
あけはなれて
さり行くやみ
なるるからす
あけの鳥
からす聲す
あかつきやみ

夢もさめて
 呼びさまされ
 とりの聲を
 羽ばたきして
 鳴くや家鷄サケの
 君がみよの
 白しろみゆきて
 をさなき子の
 世のをさなご
 明け行くひま
 けふと爲りて
 すめらみくに
 やまとしまね

ねふりざまし
 はつ鷄サケ鳴く
 鷄サケうたひて
 鳴くにはとり
 東あづま 天あめ 紅こう
 大きみの世
 あまの戸明あけけ
 をさなき子こ等ら
 あくるひまの
 けさとなれば
 わが日の本
 やまとの國
 とつくに人

とつくに人も
 からのくにも
 そのいにしへ
 千代を呼ばふ
 もろ聲にしも
 聲をあはせ
 ひなのすみか
 はじめて結ぶ
 風はさむし
 まだこほりて
 雪もよひの
 うめのかをり
 鉢にかをる

もろこし人
 すぎしむかし
 神代カムヤマトのまゝ
 世の人々
 聲とよめき
 かた山ざと
 はつ夢みん
 蓬よもぎ 菜な 山やま
 氷とちて
 雪をふくむ
 春とならず
 梅ぞかをる
 梅のいろか

春告げがほ
 つばみかたき
 只ひとひら
 よはひかため
 破魔はまのゆみ矢
 つくこぎの子
 穂ながてふ名
 うらじろ草
 世をゆづり葉
 橙だいだいの實
 いかめしき角つう
 とりおひ歌
 子のかずく

むろに育ち
 いまた咲かず
 ゑまひこぼれ
 かための餅
 手毬つきて
 うつ羽子いた
 ときはみどり
 こまかき齒は朶ぼ
 子にゆづり葉
 えびの鎧
 名もかち栗
 かずの子持ち
 打つ粥づる

つるかくして
 たからのせて
 なみたひらか
 なれむつみて
 友とかるた
 克つやかるた
 いはふざふに
 めでたき海苔のり
 昆布こんぶのひろめ
 そのくしがき
 福引きせん
 取るふと箸
 つみし若菜

たからの舟
 舟のゆめを
 四海のはて
 かるたの友
 かるたとりて
 かるたの數
 ひがしの海
 海苔のりのかをり
 ゆきまのうど
 かいみてふ名
 福わら敷き
 箸はしによそへ
 四方よもぎを拜む

わが大きき
門に禮者
みやこ大路
くみかはして

鳴くはつ鳥
のぼる紙鳶の
砂を盛りて

(七)

立てしかどまつ
松をかどべに
かども清けく
かどの松がえ
いろもみどりの
常磐かきはに
松のみさをの
松をたてつゝ

立つやかどまつ
色のかどまつ
松のみどりに
立つる松竹
みどり變はらぬ
松のいろかな
ふかき色なる
あさ日影さす

のぼるあさひに
のぼりゆく日の
國のまゐるしと
くにのみはたの
にはひ照る日の
若口にみづ
澄むや心も
色もにぞらぬ
ことし又いま
變はることしの
かはる曆の
進むしわざの
年をそへく

日影まばゆき
あさ日かやき
はたのまゐるしに
今やまのよめ
くめるわか水
きよき若みづ
塵のにぞりも
くむいは清水
年のはじめに
年は變はりて
つもる齡の
年のかすく
祝ひくゝて

ひなも都も
あまつみそらの
引くやしめ繩
かいみてふ餅
屠蘇を酌む身の
屠蘇のふくろに
つかさ人行く
うまに車に
雲井はるけき
雲はむらさき
空のかぎりや
田鶴が音とほし
ちとせよろづよ

すべてかはらぬ
人のこゝろも
もちひの鏡
ざふにの餅の
むかしながらの
屠蘇の香著き
いでや朝賀と
さしる車の
くものうへ人
仰ぐみそらの
つるぞ舞ふなる
千代の末まで
よはひ千年

ちぎり千載
けふを待ちしを
いでやけふより
霜のあけがた
明けて行く夜の
あけを告げゆく
とりのはつこゑ
とりの聲々
君がみよかな
まらむ小窓の
をさな子供の
あくる間はやき
けさと爲りつゝ

八千代の末に
けふといふけふ
さむきあかつき
いつかまのよめ
あけの鳥に
夢をさまして
うたふ 鶏
かけの垂り尾の
みよに生まれて
あまの戸あくる
をさな心に
年は老いても
やまと島根の

やまと國たみ
 遠きくに
 千代をいはへる
 人のもろごゑ
 ひすぶはつゆめ
 雪をふくめる
 氷りぬにける
 春はいまなほ
 かをりおとづる
 むろに育ちし
 福壽の艸と
 はつの曆と
 破魔の弓矢を

よその國びと
 神代ながらの
 人のこゝろや
 ひなも都も
 ひなの果てまで
 ゆきをもよほす
 こほる池の面
 うめがゝ傳ふ
 梅のはつ花
 うめが香著き
 いはふ齒がため
 こゝにみ廣げて
 破魔矢つがへて

手毬つくく
 米のはだはら
 齒朶の葉うらや
 世をぞゆづり葉
 えびの腰なす
 魔にはかち栗
 かずの子だから
 たからの舟の
 たから舟漕ぐ
 幾夜なみまの
 眞帆に孕みて
 海のはてまで
 むつむ友たち

はねを飛ばして
 穂長てふ名に
 白き葉うらの
 受くるたいく
 えびを飾るも
 來るや鳥おひ
 打つや粥づゑ
 たから積みたる
 えづけき波に
 なみの枕に
 舟は走るよ
 海のかぎりも
 かるた取る手の

競ふかるたの
 のりのかをりの
 うどの香えるさ
 かゝみといへる
 われにふく引き
 柑子といへる
 太くて折れぬ
 箸のすさびに
 世々のかみ
 をがみまつらん
 烏なくなる
 禮者聲して
 空には紙鳶の

ざふに祝ひて
 結びくし
 くしにさしたる
 まつの内より
 敷く福わらの
 ことの原とや
 折れぬ箸とて
 わか葉つみつる
 神を拜みて
 烏きこゆる
 禮者ついで
 いかの昇れる
 町やちまたの

盛りし砂より

(七) 二五

松かどに立つ
 松そのみどり
 いろはえし松
 いろふか緑
 松立てつゝも
 さしのぼる日の
 そらまのよめの
 照るそのひかり
 また心まで
 とし立ちかへる
 見んにひごよみ

かどかざる松
 松ときはにて
 深みどりせり
 松立つるかど
 朝日かけして
 はたざるしかな
 わが國の旗
 汲むわか水に
 無きにごりかな
 年あらたまる
 年いとつもる

世をたのしくも
ひなみやこ皆
くまなき國の
玄め打ちはへて
うま車ゆく
うすむらさきの
つる舞ひわたる
ちよよろづよの
みよやすらけく
あさばらけなる
いでけふよりは
あけはなれゆく
あけがらす鳴く

とし立つけふの
浮く人でよる
引くしめなほの
屠蘇くみかはす
雲はるかなる
空いろにはふ
舞ふたづの聲
千代八千代まで
けふこそ祝へ
けふいざさらば
曉つげわたる
照るあさつく日
聲いさましく

ゆめ呼びさます
こゑいさましく
はや白みゆく
日の本の國
から國の人
もろごゑすなり
蓬萊山の
うす氷して
春まだ遠し
取るはず弓や
鞠つくをとめ
こぎ板としも
齒染てふ名にて

鶏こゑたかし
君萬歳と
けさ疾く起きて
とつくに人も
千代よばふなり
ゆめをや見なん
風いとさむみ
ゆきもよひなる
梅かをりて
引く破魔矢かな
はねつくをとめ
葉はうら白と
世をゆづり葉の

これだいいくの
えびかざるさへ
子のかずくを
取るかゆ杖に
なみやはらかき
取るかるたにも
昆布よろこんぶ
われ福びきの
敷かうじてふ
箸いとふとき
今このわか菜
このはつ空を
喃いび禮者

髯いとながき
名もから栗の
數いと多き
舟にたからは
波しづかなる
香はあま海苔の
松まだ残る
敷くふくわらに
いで小とのばら
いとつよき箸
けふ四方拜
やよ初がらす
いかのぼり行く

町やちまたの
くみかはしてん
かど松たてよぞ
ときはのかど松
かどべの小松に
あさ日の影して
まばゆきあさひこ
旗なるゑるしの
はや明けはなるよ
わか水くむ身の
重ねるよはひの
引くしめ繩にも

(八) 四四

盛るすな粒の
くみかはさんか
今たつかど松
みどりのかど松
ときは、變はらぬ
のぼれるあさひこ
あさ日のみはた
みくにの旗かけ
匂ひぞ照りそふ
こよみももろ共
いそしみたのしみ
屠蘇くむ此方の

朝賀にのぼれる 雲井のはてにも
 からすの聲々 にはとり鳴くなり
 わまの戸開きて やまとしまねの
 とつくに人にも 神代のむかしを
 蓬 黍 山 中 みるにて咲きぬる
 梅が香しほらし はま矢とはま弓
 てまりをつさく ほだはら裏しろ
 ゆづり葉たいく 飾りのえびにも
 人にはかち栗 鳥おひうた聞く
 敷の子かすく 四海に波かせ
 波かせなき世に むつみたのしみ
 祝ふや雑煮の いそしむ田つくり
 かくばし海苔の香 雪間をわけたる

つらなるくし柿 鏡のもちひを
 福わら打ちしき 手に取るふと箸
 ことしの若菜を 禮者も絶えせず
 ひらひら昇れる 津々浦々まで
 もり砂きよけき さかづきはして

(八) 三五

まつ深みどり 松の色ふかし
 あさ日まばゆくて みはた影なびく
 はま矢破魔弓に いはふ雑煮かな
 海苔の香芳ばし 敷ける福わらに
 砂をもりつゝぞ かはす杯を

(八) 五三

深みどり松の 色ふかき松の

まばゆくも旭 旗影ぞなびく
 破魔弓を取りて いはふ哉雑煮
 芳ばしき海苔の 福わらを敷きて
 もり砂も清く 杯をかはす。

(九) 四五

門まつ色ふかし みどりの門松に
 まばゆき旭日影 なびくや旗影の
 はま矢をはま弓に 雑煮を祝ふかな
 甘海苔かうばしく 福わら敷きてけり
 清げにもり砂を かたみに杯を

(九) 五四

色ふかき門松 深みどりせる松
 まばゆくも旭 旗影はなびきて

破魔弓に矢つがへ 祝ふかな雑煮を
 芳ばしき甘海苔 福わらを敷きなし
 もり砂も清げに 杯をかはしつ

(五五)

〔應用〕

かどまつの ふかみどり
 みどりなる かどの松
 ときはなる かど松や
 いで松よ われもまた
 かどに立つ 松に問ふ
 照りわたる あさ日かげ
 影は立て あさ日この
 日の御はた なびきけり

はづかしや にひごよみ
屠蘇くめば 老いもさすが
とその香の えるきかな

(五六)

つかさ人雲井さして
つかさ人のぼり行くか
さしり行くうまの車
うまぐるまさしり行けり
雲の上のはるかあなた
はるかなる雲のあなた
むらさきのそらのかぎり
むらさきの雲はとざす
あをそらに田鶴は舞ひて

たづは舞ふ空のあなた
ちとせまでやがてわれも
千代かけて契るおもひ

(六五)

つかさ人のぼり行く
千萬年のちまでも
とほき國のはてまでも
よろづ世まで變はらじな
八千代までもちぎらんを
神かけてもいのるかな
けふはわれも衣をかへ
けふはわれも身を清め
けふと云へるけふの日に

さらば今日をむかへなん
年のもとのけふなれや
いでやけふをたのしみて

(六六)

あけのからすはやく名乗る
聞かん鳥なれのうたを
あけて行けるむねのおもひ
あけを告ぐる鳥の聲に
あさ日かげは山にさして
君がみよの祝ひとなふ
夜のまはやく白みゆけば
あまの戸よりさしや来る
あくるひまもあらぬ思ひ

起きて見れば赤き影の
やまととどろ斯かる時に
とつ國人いかに見つる

(五七)

から國の人もめでなん
いにしへも然は云ひけり
神代よりそのまゝにして
神代より残るおもかげ
人々のもろごゑして
やま里も早くあけなん
やま里はみやこのさまも
初ゆめに何を見るらん
こゝのへの雲井の庭に

九重もひなの伏せ屋も
蓬萊のやまをうつして
蓬萊をこゝに見るかな

(七五)

年はかはれど風さむみ

風いとさむみ笹原の

小笹原までおよぶかな

まだ解けやらぬ厚氷

身こそわなよけ雪ぞらの

雪げのそらに冴え返る

まだ春とほき山のへの

山の麓はうめが香の

むろ咲きのうめささかけて

腰には弓を張るかざりえび

やがては敷の子のふるくゝて

かはらすなれむつむ四つの海

◎ 雪 ◎

〔語 句〕

(五)

玄らゆきの はつ雪や

あわゆきに はだれ雪

ふいさして ひつの花

玉のちり 雪はふる

ゆきなだれ なたれして

粉雪ふる こゝめ雪

こぞの薫りの鉢のうめ
名さへめでたき福壽草
むかしよりして齒固めの

(八六)

はま弓はま矢をつがへもちて

をとめの一むれ手まりつくよ

はこいた重げに持ちて立てば

みのれよ穂だはら米のたはら

穂長といふ名もながき因み

葉うらも白さは變へぬ色を

(九五)

まご子のすゑまでも譲り葉の
かど無きだいにくによそへても

やまおろし 雪をれの

雪ざゝや 雪の竹

雪消しの ゆきあたり

雪まき 雪ぞらの

雪ふくむ 雪をもつ

雪に暮れ 雪に明け

ゆきもよひ ゆきげなり

ゆきかこし ゆきやけや

雪の筭 雪ざをに

ゆきばかり 雪踏みて

雪をわけ ゆきつぶて

ゆきうちや 雪まろげ

ゆきを見ん ゆきぐつの

ゆきだるま	ゆきぼとけ	ゆきの水	ゆきおろし	雪どけの	雪の花	きえがてに	いやがうへ	ふるまゝに	雪の山	大ゆきに	ゆきかきの	ゆきの朝
ゆき布袋 <small>ふくろ</small>	雪のはだ	ゆき垣や	雪とけぬ	消ゆる雪	きえのこる	きえやらす	つみつもる	ふりつもる	庭のおも	雪かけば	雪をれの	ゆきの夜 <small>よる</small>
ゆきの夜 <small>よる</small>	日かすへて	けぬが上 <small>うへ</small> に	ふりつくし	ひとつにて	ふみわけて	宮、ふせ屋	窓の戸を	待つ雪の	たわみつゝ	えろたへの	うづもれて	道もなし
ゆきの夕 <small>ゆふ</small>	ふりかゝる	きえもせず	ふりくらし	野も山も	かき分くる	のきのうへ	あさとでの	初みゆき	たわむまで	ましろにぞ	枯れ木にも	宿も無し

かげもなし	いづこぞと	月さえて	やまざとの	吹きまきて	くれ竹の	ねや寒さ	うす雲の	めづらしく	人も無し	人とへば	見るまゝに	跡たえて
かたも無し	水くろし	鐘の音も	きた風に	夏むしの	ともし火を	うす墨に	遠山の	くるしみは	みやこ人	花ふゞき	いりあひの	をれしける
みやまぢの	かやはねば	高根より	うづみ火を	よるのもの	風さむみ	鳥のはね	絲のみち	はらくと	しをりさへ	しろかねの	しろぬのを	きゆる花
下をれの	一すぢの	ふきおろす	あつぶすま	しひ柴を	ねやの戸を	六 <small>む</small> 出 <small>し</small> の	ほそき道	時ならぬ	白 <small>しろ</small> さぎの	玉の屑	花ならで	まつかげの

おくやまの
ゆきくれて
たゞくくと

ふみまよふ
行きなやむ
すゝまねば

(六)

雪はつもり
つもる雪の
あとは絶えて
人も來ねば
ふいき音す
おこるふいき
ふいき立つや
そのはなびら
六ひらの花

雪はつみて
雪にあとの
絶えて人の
ふいきする夜
ふいきはげし
さむしふいき
ふいきすとし
六つなす花
花は六ひら

身はこゝえて

そらも寒げ

そらは 鼠

うす墨いろ

はや雪ぞら

雪をふくむ

ゆきにくもる

ゆきに沈む

雪もつそら

ゆきに暮れて

ゆきもよほす

雪となりて

ゆきげなるを

雪をふみて

ゆきをわけて

ゆきのはたえ

雪を垣に

雪はとけて

ゆきどけ水

ゆきどけどろ

はやく消えて

なごりなくて

つもるま無く

たちまち消ゆ

消えもえせず

いやがうへに

かをりなきを

香なき花よ

小雪まじり

雨をくはへ

いたびさしに

ひさしうちて

なだれしつゝ

音のきこゆ

高きひいき

吹きちらされ

風にちりて

舞ふや風に

うづまき飛ぶ

ともへなして

巴の字なして

ふりしきりつ

ふきめぐらし

飛びめぐりて

粉雪まじり

ゆきをれ竹

雪にをれて

をるゝこゑの

竹あへなく

うづめられし

うもるゝ笹

雪にあたり

つみまさりて

ふれふれふれ

雪かきわけ

雪をれ無き

ゆきのあさげ

ゆきの夜半に

ゆきのゆふべ

川もやまも

みねも谷も

ふみわけても

かきも分けず

ふせ屋の軒

軒のたるひ

のちに近く

まどうつ音

さらくうつ

ふるを待ちし

枝は撓み

みなしろたへ

すべて眞白

うもればてぬ

枯れ木に花

花のこすゑ

木々の花

時ならぬに

道もたえて

宿もまれに
水黒すむ
かねのね冴え
吹くきた風
あつのみしの
ねやの板戸
とほやまのは
みやこ知らぬ
人も訪はぬ
花と見る
人あと絶え
伏せる尾花
下をれの葉

かげもあらぬ
月はさえて
かた山ざと
風吹きまき
日はくれ竹
くもは薄し
さもめづらし
くるしみ無き
とふ人なき
やゆふぐれ
折れしをばな
やまのおくの
かよひこねば

足すゝます

(七) 三四

たどりく
つもるしら雪
つもりくく
積みてふみよむ
人のあと絶え
人も訪ひこす
山のすみかに
音やふいきの
そゝる寒さの
すごきふいきに
春の花には
花は六ひらの

ふれるあわ雪
雪をつみける
雪には人の
あとは絶え行く
やまのほりに
ふいきさまく
吹雪鳴りつゝ
ふいき立ちぬる
ちるや花びら
花にあらねど
不香の花と

ひとすぢ道
あつきふすま
風をさむみ
鷺毛飛びて
いと如き
いとひと筋
はらく降る
まをり見えで
まがふ鷺の
玉の粉散る
まつのかげに
やました庵
やどる家も

炭さしそへ
折りたく柴
風をあらみ
六出の花
はそき道の
いとほき道
時ならぬに
ゆきに紛ふ
銀のすなご
しろき布を
おく山のべ
あとにつきて
なやみくらす

人は不香と
小雪まじへて
そふる力の
板屋のひさし
窓にあたりて
あだれ音しつ
ひいき聞こゆる
風にちらく
まくや渦うづ
巴となりて
めぐる巴の字の
めぐりくく
竹やをれけん

かをりなき花
雨もくはより
雨もちからを
こほりぬにけり
窓にさらく
あだれ落として
ちるや吹雪の
風に舞ふく
めぐる渦まき
巴字くるひて
ふりみふらすみ
粉雪となりて
竹の折れてや

雪にしほるゝ
 竹もまがりて
 うもれはてたる
 雪になやみて
 さむき大そら
 雪になり行く
 ゆきを孕みて
 おとは沈めり
 ゆきに暮れゆく
 ゆきの肌てふ
 ゆきのしづくの
 水になりぬる
 はやきあわ雪

折れてぞ音の
 竹はあへなく
 雪の根笹を
 こゝえはてつゝ
 うすき墨いろ
 今は雪よと
 曇るふゝきの
 そらの色さへ
 ゆきを胃して
 つくる雪垣
 とけては水に
 はやく消えゆく
 なごりあらねば

雪のあかつき
 ゆきのあけがた
 ゆきのゆふぐれ
 ゆきの真夜中
 雪をたよりに
 ゆきにうもれて
 ふみも分けなん
 玄づがふせやの
 のきを埋めて
 まどにさらく
 たわむ小枝の
 うもれはてたる
 花のさきぬる

雪のあけぼの
 雪にあけゆく
 ゆきに夜なく
 雪をあかりに
 川も野山も
 雪にけふりて
 かきも得やらず
 のきに近づく
 ゆきゝとたえて
 年のみつぎと
 はても見わかぬ
 木々に花咲く
 時にあらぬに

道もたえく
 水は黒ずみ
 かげも得見えす
 あをき月しろ
 山に住む身の
 すさふ北かせ
 くるゝ冬の日
 ふすまこほらん
 山のはしろき
 ひなのくるしみ
 人も絶えく
 をれて伏したる
 道のひとすぢ

宿もまれなる
 影ものこらす
 さゆる月かけ
 かねの音する
 あるゝ北かせ
 蟲の羽おとか
 まくら寒けき
 雲はまよひて
 いかにか都は
 たより絶えたる
 枯れしをばなに
 絶えしかよひぢ
 炭はそへても

こほるふすまの
 柴も盡きぬる
 鶯毛となりて
 道はさながら
 ほそき一すぢ
 つゝく一筋
 道はうもれて
 時にあらぬに
 道のしをりも
 見えもえわかぬ
 まがふしら鶯
 玉の粉吹くや
 まつのした陰

柴を折りたき
 かゝる山家に
 むつの花ぞと
 絲の一すぢ
 かよふ一筋
 絶えて一すぢ
 降るかはらく
 玄をりせる道
 玄をり絶えたる
 まがふしら雪
 銀をちらして
 布はしらたへ
 まつのみどりも

山の奥なる
あとに續かん
悩むのみにて
道もすゝます

(七) 二五

ゆきつもりきぬ
あわゆきの降る
人あともなく
ふみよみし人
人訪ひもこず
山あひのいは
なほふいさして
身にしむさむさ

庵いほにすむ身の
いへぢいづこと
たどるのみにて
足もかくれつ

ゆき吹きまきぬ
とは山のはも
あと既に絶ゆ
とふ人も無し
やまおそく暮る
すむ人もなき
その音や何
花と散るなり

はる咲く花の

花ならねども
かつ風をそへ
いたびさしにも
すはなだれよと
風いとあらみ
渦吹きまくや
風吹きまきて
巴はの字のめぐる
竹をるゝ音
折る力こそ
あへなく竹の
手もこゝえつゝ

春はづかしき

香かは無き花と
あめまた添ひて
窓うつおとの
聞くほどもなく
舞ふく風かぜに
渦まき立てゝ
まく巴はかな
粉と飛びゆく
竹たふれけり
こゑひくくなり
ゆきなやみつゝ
はやくもり行く

おと洗むなり
肌のいろにも
谷水ながら
あけがた近き
夜なくくろす
さよつげわたる
のき見えぬ迄
枝たわみゆく
花とも見えぬ
宿とるかたも
水くるみゆく
かげ見えぬ迄
おとするかねの

くれゆく空の
その一しづく
無きなごりかな
ゆふぐれ近き
うき身にいと
野も山川も
まど打つおとの
はて無きはてを
たえくゝとなる
いろ黒みゆく
影やいづこと
かね音ねすこし
山すみの身の

北よりおろす
蟲ならなくに
山路のゆきの
ひなゝらなくに
ふす尾花にも
ひとすぢ道を
をりたく柴や
とりの毛と飛ぶ
絲ならなくに
道はかぢらぬ
櫛かみうごきえで
たゞしろたへの
身のうへとしも

北よりあるゝ
雲たちまよふ
見ぬみやこぢの
かれ尾花をぞ
みち絶えにしを
炭さしそへて
見ぬ世のむかし
花にもまさる
絶えはてし道
馬すゝまねば
玄ら鷺のむれ
皆しろたへに

(八) 四四

つもれる白ゆき	あわ雪ふれども
つもりにつもりて	ふみよむ昔の
人あと絶えはて	絶えゆく人あと
とひくる人無き	人無きやま里
山路のゆきの日	吹きまくふいきに
散りては花とも	花とも見ゆべき
むひらの花なす	不香の花かな
かをらぬ花かな	ふいきを交へて
ちからを添へたる	窓うつ音にも
舞ひく散り行く	巴 <small>ま</small> 字 <small>じ</small> 加
真竹は折れつゝ	曲がりつくねりつ
あへなく埋れて	根笹にふりつむ

なやめる姿の	こいえし有り様
沈みて聞こゆる	雪垣むすびぬ
まづくか滴る	名ごりも盡き得で
うす雪ふるらし	あけがた告げつゝ
雪ふる夜なく	野末も見わかず
うもるゝ下枝の	しづえは跡無く
ふせ屋の軒ばの	軒さへうもれて
とだゆる人影	枝さへたわゝに
花さく梢の	宿さへまれにて
黒ずむ水いろ	さえ行く月かけ
照りそふ月しろ	かねの音沈めり
北かせ吹きあれ	蛾 <small>む</small> とかいふ蟲
はや暮れゆく日の	氷りのふすまに

(八) 五三

折りたく柴無き	鶯毛 <small>うら</small> を散らして
六出の花さく	かよひぢ絶えつゝ
只ひとすぢ道	葉も見わかぬ
鶯とも雪とも	まろかね散らせる
ひときは緑の	みどりの山松
はかどる由なく	家路 <small>いへぢ</small> はいづこぞ
馬さへすゝます	行くては遠きを

山かせのちから	雪おろし強し
吹きおろす雪に	ふいさする夕
舞ひく散るを	渦 <small>ま</small> にまく <small>ま</small> 字
竹いつか折れて	柳のみひとり
葉も見えぬ根笹	たく柴も盡きぬ

(九) 四五

つもる峰の雪	わづか泡雪の
人のあと絶え	人も無き里の
山路只ゆきに	ふいき烈しくて
花と散る雪の	花と見ゆる哉
かをり無き花の	風に助けられて

さまよふ雲の色	根笹の影も無し
なやめる姿のみ	こいぬしちらしさ
今見つる雪垣を	またくる一しづく
山路の雪の夜	野末も見わかず
下枝はうもれば	伏せ家の軒端かな

(九) 五四

軒ちかきしら雪 たえ果てし人影
 大枝もたわゝに 花のさく梢と
 水の色くろすむ 照りはえて新月
 かねの音遠かり 吹きあゝ北風
 窓をうつ夏むし 只たよる一すぢの

〔應用〕

(五五)

まらゆきの	風に乗り
はつゆきの	降りそめて
しらゆきの	ふれる里
ふいき聞く	ねざめかな
道に散る	玉のちり
山うごく	雪なだれ

(五六)

粉雪ふる	そでのうへ
こゝめゆき	えだを打つ
加へ行く	やまおろし
ゆきをれの	竹かそも
さすがにも	雪の竹
骨までも	雪ぞらの
雪ぞらの	寒さかな
雪ふくむ	くもの色

暮れおそきゆきのゆふへ
 まだ暮れぬゆきの夕べ
 あけやすきゆきのあした
 はや明けぬゆきのあした

ゆきざをに深さはかり
 ゆきばかり今は立てつ
 ふみ分けてきたる人も
 訪ふ人もあらぬ山家やまが
 ゆき打ちにさとの子ども
 雪まろげ寒さ知らず
 ゆきをんな小夜さよは更けぬ
 ゆきぐつつの跡をとむ

(六五)

いでやつくれゆきたるま
 寒さ知らぬゆき布袋ぶくろ
 ひやゝかなりゆきの肌
 ゆきの水は雪を解く

(六六)

よはの山にゆきおろす
 雪はとけぬみなみより
 ゆきどけ水ゆき知らず
 消ゆる雪に何ちぎる
 冬はこれか雪の花
 かきの本に消え残る
 ふりもふりていやがうへ
 雪の山路たゞひとり
 ゆきの山に釋迦はこもり
 庭のおもは只しろたへ
 人は絶えしやまのみゆき
 雪をかきて子ども騒ぐ

ゆき搔くまゝ雪ふるまゝ

音はかなし雪をれ竹

ゆきのあした何をかくる

夢も成らぬゆきの夜よるに

ゆきのゆふべひとり住みの

枯れし草にふりかゝりて

けぬがうへに又ふり來て

けぬがうへにふりかさみて

(五七)

降りくらしきのふもけふも

野もやまも只ひとへにて

ふみわけて訪ひくる友の

かき分くる人もあらねば

駒といむべきかげも無し

笠やどりするかたも無し

こよひの宿はいづこぞと

ながれもあへで水黒し

月さえわたる雪の夜に

雪に照りそふ月のいろ

かねのひいきにしづみ行く

雪にうもれし山里の

(八六)

ふきまく山かせ雪をおくり

ふいきに暮れゆく山の北に

ともし火はるかにかすむあなた

うす墨流せるすその水に

宮ふせやおなじいるなる

窓の戸を蟲ならなくに

むしならで窓の戸をうつ

とよとしのあれと祈りて

なよ竹のえだもたわゝに

たわみたるした枝の

まろたへにふりつもりけり

庭のおも只ましろにぞ

(七五)

そのした草もうづもれて

枯れ木に花もさきにけり

たどり行くべき道も無し

足をとれぬ宿も無し

立ちては迷へるうすき雲の

とは山ほのかに夕日あびて

(九五)

めづらしとのみ見るみやこびと

くるしみ知らずして山ざとの

とふ人あとなえし山ざとの

散るく花ならぬ花ふいき

まづめるいりあひの鐘のおと

◎立 春(リッ)

陰曆で正月の節陽曆でおよそ二月三日あたりの日、この日から春となる。

〔備考〕

○節分(フヅ) 立春の日のとなへ。あし(あし)の矢、桃の弓などの故事が有る。
 ○あし(あし)の矢 むかし節分に妖鬼を逐ひはらふとて葦でこしらへた矢を射る式が有つた。その時の弓は桃の木で造つたものといふ。
 公事根元(及び雜説)「けふ(陰曆十二月晦日)はなやらふ夜なれば、大舍人寮鬼をつとめ、陰陽寮祭文をもて南殿の邊につきて讀む。上卿以下これ(あし)を逐ふ。殿上人ども御殿のかたに立ちて桃の弓葦の矢にて射る。

仙華門より入りて東庭を経て、瀧口の戸に出づ。こよひ御前にもし火多くともす。東庭の朝餉(あさぐい)臺盤(たいばん)所の前(まへ)のみぎりに燈臺をひまなく立てゝともすなり。追儼(つゐん)といふは年中の疫氣をはらふ心なり。鬼といふは方相氏のことなり。四目有つておかしげなる面(めん)を着て、手にたて鉾(こ)を持つ。……慶雲二年十二月にはじまれり。『今は只ひとよに爲りてあしの矢の射るが如くに年ぞくれぬる』内大臣。
 ○なやらふ 前に引用したる公

事根元の文にも見えた語、かに(鬼)やらふ(遣)の義、すなはち鬼を逐ひやるとの心。おなじ心で漢語で追儼(ツギ)といふ。
 ○豆まき 今日は大かたすたれたが、尙すこしは風俗として残るのは節分の夜にあたつての豆まきである。大豆を火で熬(い)り、一家内の一男子がその大豆を四五粒づつ戸口、その他すべての出入り口などに蒔(ま)きちらし、それで一切の邪鬼をおひはらふものとする。要するに古代のなやらひの遺風で

ある。
 ○福は内 前云ふごとく豆まきを行ふにあたつて呼び聲とする句、曰く「福は内、鬼は外」つまり悪鬼をはらふとの祝詞である。
 ○柊(ヒヤ) 鬼を防ぐためのものとして、前示すごとく豆まきを行ふ家で、節分の日柊の枝を切つて戸口其他の出入り口などに挿む。その柊の枝にはあかいわしをさす。
 ○あかいわし 古糠に漬けた鱈四五分ぐらゐの長さ、に刻んで柊の枝にさし、戸口もしくは一切の

出入り口にはさむ。節分に豆まきを
をするやうな家で行ふもの。

◎ 磯 菜 (イソ)

磯邊にはえたる若菜のとなへ。磯の
菜といふだけの意味でいそなと
云ふので、別にいそなといふ一種
の菜の有るのではない。實はさし
て取り立てゝ云ふほどのもので
もないが、只その言葉がうつくし
いゆゑ、用ゐるやうによつては確か
に韻文の用語となし得るまゝ、こ
とにこゝに擧げたのである。

◎ 春 寒 (シュン)

春の節となつても猶のこる寒さ
のとなへ。それゆゑのこるさむさ
ともいひ、漢語では餘寒(ヨウカン)とも云
ふ。別に漢語で殘寒(ザンカン)とも云ふ。こ
の殘寒はさして普通むきと云ふ
べき語ではないが、美文に用ゐる
ものとして、すなはち韻文に用ゐ
ても差し支へない。所によつては
餘寒よりなほよろしい。餘寒は響
きが弱いが、殘寒は強い。但し、こゝ
に主題としてしるした春寒(シュンカン)
にある。

◎ 鶯 (ウ)

〔備考〕○鶯のかひこの中の杜鵑(キトウ)
杜鵑はおのが卵を産むにあつ
てそれがため他の鳥のやうに巢
をこしらへず、却つて鶯の巢の中
へそれを産むとか云ふ昔の云ひ
傳へが有る。鶯は他の鳥の卵がわ
が巢にあつたとも知らずやがて
雛とならしめて、大におどろくと
か。此云ひつたへを本として、すべ
て親に似も付かぬ子の出来たこ

はこれを韻文にそのまゝ用ゐる
時はそのシユンカンと云ふ言葉
の響きが他に混同しやうい同じ
やうな語を多く持つため、よくよ
くの場合ひのはかは自然その意
味の理解を手ばやくするどく人
に與へる力がむしろ乏しい。古人
は既にこれに懲りた。それで古人
は(特に俳諧者中の達眼の人は)つ
とめてシユンカンと用ゐるのを
ば避け、この代はりはるさむと文
字どほりの直譯にした。かれらの
是等の用意は大に敬服すべきで

との比喩などにする。美文に用ゐる材料としては如何やうに用ゐても中々面白いものになる。既に古へのまらべにも次ぎのとはりに、「うぐひすのかひこの中にほととぎすひとり生まれてわがちよに似ては啼かずやわがはよに似ては啼かずやその花の咲ける野邊よりとびかへり……………」

○人くと鳴く。人くは人來即ち人がくるとの義。人く(ヒト)と云ふのは鶯の啼き聲を模した音すなは

ちそのやうに模して「人が來ると」の意に利かせたもの。古今集うめの花見ることきつれ鶯のひとくくといとひしも居る。大和物語「よもぎおひてあれたる宿をうぐひすのひとくと鳴くや誰とかまたん。また是からして鶯にあてよ。ひとく鳥」との異名も出來た。

○鶯の笠に縫ふ梅の花。鶯が梅の花の咲いた中を行きくわりして飛ぶのを鶯が花をわが笠に縫はうとして「あらうと形容していふとなへ。古今集、東三條左大臣、抄和泉式部、春は早ころになりゆく山里のよきに來てなげげふはなみどり。」

○みよめ鳥。鶯の異名の一。秘藏抄、公忠「みよめ鳥きつゝなくなり、わがやどの八重紅梅の花ふみちらし。」

○さよへ小鳥。鶯の異名の一。赤人の歌にあつたその用ゐやうから推して鶯の親のとなへかといふ。秘藏抄、赤人「垣根つたふさよへをとよりよ早行きて、うぐひすさそへ春のまうけに。」

「うぐひすの笠に縫ふてふ梅の花をりてかぎよん老いやくるやと。」

○はる告げ鳥。鶯の異名の一。

○谷の戸出づる。春の陽氣を知ると共にそれまで鶯は山さもりして居つたのが、その巢の在った谷から出るとの昔からの云ひつたへに本づいたとなへ。その本は詩經にある。曰く「出幽谷遷喬木」また此意で、古今集、大江千里「うぐひすの谷より出づる聲なくば春くることを誰か知らまし。」

○はなみ鳥。鶯の異名一、莫傳

○にはひどり 鶯の異名の一。篠目抄、雪もはや消えがてになる山里にめぐらゝくに啼くにはひどり。

○といめ鳥 鶯の異名の一。色葉和難、ある人の家に紅梅のめでたきが有りけるを、國王きこしめして、勅使をつかわし、堀らせたまひけるに、その梅にうぐひすくひたりければ、『勅なれば梅はをしますうぐひすの宿はと問はいか』答へん、『梅のあるは斯くよみて奉りければ、みかど哀れがり

てといめたまひけり。それより鶯をとといめ鳥といふと、右、色葉和難の云ふところは歌聖紀貫之の娘のことを、何ゆゑか知らぬが、ある人とのみして書きしるされたものである。傳説によれば貫之の娘に右色葉和難にある人のと云ふされたと同じ事跡が有ったと云ふ。而もまたその傳説の方では、勅なれば梅はをしますでなく、勅なればいともしこしと爲って居る。いづれでも宜しいやうなものと、序ゆる一言する。

◎梅

〔備考〕

またといめ鳥といふ異名を右の事實から付けたとしても、まかし其語の作り方の拙ほとんど取るに足らぬとしか云へぬ。いづれかと云へば、何か特殊の必要の無いかぎり、右のやうな語を韻文に用ゐるのは全く好ましくないものである。

○經よみどり 鶯の異名の一。その鳴く聲が法……法華經と聞きなされるところから、即ち經をよむ鳥との義は用ゐなしたものである。

梅にいろゝの種類が有ると共に、その名目もまたいろゝ有る。その名目は所によつて韻文に用ゐて大いに趣味も有る。その主なるものを示せば、次ぎのとはり、○白梅(びやくばい) 純粹の日本語としてはシラウメと云ふ。すべて一般の人の知るとはり、只その花が白くさへあれば、即ち云ふだけの名目である。まかし主としては白色一

重咲きのものを云ふ。よし白色でも二重以上の咲きかたならば、それ／＼又名目も有る。

○紅梅(ベニ) 純粹の日本語は無くおもに漢音のまゝに云ふ。是も一般の人の知るとはなり、只その花が紅色でさへあればすなはち云ふだけの名目である。まかし、區別の必要から、うす紅梅といふ名目も出来て居る。以上は單に紅梅と云へば薄紅梅より紅色が濃いものとの意味になる。

○寒紅(カン) ○寒紅(カシ) ○寒紅

さしはさんだとの故事でえびら梅とも云ひ、又おなじ心でかぢはらうめとも云ふ。

○座論(ザ) ○座論(ウメ) ○座

論梅(バロ) 花ならば花、實ならば實、共に一つ本に集まつて出るもの、紅、白、八重、一重、ともに有る。花のみさうして咲くものを花ざると云ひ、實のみさうして生るものを實座論(ウメ)と云ふ。

○鴛鴦梅(ウヰ) 前に示した花ざるとの漢名

○品字梅(ヒン) 前に示した實ざるとの漢名

の梅 一重咲きで色きはめてあざやかに紅色をあらはすもの、寒中から咲く。

○未開紅(ミカイ) 開かぬうちは紅色を示し、さて開いた所で色がきはめて薄く見えるもの。たゞし、八重の大きき。

○江南(カン) 紅色で八重、花びら大きく、あるひは白の差し交せも有るもの。上品とする。

○えびら梅 紅色で大きな八重、花はすべて下を向くやうになつて咲くもの。梶原景季がその箴に

んの漢名

○鶯宿梅(ウヰ) 前鶯の條、「といぬ鳥の項にしるした貫之の娘の歌を故事として命名されたものであるが、實際空名らしい。植ゑ木師によつていろ／＼に云ふ。歸するところ、白梅の一種で、一重もあり、八重もあり、花の香は殊にすぐれて居るものと皆云ふ。何ぞとか、是だけの説明では名品とするほどの梅の卓絶した特色を示すことはならぬ。あせと云ふに白色の梅で、一重も八重も有るといへば、そ

の段において何れの白梅も皆さうである。香がことにすぐれて居ると云ふにもせよ、その所謂ことに、「すぐれ」などはあらかじめ先何を比較の標準としてのことか。まかし、説明するそれらの人々は茲に至って明亮な答へを與へ得ぬ。

思ふに鶯宿梅の名は貫之の娘の歌を本として、只名品とすべき梅に對して美稱とした丈のものであらう。それを後世に至って、さも別に鶯宿梅と云ふ名を冠せる

べき一種の名木が有るかのやうに思ひなした結果は牽強附會となり、さも一の他の別種の梅でもあるかのやうに云ひなすに至つたものらしい。世の人の一般も只それゆゑさう、即ちその位に心得る丈で難は無さうである。

○とび梅 紅梅の一種、中りんのもの、傳説によれば菅原道真が筑紫の配所に在つて、こち吹かばの歌を詠じたところ、その心に感じ、道真の都の舊宅の梅がその配所へ飛んで行つたとか。この傳説

もとより道真の「こち吹かば」の歌を本として何人かに作り成されたものに過ぎぬが、まかし、賦詠の材料としては十分趣味の有るものである。今、紅梅の一種の前記のやうなものを「とびうめ」と云ふのも元より只それらの傳説を本とした丈のものである。

○豊後梅(ウツギ) 豊後梅(ウツギ) うす紅の、大りんで八重に咲き、實もよくなるもの。

○常生(トシ) 一重の白梅の一種。その實が秋十月十一月ごろまで青

々として枝に着いて居るもの。

○源氏(ウツギ) 紅梅の一種。花のへりが白くなつたもの。一名は「たじろ」。

○まだれ 〇まだれ梅 白梅の一種。一重に八重も有る。木が柳のやうにまだれるもの。

○鎗梅(ウツギ) 實狀不詳。うす紅色のもの。と云ふ。

○にはひぐさ 〇風待ちぐさ 以上ともに藏玉集に梅の異名として載せた語。

○かざみぐさ 莫傳抄、および藏玉集に梅の異名として載せた

語。一藏玉集「やま里の軒端にさけるかざみぐさ色をも香をもたれ見はやさん。」

○か。は。へ。ぐ。さ。藻鹽草の説梅の

異名、「みやまには深雪フシユキふるらし

難波津はうら風しほるかはへぐ

さかも。」

○み。ど。り。の。花。秘中抄、および藻

鹽草などの説梅の異名。たゞし、實

は、受け取りがたい。

○花。の。兄。梅の異名。春のいろい

ろの花の魁となつて咲くとての

となへ、宋の黄山谷の詩に「山礬是

もの。

○疎影横斜。明の高香邱が梅を

詠じた詩「疎影横斜水清淺、暗香浮

動月黄昏」とあつたのから本づい

た語。ほとんど梅の異名のやうに

なつて用ゐられる。

〔語 句〕 立春、磯菜、春寒、

鶯、梅、五題共通、

(五) はる立つ日 風さむくして

けさ見れば 春はきにけり

けふよりは きのふまでとは

ほども無く のどけくもまた

はや大そらも やようぐひすの

弟梅是兄とあるのに、いくらか、據

つた稱へか。

○この花。梅の異名。王仁、「なに

は津にさくやこの花冬でもり今

をはるべとさくやこのはな。」

○はる。告。げ。草。藏玉集の説梅の

異名。「みよし野のはるつげ草の

花のいろあらぬ梢にかゝる白く

も。」

○う。め。ご。よ。み。「梅是山家曆」とい

ふ古詩の句に本づいて云ふ語。梅

の開くので春の來たのが分かる

とて、すなはち梅を曆と見立てた

氷こほりとけつゝ 雪こほりはとけつゝ

はるかかせの 日のいろかすむ

吹く東風こちの いま春にしも

たなびきて 人をゝるさへ

うすがすみ あけて行く日の

あさぼらけ のぼる日かげの

いづる日の ひさかたのそら

雪間ゆきまより うぐひすのこゑ

花のいろ 霞みそめつゝ

吹くかせも ながきはるの日

氷 むし たるひもとけて

いけみづに をちかたの山

みねの雪 とほやまもなし

のこる雪
 はるのいろ
 さいなみの
 花のゑむ
 はるかぜの
 たちかへる
 はな鳥の
 やまかせは
 はだ寒し
 節分と
 あしの矢の
 おにやらひ
 そのかみの

ふゆごもりせる
 うちなびきつゝ
 鳥のこゑして
 あけぼのものがな
 はだごゝろよき
 あまの戸あくる
 いさゝ小川の
 雲の花さへ
 花のくもりか
 豆まきてしも
 もゝのゆみとる
 追儼する人
 ふくは内とて

呼ぶこゑに
 ひららぎの
 あかいわし
 ふるとしの
 はる寒み
 はや餘寒
 なほのこる
 しむ寒さ
 霜はまだ
 はるの霜
 あかつきは
 うぐひすに
 山おろし

おにはそとぞと
 いらくしくも
 まがつみを去る
 いそなを摘みて
 はるさむしとて
 のこんの寒さ
 肌にしむらん
 まだ霜のいろ
 霜白くして
 霜に萎ゆめり
 花の夢かな
 きのみまでこそ
 たゞ名のみにて

さえかへる
 とけやらぬ
 あられさへ
 春來ても
 春あさみ
 さく梅の
 袖に雪
 ささらぎの
 閨の戸の
 はるの雪
 風さゆる
 野の草は
 谷の戸を

そらもなほまだ
 まだ花もなき
 あつごほりせり
 こほれるをとく
 かけひにはまだ
 あさぐもりする
 ゆきげなるそら
 はださむしこの
 ふる雪の夜の
 花を待つ身の
 うづみ火をのみ
 くれ竹の夜半
 人來とてなく

花笠に
 くいり行く
 みたにより
 山あひの
 舌慣れぬ
 はづかしく
 羽風にぞ
 經をよむ
 やぶそだち
 夜をこめて
 笹なきの
 うひくし
 はや來鳴け

笠に纏ふてふ
 谷ふかみまだ
 春とざす山
 さとなれぬこゑ
 えぶるこゑにも
 聞くたびの此
 はる告ぐる鳥
 法華經の名の
 ふる巢よりで
 やぶかげになく
 なよ竹のかけ
 時よりして
 あくがれてしも

籠のうち
 はつねをや
 あかつきに
 木づたひて
 去らうめと
 白梅はくばい花はな
 くれなるの
 かぐばしき
 つくし湯
 とびうめと
 ささがけて
 この花と
 神がきに

籠なれぬかな
 ねをもらすめり
 初こゑにして
 去るたへの花
 白梅はくばいをこそ
 紅梅べんごうのいろ
 香かほに匂ふかな
 寒紅かんこうのうめ
 筑紫ちくしまでさへ
 花の兄とも
 難波津なんばつに咲く
 春つぐるとて
 只かをれかし

風かをる
 風しろくして

〔應 用〕

はるたつと いふけふ(五)
 けふといふ けふ春(五)
 はるたつと いふ名(五)のみにて(五)
 かせさむく 雪も散りきぬ(五)
 春はきにけり をちこち(五)の(五)
 きのみまでとは ことなりて(五)
 花ほどもなく さきにはふらん(五)
 やうやくそらも かすみわたりて(五)
 藪にはうぐひす こゑのきこゆ(五)
 こほりは解けつゝ ゆきは消えつ(五)
 はるかぜに 目のいろも(五)

吹く東風こちかぜの
 たなびける
 人ひとこゝろ
 やゝたちそむる
 かすみ立ちたる
 はやうぐひすの
 花のいろかに
 かすみにかくるゝ
 吹くかせなよく
 こほりぬし
 とけそめし
 をちかたの
 ゆきのこる

なよやかに(五)
 かすみのにはひ(五)
 さすが浮くめり(五)
 うすがすみ(五)
 あさばらけ(五)
 こゑ聞こえつ(五)
 こゝろうかる(五)
 やまのふもと(五)
 ながき春(五)の(五)
 池いけのかも(五)
 たるひかな(五)
 山もあをみて(五)
 とほ山も無し(五)

にはひわたれる
 氷はとけて
 花のゑむかほ
 はだこゝろよく
 やまかせはげしく
 まだはた寒くて
 節 分
 あしのやに
 おにやらひ
 そのかみを
 そのよびこゑの
 鬼はそとへと
 さすやひくらぎの

はるのいろ(五)
 さいなみ(五)の(五)
 目には見えねど(五)
 なりにけるかな(五)
 けふも吹きて(五)
 外にもいす(五)
 まめまき(五)に(五)
 もゝの弓(五)
 むかしのまゝ(五)に(五)
 かくと忍べと(五)
 ふくは内(五)
 しりぞけて(五)
 針やいらに(五)

ひよらぎの枝に あかいわしを(五)
 はるさむみ やまかせの(五)
 はるさむし おもひやる(五)
 はや餘寒 いくほどもなし(五)
 身にしみて のこんのさむさ(五)
 まださむくして 霜のいろ(五)
 なほあかつきの 霜まろし(五)
 はるの霜には いと萎えつゝ(五)
 只いたづらの はなのゆめかな(五)
 山おろしはげし 名のみはるの(五)
 さえかへるさむさ そらもいまだ(五)
 池のおも あつこほり(五)
 あられさへ たばしりて(五)

たばしるや さよのあられの(五)
 春きても なほこほりぬ(五)
 かけひにはまだ うすこほり(五)
 梅は咲けども はるあさみ(五)
 そでには雪ちる 花はとほし(五)
 ゆきげのそら吹く 風の寒さ(五)
 ねやの戸の ひまもりて(五)
 春ながら ゆきの夜の(五)
 はなを待つ 身はいたづらに(五)
 風さえて よはのうづみ火(五)
 日もくれたけの ふしのまも(五)
 たにの戸いづる うぐひすの(五)
 うぐひすのこゑ 人く人く(五)

うめのはな笠を やようぐひす(五)
 谷をいで まふる音を(五)
 はるとざす 山のいほ(五)
 さとなれぬ こゑあどけなし(五)
 梅が香は 羽風にかをる(五)
 きやうよみ鳥と 名にもよぶ(五)
 ふる巢をいで ほけきやうと(五)
 ねぐらよりして こゑを聞かせて(五)
 まだかごなれぬ うぐひすの聲(五)
 まだうひくしき そのこゑかな(五)
 なきてこゝろみて かごのうちを(五)
 あかつきに はつこゑす(五)
 てづたひて こゑもらす(五)

かせかをる まらうめの花(五)
 折るそでも かをりぬるかな(五)
 雪にまぎれぬ 寒紅の(五)
 いとこゝろを つくしがた(五)
 つくしまでさへ かをりゆきつゝ(五)
 とびうめとさへ 名さへかをりて(五)
 はるにさきがけて さくこのはな(五)
 香をふくかせさへ まろく見えて(五)

(六) 春の風

春の風一切のとなへ。氷を吹き解
 くもの花をわたれめ開かせるも
 の、肌心のいよもの杯といふ點が
 その主な所として詠せられるべ

きものである。暮春のものとして
は山かせの意味になり、惜しい花
を吹き散らすもの、杯との心で詠
せられもする。

(七) 霞

春のころ、水蒸氣の立ち昇って烟
りのやうに遠くにたなびくもの。
春の風物の主なるものと昔から
用ゐなされた。

霞はひとり春のものに限って云
ふ、秋のには云はぬ。それゆゑ、春の
をばはるがすみとも云ひなし得、
秋のをばあきいりとも稱へ得た。

へたてまつる語。

○はるのほだし 霞の異名。後
撰集、興風、山かせの花の香かどふ
籠にはかすみぞ春のほだしなり
ける。

○かすみの網 霞の立ちこめた
のを張った網に見立てた語。

○うすがすみ うすく立った霞。

○あさがすみ 朝たった霞。

○ゆふがすみ 夕方たった霞。

○よこがすみ 只の霞とおなじ語。

霞はすべて横に引きわたす故の
となへ。

まかし、「はるぎり」もしくは「あき
がすみ」杯とは云へぬ。

〔備考〕

○かすみの海 ○かすみのみを○
かすみのころも ○かすみの袖○
かすみの真垣まき ○かすみの窓○か
すみの波 以上すべて霞を見立
てゝいふ語。

○かすみのいのち 仙人の生涯
の形容。仙人は霞を食ひ、露を吸ッ
て生きて居るとの古傳に本づい
たもの。

○かすみの洞 仙洞御所をとな

○ひとかすみ 一すぢ立って見える霞。

○このがすみ 仙家の霞とかいふ語。

○やへがすみ あまた引きわたした霞。

○むらがすみ あまたの霞。

○はるがすみ 只いふ「かすみ」となじ語。

春立つものとしての稱。

(八) 遊絲(カギロヒカゲ
ロフイイトユフ)

春のころ、天氣のうららかな時、日
光のはたらきで空中にきら／＼
と光る絲の動くやうに見えるも
の、稱。霞とおなじたぐひの物に
して詠じ得る。

〔語〕

句

春の風、霞、遊
絲、三題共通。

(五)

なよやかに
 やはらかく
 わか芽のふ
 くさも木も
 花の香いを
 あそやぎの
 そらのいろ
 うすくこく
 浮くかすみ
 たちこめて
 いく千里ちきり
 かすませて

(七)

なよかなる風
 おもてをぞ吹く
 うら／＼霞む
 春を呼びくる
 香いを吹きおくる
 やなぎの枝を
 かすめる空の
 にはへる霞
 うき立つ霞
 深さかすみの
 たえ／＼霞む
 霞をわけて

うちなびく
 立ちわたる
 かすむ夜の
 立ちまよふ
 とほ山は
 へだてつゝ
 夜をこめて
 おぼるなり
 風たえし
 いつしかと
 ゆふづきの
 あともなき
 ほの／＼と

霞にとざす
 霞のよそに
 かすむ一重の
 雲井はるかに
 打ちなびきつゝ
 行くへもわかす
 行くへも知らず
 朧にかすむ
 波路の末も
 いつしか包む
 とほ山の眉
 あかつき深く
 入り日も霞む

ひといろに
 夕なぎに
 うすくこく
 もえのぼる
 みぎひだり
 まばゆくて
 行きまよふ
 絲ならで
 草もゆる
 とほやまの
 あまつそら
 舞ふそでの
 ちばらくの

行く手は消えて
 鐘のおとさへ
 をちこちの山
 蟲かそれとも
 蝶の引く絲
 たちのぼるゆり
 みだれ／＼て
 亂れもやらず
 名もいとゆふと
 山のゑまひも
 うでさ／＼て
 袖やかをらん
 かりそめにして

ゆめのまの
 有りとても
 つかのまの
 なよやかに
 やはらかき
 さむからず
 花の香いを
 やなぎの絲を
 にはへる霞
 うき立つかすみ
 はてなきうみも
 かすみにとざして

消えてあとなき
 有りとも見えぬ
 人のいのちの
 風ぞ吹く(五)
 はるのかせ(五)
 おもてを吹きて(七)
 ふきおくるかな(五)
 くりかへし(五)
 うすくこく(七)
 うき行くかもめ(七)
 霞に消えて(七)
 かねのおとも(七)

〔應用〕

かねのとかすめる やましたいは(六)
 ゆらめきて もえのぼる(五)
 むしかとも 見えぬかな(五)
 蝶の引く いとかと見えて(五)
 目もあやに 立ちのぼりつ(七)
 みだれくゝて 且もつれ(七)
 みだれもやらず くりかへし(七)
 名もいとゆふと ゆふぐれのそら(七)
 とほ山のまゆの ゑまひ白ふ(八)
 つかのまの人の いのちなれや(八)

(九) 若草

すべて春の時を得て生ずる草を
 若草といふ。やがて春を過ぎ、夏と

なり行くまゝに、行く先ながくか
 ひ立つ、その末の希望の満々たる
 ところ杯いかにも吟詠の材料と
 なる。

〔備考〕

○年若い女を形容していふ語。
 年わかい女を若草に見立てゝい
 ふ例は伊勢物がたりおよび源氏
 物がたり杯に既にある。その言葉
 も優美である。今いろくゝの韵文
 に同じやうに用ゐても元より差
 しつかへは無い。用ゐる所によつて
 は異語同義たる。「はつぐさ」とい

ふのを用ゐてもよろしく、また、に
 ひぐさといふのを用ゐてもよろ
 しい。―伊勢物がたり、「うらわか
 みねよげに見ゆるわかくさを人
 の結ばん事をしぞ思ふ、―同上、
 「はつ草のなごめづらしき言の葉
 ぞ、うらなく物を思ひける哉、―源
 氏物がたり、「手につみていつし
 かも見んむらさきのねに通ひけ
 るのべのわか草。」

(十) つぎ穂

一つの木を臺木とし、他の好まし
 い木の枝を切り取って、その臺木

につぎ、あるひは前のは打つて
 變はつた花を咲かせ、又は前のよ
 りはるか優つた實をならせる杯
 の術が有る。これを、つぎほ、又は、つ
 ぎ木と云ふ。時候はおもに春分の
 前後をよろしいとする。

(十一) 芦づの

芦のわか芽を、あしづのといふ、さ
 きが鋭く尖つて角のやうに見える。

(十二) 鳶の若葉

秋の鳶の葉はその紅になつた眺
 めなどを賞美し、春の鳶の若葉は
 そのつやくくしい綠色なのを愛

玩する。

(十三) 野あそび○つみ草

さしたる必要も無いゆゑ、題意の解釋をば省く。春のいろ／＼の若草、草花などを摘みあつめて楽しむ意。

(十四) 椿(ツバキ)

〔備考〕

○かぎり○白雁(ハシ) 以上二品は白色の椿の上品なもの。

○玄ら玉 ○白玉椿 ○玉椿

以上三名目ともに一般の白色の椿をさして云ふ語。

渡つて来る。去年の巢を忘れぬ杯となつかしんだ意によんだ歌などがあまた有る。

〔語句〕

若草、つぎ穂、芦づの、萬の若葉、野あそび、つみ草、椿、歸雁、燕、九頭共通。

(五)

わかくさの まだうら若き

わか芝や もえいでそめし

芝はらの やがては野邊の

草はらと わかみどりせる

うすく濃く 只むらくくと

野のみどり 野邊のみどりに

雪はなき 雪の下なる

(七)

○鳥の子 ○たまだれ ○そめ

小袖 ○沖の波 以上三名目と

もにうす紅色の椿のとなへ。

○さいれ波 ○たまさか 以上

二品白地に紅の飛び入りあるもの。

○行幸(カキ) ○唐つばき 以上二

品ともに眞紅色のもの。

(十五) 歸雁(ツバ)

春分前後から雁は去り、燕と交代する。その去るのを「かりのわかれ」などいふ。

(十六) 燕(ツバ)

春分前後から雁とかはりあつて

日かげさす 日かげうれしく

もえそめて やゝ萌え出でぬ

淺みどり わか葉みどりに

垣ねには わか芽のみどり

いけ水の うらめづらしき

みぎはなる みぎはの小草

きざしそむ 霜のふる葉や

めぐみにて かれ生(か)と見しを

あめごとを をぎのやけ原

おしなべて 岡のくす原

わづかにも なべてみどりに

うちけふる ゆくさき長き

のべのいろ おひさき長き

はるの草
 したもえの
 とくおそく
 しば草に
 下めぐむ
 あと見えて
 むらぎえの
 うらわかき
 ふかゝらぬ
 二葉にて
 添ふみどり
 人も無し
 ふるさとの

末たのもしき
 こぞの契りを
 ひばりの床と
 うらゝにかすむ
 なつかしや野邊
 ねよげに見ゆる
 垣ねにめぐむ
 ゆきまにもゆる
 やがては花も
 みどりにかへる
 色まさり行く
 やけ野の茅原ちはら
 小野のわか草

かゝるさま
 つぎ木して
 親木おやぎにぞ
 小がたなに
 よきうへに
 つちかひて
 日にあてゝ
 あさゆふの
 あしの葉の
 水ぬるみ
 なには江や
 もみぢせぬ
 つや／＼し

花をやしなふ
 われもつぎ穂を
 親木にそへて
 きりはなしつゝ
 よかれかして
 水そゝぎかけ
 かげさしかざし
 わか芽をつみて
 空をつきさす
 淺さは水の
 はるの小川の
 まつはるきづた
 ものがたりして

はるの野に
 ゆふひばり
 一すぢの
 はるさめの
 見わたせば
 見わたしの
 つみくさや
 花かごの
 花がたみ
 かへるさの
 くれなゐの
 千代かけて
 ふるさとへ

打ちつれ立ちて
 道すがらにも
 はゝ子つむなり
 つみもて歸る
 そゝのかされて
 心ひく野邊
 あすも降らずば
 あすもかくてや
 よはひ久しき
 しらたまつばき
 みどり色こき
 かへるかりがね
 花を見すてゝ

なのる雁
 一むれの
 一つらの
 たまづさを
 ことづてん
 あこがれて
 うちかはし
 もろつばさ
 つばくらめ
 ちよ／＼と
 聲をのみ
 雨もよひ
 ふるすたれ

かすみを出でゝ
 雲井はるかに
 わかれを告げて
 心はいそぐ
 いづくのさとに
 心に花の
 花のさかりを
 はるのにしきの
 こぞの古巢を
 ふるす忘れず
 つち持ちはこび
 土くひはこぶ
 さてもなつかし

のきばなる 軒ばに巢くふ
 忘れぬを 忘れぬやどの
 ぬれつばめ うぶ屋の内に
 子をおもひ はぐみ飼ひて

(十七) 柳(ヤナギ)

〔備考〕

○やなぎの髪 柳の枝の長くて
 やはらかく、さながら毛髪のやう
 に見えるのを即ち髪と見立て、
 いふ語。
 ○やなぎの腰 ○やなぎ腰 美
 人の腰をはめて云ふ語。すなはち
 細くたをやかであるとの義。

にはやをぎを編めるかひもなし、
 さらぬ人だに眉をひらくに。
 ○やなぎの眉 漢語「柳眉」を直譯
 した語。うるはしく伸びた眉、美人
 のそのの形容として用ゐる。
 ○あをやなぎ ○あをやぎ す
 べて青々とした柳のとなへ。
 ○やなぎの絲 やなぎの枝を絲
 と見立てゝのとなへ。
 ○かはやなぎ 漢名「水楊」(ヤナギ) 水
 邊に生じ、枝は垂れず、葉は圓くて
 ささが急に尖る。葉うら白い。絮を
 生せぬ。

○やなぎを折る 支那古代の風
 俗、人をかくつていよく別かれ
 となつた時、心いはひととして柳を
 折つて再會をも契つたとか、その
 故事から直ちに送別の意に用ゐ
 なされた句。一宗砌「君がため折
 らば千もとのやなぎかな」
 ○やなぎを編む 楚國先賢傳に
 ある孫文寶の故事、苦學すること
 の義。一楚國先賢傳、「孫文寶到洛
 陽在大學。左右得一小屋安止母。
 然後入學、編楊柳爲簡、以寫經。」
 右を詠じて、夫木集、公朝、「うき身

○かはぞひやなぎ すべて川の
 ほとりに生ずる柳のとなへ。
 ○かぞやなぎ すべて門の邊に
 ある柳。
 ○たまやなぎ 柳をはめていふ
 ことば、椿をたまつばさといふ類。
 ○はこやなぎ 漢名「白楊」(ヤナギ) む
 しろ多く山野に生じ、葉厚く、裏に
 白い毛が有る。春穂になつた花を
 出す。その材からやなぎこりを造る。
 ○またりやなぎ ○やなぎ 單
 に略してやなぎとのみ云へば此
 しだりやなぎの義になる。よく水

邊に生じ、その枝やはらかに長く

たれ下がるもの。漢名、柳。

○こぶやなぎ。幹に瘤のやうな

ものが出る柳。漢名、杞柳。その材で

揚枝(ヤギ)をつくる。

○めばりやなぎ。柳の種類名で

はない、すべて、芽の出さうになつ

た時の柳のとなへ。

○いとやなぎ。まだりやなぎを

形容していふ語。

(十八) 茅花(チヂ)

白茅(チヂ)の花。銀のかいやくやうな

色で、穂のするどく見える所。たし

かどべなる

はるかせに

吹きたゆむ

うちなびく

つゆちらす

いつもとの

よりかけて

くる絲の

みだしつゝ

あやを織る

露の玉

岸におふ

けふるなり

わがかどべなる

池のほとりの

吹かるゝまゝに

いとくりかへし

波うちよせて

朽ち木の柳

かい木のやなぎ

なびく霞の

しづが伏せ屋の

うごきそめたる

露の玉ぬく

貫きとめで

あを柳の絲

かに吟題となる。

(十九) 萍(ウヰ)

萍に多少の種類も有るが、吟料と

しては他の物はどそのいろく

を究める必要も少ないゆゑ、それ

らを茲に載せるのは省く。

(二十) 三月三日

いはゆる上巳の節句、女の兎のい

はひととして雛人形を飾る。桃の節

句とも云ふ。

〔語句〕柳、茅花、萍、三月、日、四題共通

(五)

淺みどり

のどやかに

ほそ眉を

水かいみ

波よりて

さす矛(ほこ)の

やりぶすま

つばなぐさ

しろかねの

誰が磨(こ)ぎし

うきくさの

みぎひだり

にしひがし

根をたえて

まだりやなぎの

ねくれた髪を

池のかいみの

露をたもとに

やりのふすまを

月にきらめく

春の野べなる

かいやき渡り

ひかりまばゆし

きのふとけふと

ところ定めず

きそふ水には

水のまにく

(七)

眉はらふべく

いづれにか 流れの身とぞ
 彼の岸を 波のよるく
 ひなだなの ひなまつりに
 ひなまつり もゝの節句と
 をさな子の 家をささむる
 家のみち 妻のつとめを
 内裏びな 大みや人の
 大うちの 五人ばやしの
 たちぬひの 這ひ人形の
 いとほりの うたのしらべを

〔應用〕

眉はらふ あをやなぎ(五)
 はるもまだ 淺みど(五)

淺みどりのべのやなぎ(五)
 かどべなる ひともとやなぎ(五)
 我かどべなる いつもの(五)
 絲ふきみだす はるかぜに(五)
 池のほとりに 立ちてなびけば(五)
 吹かるゝまゝに 髪くしけづり(五)
 いとくりかへして 打ちなびけり(五)
 なみ打ち寄せくる 池のきしに(五)
 吹きたゆむ 風のひま(五)
 風吹かば いざや吹け(五)
 かぜの吹く まゝに身をなし(五)
 はるかぜに 吹かるゝまゝに(五)
 露のひまに うちなびく(五)

いとくりかへし あをやぎ(五)
 露吹きちらす 風いとつよし(五)
 波うちよする みぎはにゆひて(五)
 いつもとやなぎは 門のまゝ(五)
 くら木のやなぎと 身をばなして(五)
 よりかくる あをやぎ(五)
 おい木とも なりにけり(五)
 はるかぜに 絲くらせつ(五)
 をちかたよ なびくかすみの(五)
 風には露を みだしつ(五)
 しづが伏せ屋の かどながら(五)
 あやを織りつゝ 露をぬきつ(五)
 露の玉ぬく えだは靡きて(五)

ひねもす岸にて みづの鏡(五)
 糸には貫ぬく つまのたまを(五)
 あをやぎの いとけふる(五)
 のどやかに なびくかな(五)
 きしのべの 志だりやなぎに(五)
 ほそまゆを 今ほのべけり(五)
 ねくれたれ髪は なびくかと(五)
 岸にやなぎは みづかみ(五)
 いけのかゝみに 日ごとむかひて(五)
 いとに水より なみは寄るかな(五)
 たもとにやどせし 露のしづ(五)
 みそらをさす矛 つばな捧(五)
 つばなには やりぶす(五)

穂は目にきらめきて(五)
 つばなぐさ何の鎗とく(五)
 はるの野にやりをそろへて(五)
 やりは晃めくしろかねの(五)
 かいやきわたるゆふ月の(五)
 たがために磨ぐつばなのつるぎ(五)
 つばなの手槍ひかりまばゆし(五)
 世の中はうきくさの(五)
 さだめなききのふけふ(五)
 みぎひだり水にまかせて(五)
 去ばらくもところさだめず(五)
 波のまにく西ひがし(五)
 さそふ水にはまかすなる(五)

身は根をたえてたゞ水のまゝに(五)
 いづれをさして身をば寄せてん(五)
 流れの身のうへうまれながら(五)
 この岸はなれて更にかなた(五)
 なみのまゝ身をなして(五)
 ひなだなをかざるにも(五)
 ひなまつるけふのうれしさ(五)
 またけふのひなまつりに(五)
 ひなまつりするたびごと(五)
 もゝの節句とゆふだすき(五)
 をうな子の身のこゝろいそ(五)
 たはむれながら家を治むる(五)
 家のみちかかつとめをさむ(五)

をなごのつとめをかくてまなべ(五)
 つまの身のつとめとて(五)
 内裏びなふたはしら(五)
 いにしへの大みや人の(五)
 大うちはかくよとばかり(五)
 五人ばやしのにぎはしく(五)
 つとめてはげむたちぬひの(五)
 顔もいそく這ひ人形の(五)
 這ひにんぎやうのゑむ氣色にも(五)
 いとはりのまわざつとめはげみ(五)
 なりものようたよ去らべ聞かん(五)

(三十一) 桃(モモ)

〔備考〕

○源平桃(イロモモ) 漢名日月桃(ツツク) また二色桃(ニイロモモ) 桃の一種、その花すこぶる大きく、花びらに紅白交はつて咲くもの。日本語で、別名、江戸桃(エドモモ)、さきわけもゝ。

○毛桃(モモ) 漢名毛桃(モモ)。實が大きくて皮に毛の多くあるもの。花も大きい。色がきはめて薄い。

○早桃(サキモモ) すべて、もつとも早く花のさく桃。色は薄くて、花びらが一重のもの。

○緋桃(ヒモモ) 漢名緋桃(ヒモモ)。花の色きはめて赤いもの。

○白桃(モモ)

○姫桃(モモ) 桃をほめていふ語。

○づばいもゝ 漢名、光桃(モモ)

李桃(モモ)。實の皮に毛が無くむし
る光りかいやくもの。

○みきこぐさ 桃の異名の一。

歳玉抄のむ人や千代をへぬべし
みきこぐさかなふよはひの心な
りせば

○みちとせぐさ 桃の異名、西王

母の故事からいふ。

○西王母(モモ) 支那の古傳にいふ

仙女の名。その仙女の園に桃が有

さてその三國の故事すなはち支
那の三國の時代のはじめにあた

り劉備と關羽と張飛との三人が
桃園に相會して生死相共にする

との誓ひを立てゝ義を結び、それ
から今日でいふ革命軍をおこし

た後世、それから「桃園の義」といふ
語が出来、似たやうな場合ひに引

用されもする。

○桃林(モモ) これも前のと同じや

うなもので、「もゝばやし」と讀め
ば單に桃のある林との義の普通
名詞になり、また「モウリン」と讀め

り、三千年に一たび花が咲き、實が
なる、その實を食すれば長壽を得
るとの云ひつたへ、

○桃園の義 「モウエン」と讀んで

も、「モ、ヅノ」と讀んでもよろし

いやうなものゝ、下にゑるすやな
三國志の故事の桃園とすればい

くらか固有名詞の氣味で、「モウ

エン」と讀んだ方がよろしく、また

もし單に桃のある園の義すなは
ち普通名詞の氣味で用ゐる場合
ひならば「モ、ヅノ」の方が穩か

ある
ば、太平の世を稱する形容語の一
になる。

詩經に「平を桃林の野に放つ」とい

ふ句が有る。すなはち、太平の世に

なつて、それまで戦時に勞役させ

た牛に休息をはじめて與へると

の義で、後世すなはち、それら太平

などの形容とする場合ひに桃林

の語を用ゐるやうになつた。

(二十二) 連翹(シロ)
和名で、いたちぐさ、又はいたちは

せ、桃の咲くころ開く黄色の花。三

月の節句、おぼくは桃椿などと取

り合はせて雛にもそなへる。玄か
 し花の不幸か、あまり一般の人に
 はかへりみもされず、是まではど
 と云って詩歌にも咏せられなかつ
 た。わづかに菅茶山が下にゑるす
 やうな詩句に、それを鶺鴒の縁語と
 して用ゐた位なものである。その
 詩、「鶺鴒林抄野陰垂。輕暖輕寒
 近午時。欲試山行也怯雨。連翹
 花底坐敲詩。」

(二十三) 蓮華草(ハス)

春の野などに數多く咲く花。唐紅
 色で花びらのあまた出た様子か

者供養の心で食物を調へて知り
 人などに配りもする。吟咏の材料
 には是等の一切最もおもしろい
 ものである。

金剛經の疏に、生死は此岸、涅槃
 は彼岸、煩惱は中流とある。

即ちち人間生物である間は川
 の此岸すなはちこなたに居るの
 と同じこと、それから川中へと
 乗り出すとなる、つまり世の中の
 いろ／＼に出で遇ふのと同じこ
 とになり、さまざまの煩惱にくる
 しめられ漂ひもがくやうになる

蓮華に似るとしての名。すみれ、たん
 ぽぽなどと共に春の野のながめ
 の一つである。

(二十四) 春分(ハルノヒ) ○彼岸(ヒナ)

分は二十四氣の一、すなはち春の
 中はどのとなへ、此日が晝夜同一
 の時間になる。

彼岸は彼岸會(ヒナノヒ) の略、佛家で式

日とする。春分の日を彼岸の中(ヒナノヒ)日

(ヒナノヒ)とし、その前に三日、後に三日

合計七日をもつて彼岸會の日と

佛家でさだめた。今の世上一なは

此日、もしくはその前後彼岸中(ヒナノヒ)に

一旦迷ひがさめ、やがて得道し、い
 よ／＼彼岸即ちかのさし、即ちむ
 かふぎしに至るとなつて、はじめ
 て本分が完全になる。

佛説では説いてかう教へた。世
 俗は、玄かし、遂に其眞意を知らな
 くなり、只その日には回向供養の
 やうな事をさへすれば、それでよ
 ろしいと思ふやうに爲つてしま
 った。

此供養の日の間、東京附近(あきた)の老人
 などは六阿彌陀(むくあみだ)まゐりといふの
 をする。六阿彌陀とは東京附近に

散在する寺の、その中のある物で
上野、田端、西ヶ原、龜井戸などにそ
れ／＼有る。もとより罪障消滅、福
利圓滿の希望からである。

前に云った通り供養のため食
物を何かこしらへるが、玄かしそ
の食物はかならず、精進もの即肉
類を用ゐぬものに限るとされて
ある。

(二十五) 遅日(ツチジ)

遅日は永い日の義、春になつて日
は一日ましに永くなる、それにつ
いては感懐もかならず有るべき

で詩歌にはあまた詠せられた題
目でもあるが、取り立てゝいふは
どの故事も無い。

〔語 句〕

桃、連翹、重華草、春分
(彼岸)遅日、五箇共通

(五)

みちとせに
咲くもよの
みのる桃
さきわけの
くれなゐを
時知りて
雪ならぬ

(七)

みちとせ迄も
桃さきいでよ
なるてふ桃の
源平桃と
さも花さく
名によぶ毛桃
時ならぬ雪

もよそのに
もよ山や
ひめもよの
西 王 母
桃 林 の
しづのめの
うすべによ
もよるかぶ
かはみづも
もよ山に
もよばやし
ものいはぬ
千代八千代

もよのそのふに
山は隈なく
もよそのに義を
もよの林に
そのふの桃の
いのちも長き
仙家の花と
もよの杯
物云はぬ桃
もよ咲く山の
もよの林に
もの云はぬ花
ひよなまつりに

重 三 の
はなぞのに
さかづきに
不老不死
とことにはに
かをり無き
もよちよも
桃 源 の
仙 郷 の
蝶ならぬ
いたちはせ
よそほひは
あぶのこゑ

ちとせをちぎる
もよの一むら
桃のしづくを
神女のむかし
ひめもよといふ
くれなゐの雲
もよよも千代も
ひじりのすみか
仙人の住む
咲く連翹の
葉は無き枝の
ねむげなる鳩
野のれんげさう

むらさきの
むしろしく
花かぶに
彼岸會ひがんかいに
はかまうで
てらまあり
うつせみの
いきしにの
このきしを
精進しやうじんの(中)
ひがんだ
のべありき
六あみだ

あかねのきぬを
つめばしをれて
すみれもろとも
はるの彼岸の
はかまわりして
なき人々の
よるひる共に
世の煩惱の
たゞよふ人の
心ばかりの
あせ傳ひゆく
つみほるぼしの
あみだまうでに

日はのびて
すがのねの
日のかげも
窓にさす日の
くれやらぬ
くれかねて
うとくと
くれのこる
くれをしむ

やまどりの尾の
影いとおそし
日はながくとし
くるよも程の
星のみはやく
あふの羽おとに
うつらくと
夜のみじかきを
鶴のあしなみ

〔應用〕
みちとせに
みちとせに
みちとせに
みちとせに

なると云ふ
はじめてぞ
なるてふ桃の

すゑながく
咲くもよの
わがやどの
みちとせにして
なるてふもよの
さきわけの花
げんべいもよの
あめにくれなを
花さくさもよの
ときしりて
名にもよふ
雪ならぬ
時ならぬ

みちとせまでも
いろあざやかに
桃さきいで
みのる桃
花なれや
げんべいもと
色あざやかに
染めもあげつ
たより聞かん
さく桃に
毛桃とて
ゆきをつもらせ
ゆきを降らしつ

蝶去りあへぬ
もよのそのふに
吹くかせ染まる
もよ山ふかく
やまちは隈無く
ひめもよ花さく
ひめもよの
もよぞのに
西王母
西王母
もよのはやしに
義をむすびける
そのふの桃に

もよぞのに
吹くかせの
もよのくれなを
わけ入るまよに
はなの雲に
はるの山路
はづかしげ
義をむすぶ
花の女神か
神女あはれ
ひじり住む
桃林
はるかせ白ふ

まづがふせやに 桃のみひとり(五)
 いのちも長かれ もゝに契り(五)
 うすべにいろなる 桃のゑまひ(五)
 もゝうかぶ さかづきに(五)
 さかづきに もゝの花(五)
 かは 水も いろそまるまで(五)
 もの云はぬ もゝのしたかげ(五)
 春をたづねて もゝ山に(五)
 もゝさく山の ゆふまぐれ(五)
 桃のはやしを 分けて行くなり(五)
 物は云はねど 人は愛でつゝ(五)
 花はものいはず 人も云はず(五)
 もゝに千代八千代 いでやちぎれ(五)

をとめこの まつりとして(五)
 ひなだなを とりまうけ(五)
 桃 さくや ひなまつりの(五)
 ひなまつり 桃折りさして(五)
 三月三日 重三(五)
 ちとせをちぎる もゝの花(五)
 不老不死といふ くしきくすり(五)
 神女そのむかし あらはれいで(五)
 とことはに のぶるとて(五)
 ひめもゝと いふ名さへ(五)
 かをり無き うらみは有れど(五)
 くれなゐの くものたなびく(五)
 もゝよも千代も もゝの花(五)

桃よ 桃 桃もゝちよも(五)
 武陵のあたり 桃源のさと(五)
 ひじりのすみか 雲はくれなゐ(五)
 こゝに仙郷の さふらふから(五)
 仙人の住む さとはこゝよ(五)
 蝶ならぬ 蝶と見ゆ(五)
 れんげうに よる蝶の(五)
 いたちはせ 名はさすがなり(五)
 葉は無くて 花のみぞさく(五)
 さして見るべき よそはひは(五)
 鳩のなくこゑ ねばげなり(五)
 ねむけさしゆく 蛇のこゑ(五)
 野のれんげさう いる茜にて(五)

むらさきのきぬを ひろく張りて(五)
 あかねの大ぬの 野邊に引きて(五)
 あかねなる むしろ敷く(五)
 つみとれば 玄をれつゝ(五)
 花かごに つみたくはへて(五)
 れんげさう すみれもろとも(五)
 人はいとなむ ひがんゑの(五)
 はるの彼岸の 供養にと(五)
 はかまうでする このけふの日に(五)
 花たづさへて はかまわりして(五)
 こゝろにかけたる はかまうで(五)
 無きそのすがたの 目にもうかぶ(五)
 なき人を 志のぶかな(五)

うつせみの身の末は(五)
くるしみはよるひるともに(七)
よるひるも變はらぬものか(五)
この世の中にいさしにの(七)
いさしにのうみ針の峰(七)
世の煩惱の波におぼれて(七)
たゞよふ人のかすいと多き(七)
精進かはらぬ心見せよ(八)
杖をちからにてひがんみちを(八)
あせづたひゆく老女(五)
こゝろよきのべありき(五)
これも何つみほろばしに(七)
六あみだつまぐる珠數に(五)

あみだまうでにたゞと(五)
日はのびく／＼てやまどりの(七)
すがのねのながきはるの日足(八)
いそぐとも見えぬはるの日あし(六)
うつりゆく日のかげも(五)
いとおそく過ぎぞゆく(五)
窓にさす日かげもながく(五)
なほのこるまどの日のかげ(七)
くるゝに程のいと遠く(七)
まだくれやらぬゆふまぐれ(七)
あぶの羽音のとほくきこえて(七)
ゆめかうつか只うとくと(七)
くれのこるゆふ日昔さえて(八)

みじかくもなるか夜は日々に(八)
せまりゆく夜をなげくばかり(八)

◎ 春 雨 (シユンウー)
(ハルサメ)

春雨形容しては花をやしなふ雨
とも云はれる春のころまとしと
降って地をうるはし草木の發生
を大いにたすける。そこから花
をたのしむ心をこの雨に對して
おこしもするまた靜かに降るた
め、夜などことさら淋しく、いろい
ろな物おもひとなる詩題として
も趣味實に深い。

◎ 春 月 (シユンゲツ)
(ハルノツキ)

春の月と云へばおぼるづきに限
やうになつて居るが必らずしも
おぼる月をのみ春の月として吟
題に入らしめるべきではない。お
ぼる月も春の月の一の特徴のも
のとして、元より春に限って用ゐ
てよろしいが、他の、おぼるでない
すなはち清らかに晴れた月をも
その必要次第、春の月として咏じ
ても決してさしつかへない。

◎ 櫻 花 (サクラ)

〔備考〕

○彼岸櫻(ヒガン) 櫻の一種、彼岸のこ
 る、即ち三月二十日あたりから早
 く咲くもの。花むしろ白くて一重
 ざきのもの。一名こざくら。
 ○山ざくら 山野に自生するさ
 くら。一重ざきで色むしろ白く、花
 は疎らに咲くたぐひの櫻の總名。
 ○よしのざくら やまざくらの
 一種。もと大和の國、吉野山から出
 たゆゑのとなへ。花や、赤みを含

み、萼から葢まで青みを帯び、花は
 數多くむらがって咲くもの。
 ○ちどざくら やまざくらの一
 櫻花は小さく、一重ざきで、むしろ
 白く、又まばらに咲く。特色とすべ
 きは其花びらが内へと反ること
 である。
 ○まだりざくら 枝のしだれる
 櫻。一名いとざくら。
 ○かばざくら 花きはめてまば
 らで、一重に咲き、色は白いもの。む
 しろその花は賞美されず、その皮、
 材などを曲げ物などの細工物に

用ゐる。

時としてはきざくらの一名と

して用ゐられる。

○きざくら 花の色の黄ばんだ
 櫻。多くは八重咲き。
 ○小ざくら ひがんざくらの一名。
 ○ひとへざくら すべて一重咲
 き。の櫻のとなへ。
 ○いとざくら しだりざくら。
 ○うばざくら 八重ざきのひが
 んざくら。一重のよりおくれ、て
 咲く。落花になるまで葉が無い。葉
 が無い。それを齒が無いに寄せ、老

女の義、すなはちうばざくらといふ。
 ○くまがいざくら ひがんざく
 らよりすこし後れて咲く。同じた
 ぐひの櫻花びらは尖り、はじめ薄
 紅で、やがて白くなる。
 ○やへざくら すべて八重に咲
 く。さくらのとなへ。
 ○牡丹ざくら やへざくらの俗稱。
 ○江戸ざくら おそ咲きのやへ
 ざくら。花の盛りの特に長いもの。
 ○いぬざくら 花小さく、すくな
 く、白く、ほとんども見どころの無い
 一種の櫻。

○あさぎざくら 花大きく八重に咲き花の色は薄青くすいしうなものの名が近いゆゑさざくらと混同しやすい。

○いへざくら すべて人家にあるさくらとの義、櫻の種類名でない。

○緋櫻(終) やへ櫻の一種、花の色すこぶる紅のもの。

○伊勢ざくら 緋櫻の一種、咲く頃が一切の櫻のをはりに近いものをはり(終)即ち尾張國の名に近いとすなはち伊勢の名が付けられたもの。

○普賢象サツシ 八重ざくらで花びらのすくれて大きいもの。佛畫で普賢菩薩を畫く時にはかならず象を配する。象の鼻は大きい。鼻を花に通はせ、花が大きいとの心で普賢象と名づけたとか。紅色のやや濃いときははめて淡いとの二種が有り、その濃いのをば紅普賢サツシ、白いのをば白普賢サツシといふ。

○奈良ざくら すべて入重ざくらのとなへ。「いにしへの奈良のみやこのやへざくらけふ九重に

句ひぬるかなといふ古歌に本づいて命せられたもの。

以上がおもなものの其他、まはがまさくら、虎の尾ざくら、庭ざくら、鞍馬雲珠櫻杯今一々云ふほどでもない。

○ゆめみぐさ 櫻の異名の一。莫傳抄、「うゑおきてたとへにや見るゆめみぐさあすをも知らぬけふのいのちを。」

○あだなぐさ 櫻の異名の一。莫傳抄、「あだ名ぐさいかなる人のうゑおきてかゝるうき世に散

るを見るらん。」

○よしのぐさ ○たむけぐさ

○かざしぐさ(藏玉抄)

○左近の櫻 いにしへの京都禁裏南殿の櫻を左近さこんの櫻と稱へた。すなはち紫宸殿の巽の角にあつたといふ右近みぎこんの橘に對しての稱へ。

○さくらの宮 伊勢の内宮をとなへ奉る語。

○さくらがり 櫻の花をたづね眺めあるくこと。

○さくら人 櫻の花を見る人

○さくら田 さくらの多く咲い

たところ。つまり林を田といふと
なへ。

○さくら戸 櫻の咲きかゝった

戸などのとなへ。

○山さくら戸 前と大抵の同義。

○さくらあめ 櫻の花にふる雨。

○さくらいろ うすべに色。

○さくら茶屋 花見茶屋。

〔語〕

〔句〕 春雨、春月、櫻
花、三題共通

(五)

音もせず

よもすがら

かきくれて

(七)

ふる音もせず

よるはよすがら

そらかきくれて

かきたれて

ふるなへに

雨しだり

あまたれの

雨そよぐ

あまそよぎ

音もせず

えづかなる

けふいくか

をやみ無く

はれまなく

さみしさを

ちる花の

かきたれし雲

あめふるなへに

雨しだりする

あまたれのおと

雨そよぐなり

あまそよぎかな

ふるおとも無く

夜はしづかなり

けふいくかには

やむ間もあらず

いつ晴るべしと

夜のつれづれを

花をやしなふ

はなぐもり

えばの戸を

色はえて

色そひて

ふりくらす

はなのつゆ

そぼくと

そぼふりて

えめやかに

雲とちて

やまのはも

わかくさの

ぬれそぼち

くもりはてつゝ

えばのいほりの

雨にいろます

雨に色そふ

日ともろともに

花のしづくの

夜はそぼくと

そぼふりくらす

夜もすがらふる

山も見わかず

雲たちまよふ

草のみどりの

うぐひすの袖

いけ水も

ふる軒の

玉みづに

にはたづみ

みどりなる

音もなく

おぼろづき

おぼろなる

おぼろ夜の

むら雲の

花のかげ

てりもせず

うぐもり

みかさまさりて

ふるやの軒の

のきの玉水

たまれる水の

みどり色そふ

ふるとも知れぬ

ほのめくかげの

かげとも見えぬ

おぼろ月夜の

むらたつ雲の

花のしたかげ

さやかならねば

曇りもはてず

かすむ夜の
かすむなり
かげかすむ
ねむげなる
かげ匂ふ
花の香の
みねついき
高ねなる
いつしかと
みやまぢに
花の世と
とほやまの
咲きさかす

きぬにて包む
かすみをもれて
かすみに消ゆる
ねむるが如き
花もろともに
かすめる波の
みねについける
高ねの花を
いつしかとのみ
山路のはるを
花のいのちを
とほやまざくら
さきもそろはず

ゆふばえに
かざしてぞ
したかげを
したぶしを
風うらむ
うづもれて
花待ちし
まつかひの
やま風を
けふもまだ
咲きそめて
をしめども
はなざかり

ちりもはじめず
花のかんざし
そのしたつゆに
われはいとはじ
花をあるじの
花のたもとを
夢やすからで
かひありてこそ
吹くやまかせの
まだ散らぬまの
咲きにはひぬる
日かすさだまる
さかりをのみは

さくらがり
さくら人
はなもりの
ちる花の
さくら時
あくがれて
こゝろなく
ちりゆくを
風はやみ
さそはれて
つちのまも
なごりなく
雪とちる

狩りくらしつゝ
花にくらして
身をはなもりと
あらし待つまの
今をはるとて
心もそらに
あはれを知らで
ちる花をのみ
風のはげしさ
斜風細雨の
ぬれては残る
あとも止めで
花ふいさかな

ほろ／＼と
さむからぬ
ふるゆきの
踏むもうし
ちりしきて
はざくらの

〔應用〕

むなしくちりて
時ならぬ雪
花のしらゆき
踏むにつらきを
はやくも散りて
青葉のかけと
夜もすがら
音もせず
けふもまた
かきくれし
雨ふるなへに
のきばに絶えぬ
おともせず(五)
はるさめの(五)
そらかきくれて(七)
雲のけはひも(七)
いとしく(七)
あましたり(七)

あまたれのおと 　よもすがら聞く(七)
のきに絶えせぬ 　あまそよぎかな(七)
まづかななり 　はるさめの(七)
ふりつゝいさ 　けふいくか(七)
をやみなく 　ふるはるさめの(七)
はれまなく 　きのふもけふも(七)
夜のつれづれを 　いかにせん(七)
花をやしなふ 　あめと聞く(七)
花ぐもりする 　ふつかみつかの(七)
まばの戸さして 　ひとりこもりて(七)
はなのいろあめに 　いといはえて(七)
ふりくらす雨を 　聞くもつらし(七)
またゝるや 　はなの露(七)

花ぬれて 　ちるしづく(七)
そばく 　と 　さよのねざめに(七)
そばふりて 　晴れまもわらず(七)
よもすがら降る 　はるさめの(七)
山も見わかず 　くもとちて(七)
立ちまよふ雲に 　山も見えず(七)
くさばのみどりの 　色もまざる(七)
みかさそふ 　いけの水(七)
にはたづみ 　けふはまた(七)
庭の おも 　たまれる水の(七)
おともせず 　ふるとも知れず(七)
かげはほのめく 　おぼる月(七)
かげとも見えず 　おぼる夜の(七)

むらたつくもを 　わづかにもりて(七)
くもりもはてず 　ちりもえやらず(七)
かすむ夜半のつき 　きぬは包む(七)
かすみをしのびて 　いでゝてるか(七)
かげにはほふ 　花のも(七)
はなの香の 　いとちかし(七)
にはほひつゝ 　かすめる波の(七)
みねつゝいさ 　高根にわたる(七)
いつしかとのみ 　待ちわたり(七)
花のいのちを 　しばらくの(七)
とほやまざくら 　はるかに見えて(七)
咲きもそろはず 　ちりもはじめず(七)
のこるゆふばえに 　いと色(七)

小草をまぐらに 　はなのかげに(七)
ゆめやすき 　よほもなく(七)
やまかせの 　吹くまゝに(七)
をしめども 　とまらぬものを(七)
われもまた 　さくらがりして(七)
花にくらして 　けふもまた(七)
身をはなもりと 　なさまほし(七)
あらし待つ間の 　まばしの花と(七)
あくがれて行く 　みやこの人の(七)
ちる花をのみは 　うとみがたし(七)
花散亂せり 　斜風細雨(七)
つちのまに 　ぬれのこる(七)
あとも無く 　枝さりて(七)

花 ふ い き 渦をまき立て(七)
 ほろ く と いたづらに散る(七)
 はたさむからず とさならぬゆき(七)
 花のしらゆき ふみわけて(七)
 花の雪なれば ふむもつらし(七)
 ちりしける花の せろにまみれ(七)

◎春 ◎春 ◎春 ◎春
 ◎夕 ◎夜 ◎眠 ◎曉
(シユンゲウ、ハルノアカツキ)
(シユンヤ、ハルノヨ)
(シユンミン、ハルノチフリ)
(シユンセキ、ハルノユラ)

(五)

ありあけの

えらめる空の

(七)

えのゝめの あさ霞立つ
 とりのこゑ 明ぼのゝそら
 からすなく いさましく鳴く
 まだねふる ねむげに見ゆる
 よこ雲に なみにはなるゝ
 あけちかく あけのかねさへ
 さくらいろ うすべに色の
 あけはなる 早くもえらむ
 まくらなる 枕にかよふ
 あさつゆに つゆはまだひぬ
 なほくらき うすおぼろにて
 さりやらぬ 睡魔は去らず
 ねむけまだ 障子にうつる

うつゝにて いづくともなく
 ちるはなを 香爐にのこる
 伽羅の香の のこんのかをり
 をりくべて 月もろともに
 榊 檀 の 笙ふく人の
 千金 の つきのみやこの
 小犬鳴く ら々のこがねに
 樂の音の きぬの手ざはり
 をしどりの あすの花かこ
 かはづなく 香のけふりや
 いけみづや 魚のはねたる

〔應用〕

ありあけの そちかす(七)

えらみゆく あけがたの(七)
 あかつきの とりのもろ(七)
 えのゝめの そらのかなたに(七)
 あさがすみ立つ えのゝめの(七)
 やよひなかばの あげげのを(七)
 はるのわけばの あさつゆの(七)
 こゑいさましく からす鳴き(七)
 ねむげに見ゆる 海棠の花(七)
 よこぐものそらは 波にはなれた(七)
 あけちかし鐘の おとのきこゆ(七)
 いつのまに しらみしか(七)
 まくらべに はなのかの(七)
 あさつゆは いまだかわかす(七)

うすおぼる (五) あたりをつゝむ (七)
 まださりやらぬ (七) 睡魔にも (七)
 障子にうつる (七) とりのかけ (七)
 いづこともなく (七) こゑのきこえて (七)
 ちるはなを且 (七) うらみつゝまた (七)
 そで香炉のこる (七) さやらのかをり (七)
 のこんのかをりの (七) そでにしる (六)
 せんだんを (七) をりくべて (五)
 ゆか し人 (七) 笙を吹く (五)
 千 (七) 金 (七) に (七) たとへられたる (七)
 すみかゝな (七) つきの都の (七)
 花をまもりて (七) 小犬なく (七)
 ちいのがねに (七) 代へもえじ (七)

樂のまらべせる (七) たかどのには (七)
 こゝろにくきその (七) 人のすさび (六)
 やはらかき (七) 手ぎはりの (五)
 をしどりの (七) 羽音せり (五)
 つみかへる (七) あすの花か (七)
 花か (七) ぞに (七) あすは充たして (七)
 わかくさがくれ (七) かはづなく (七)
 香のけふりの (七) たえ (七) に (七)
 銀波ひらめく (七) いけみづのおも (七)
 こうをのはねたる (七) 水のおとを (七)

◎ 蝶 (七)
 ◎ 堇 (七)
 ◎ 白 (七)
 魚 (七)

◎ 蛇 (七)
 ◎ 蕨 (七)
 ◎ 春 (七)
 ◎ 春 (七)
 ◎ 菜 (七)
 (五) かはびらこ (七)
 とぶてふの (七)
 てふくの (七)
 花のつゆ (七)
 はるの日を (七)
 とびめぐり (七)
 (七) 蝴蝶とぶなり (七)
 あげはのてふと (七)
 花にむつみて (七)
 つゆをしたひて (七)
 雌雄ともに (七)
 風のまに (七)

花のえだ (七) 心のまゝに (七)
 はるかせに (七) つばさならべて (七)
 ひらくと (七) はねうちかはし (七)
 身もかるく (七) 羅綾のたもと (七)
 かるげなり (七) 心のどけく (七)
 つぼすみれ (七) むらさきにはふ (七)
 野のおもは (七) ひばりの床と (七)
 すみれぐさ (七) うちわたしつゝ (七)
 むつましく (七) はるの野邊なる (七)
 しらうをの (七) 玉なすうをの (七)
 はるのうみ (七) 龍女のゆびの (七)
 なくあぶの (七) あぶの羽音の (七)
 ゆめまよふ (七) さもねむげなる (七)

まひるとき
 さわらびの
 いへづとに
 やまづとの
 したわらび
 したもえの
 はるのそら
 かげろふの
 目もはるに
 かさまさる
 はるかはの
 なのはなに
 風かをる

心もいつか
 をかのほとりに
 をりてやゆかん
 伯夷 叔 齊
 こぶしに似たる
 をりものがさす
 うい／＼かすむ
 かげろふのあや
 ゆたかに流る
 野川の水や
 はるの水うみ
 てふさながらの
 てふにまがふや

こがねいろ

〔應 用〕

日もあたゝかき

かせかるく
 こてふとぶ
 とぶてふの
 もるつばさ
 花にむつみて
 めをもるともに
 花のつゆすふ
 心のまゝに
 はるかせにかるく
 つばさはひらく
 つばすみれ

かはびらこ
 のべのはる
 ゆめもなつかし
 あげはのてふと
 身もかるく
 とびつれて
 はるのこてふの
 花より花へ
 のりてうかぶ
 身はかるやか
 むらさきの

むらさきの
 かりきたる
 すみれぐさ
 ともつれだちて
 はるのゝべなる
 玉かと思ゆる
 うきまらうをの
 龍女のゆびとも
 なくあぶねむげに
 ゆめまよふ
 さなきだに
 さわらびの
 いへづとに

野となりぬ
 ひばりはいづこ
 かごにつみとり
 むつましく
 つばすみれ
 うをのきよさに
 けがれもなくて
 見なんうをの
 こゑのきこゆ
 あぶのこゑ
 まひるとき
 もゆるをかのべ
 をりて行かまし

伯夷 叔 齊

さわらびを

わらびを山に
 首陽のやまに
 周につかへず
 したもえのわらび
 かげろふのあやの
 見わたせば
 ゆたかなり
 かさまさる
 はるかはの
 はるの水うみ
 てふさながらの
 てふとぶはるの野

とりくらし
 わらびをとりて
 義をぞまもれる
 もゆるおもひ
 みだるゝそら
 目もはるに
 はるの水
 淺さはの水
 いつしかみちて
 かせわたる
 菜の花と
 かせはかをる

こてふもまがふや
こがねいろに(六八)

◎ 藤(チフ) ◎ 牡 ◎ 更 ◎ 新 ◎ 郭 ◎ 莒 ◎ 端 ◎ 梅 ◎ 螢 ◎ 夏
 ◎ 丹(ホタ) ◎ 衣(ガ) ◎ 樹(シユ) ◎ 公(ギト) ◎ 蒲(シヤ) ◎ 午(ウ) ◎ 雨(シ) ◎ 夜(ハ) ◎ 夏月(ナツノ) ◎ 附 夏月(ナツノ) ◎ 附 大暑(オホシユ)

◎ 夕(ユフ) ◎ 納(ナ)

〔語〕

立(ユフ) 涼(リヤフ)

〔句〕

(五)

ふぢなみの
松に咲く
みぎはなる
こすゑより
えらふぢの
影うつす
牡丹たんくわん花の
はつか草
ふかみぐさ

むらさきの波
まつにかゝりて
藤のなみよる
むらさきの波
わかむらさきの
まつのうら葉に
花の王とて
はづかのさかり
富貴の花と

(七)

たをやめの
ころもがへ
ぬぎかふる
ころも手に
花ぞめの
わかもみぢ
まげりそふ
みどりなる
うすくこく
あを葉して
あをあらし
ほととぎす
血に鳴きて

わか葉のかげの
えろたへのきぬ
たもとも軽く
春のかたみの
花の香は無し
木々のあを葉に
このしたやみと
あとは残らぬ
はなのあとだに
あを葉の山と
まげりにけりな
とほざかりゆく
までのたをさの

まぢあかす
ふるさとを
つきかちて
あやめぐさ
花あやめ
かきつばた
花しやうぶ
やりかたな
たちつるぎ
はたざるし
ものゝふの
かしは餅
ふきながし

八千八せんぱち 八こ 八あ 八あ
あやにく雨の
まくらに残る
まこも隠れの
ぬまのあやめの
池の水まで
浅澤ぬまの
かをる池水
をのこの節句せつこ
武者人形を
國をまもれや
鯉りゆうふきながし
龍門りゅうもんの鯉

ぐそくびつ
うまざるし
さつきあめ
さつき闇
さみだれて
はれやらで
ふりつゝく
あま雲の
くさり行く
くもとちて
をやみ無く
ほたる火の
とぶほたる

かざり兜の
連錢あし毛
ふるさみだれの
水かさまさりて
かさくらしふる
さつきの雨の
沼の岩垣
日數ふれども
かは瀬も早し
かはなみ高し
葉はいきくと
月めづらしき
みさをにもゆる

おともせず
玉とちる
ゆふぐれに
ゆふつゆに
ゆふかせに
くさむらの
ゆふやみの
なつの上や
あけやすき
ゆめさめて
つきのかけ
にはのおも
ありあけの

よるのやみぢを
草葉にすだく
うちはの風を
みだるゝ玉の
かごにやしなふ
玉とびかひて
まなびの窓の
ねぐるしくして
ゆめ成りがたき
みじかき夜の
竹吹く風の
あかつきがたの
ゆめはゝかなし

あさかせの
みじか夜の
なきすさぶ
せみしぐれ
なくせみの
ひとしきり
ゆふかせに
つゆすひて
火のくるま
風たえて
まひるどき
たきのあせ
祝融の

すゞしさ添へて
夏はよそなる
むらさめかとも
あらし吹くなり
つゆのいのちの
なくね涼しき
こゑたかごと
山まつのえた
金もとろけて
もゆるばかりの
汗はながれて
火龍にのりて
世をゆで釜と

寒暑針
くもの山
氷かむ
うちは取る
ゆふだちの
ひとふりの
にはかあめ
はためきの
なるかみの
いなづまや
はるゝまも
さりげなく
ゆふすゞみ

寒暖計の
ゆふだちぐもの
ゆだるばかりの
身のおきどころ
ひとむらさめの
かみなりわたり
土砂おしながす
風ふきそひて
粒おほきなる
天地もうごく
ふきたつかせの
いはまのしみづ
舟をながして

去たかけに さながら秋と
 たきのいと 秋となりぬる
 さくはすの かをりゆかしき
 つゆの玉 にぞりにしまで
 風かをる あきつとびかふ
 ひしの花 藻による小魚

〔語句〕

ふぢなみの まつがえに(五)
 まつがえに たれかゝり(五)
 むらさきの 波ゆふかせに(七)
 ゆらめくや むらさきの波(五)
 松にかゝりて さくふぢの(七)
 みどりにかゝる むらさきの(七)

みぎはのふぢの かけをうつして(七)
 ふぢのなみよる まつのした蔭(七)
 ゆかりのいろなる そのむらさき(六)
 むらさきのなか しらふぢさく(六)
 去らふぢの きは立ちて(五)
 むらさきに しらふぢの(五)
 色 さ ゆる わかむらさきの(七)
 むらさきの かけをうつして(七)
 かけをひたして いけ 水に(七)
 かけをひたすか 染めんとして(七)
 まつのうら葉に かけるしらふぢ(七)
 富貴の花と いふ牡丹花の(七)
 ばたんのはつ花 つゆをおもみ(六)

つゞさき去ほらし いろのさえて(六)
 花 の 王 ばたんくわの(五)
 ながゝらぬ はつかぐさ(五)
 はつかぐさ わづかのさかり(七)
 つゆぬれて いろふかみぐさ(七)
 つゝにいけたる ばたんくわの(七)
 なやむふせいの たをやめの(七)
 わか葉のかげの いとこひしく(七)
 かせもかをりて わか葉のかげの(七)
 ころもがへしては かるき袖を(六)
 去ろたへのきぬに あらたまりて(六)
 ぬぎかへて 身もかるし(五)
 たもと吹く かせかるく(五)

ころも手に 吹くかせす(七)
 はなぞのを はるのかたみと(五)
 花の香はなき なつころも(七)
 わか芽のもみぢ つゆきよみ(七)
 まどのかへでも わかもみぢして(七)
 木々のあを葉に かせかをるなり(七)
 去げりそふ きのしたの(五)
 こしたやみ ひるくらき(五)
 みどりなる このしたやみと(七)
 花 の いろ あとものこらす(五)
 みどりのいろの うすくこく(七)
 花のかたみを いづれとも(五)
 あを葉の山に ほとゞぎす鳴く(七)

あを葉しげれる なつの山路に(七)
 あをあらし吹く なつのやまみち(七)
 玄げりにけりな なつの山の(八)
 よなく待ちにし ほとゝぎすを(八)
 とほざかりゆける こゑのかすか(八)
 血になきて さつきぞら(五)
 まちあかす ほとゝぎす(五)
 血になくや 八千八 聲(五)
 待ちもたゆ よひくのゆめ(五)
 去でのたをさの ほとゝぎす(五)
 思ひいづれば ふるさとの(五)
 ふるさとしのふ ゆふべのあめに(五)
 あやにく雨の おもひをそふる(五)

やまのつきおちて ふけしよはの(八)
 まくらにかよへる くるしきこゑ(八)
 あやめぐさ 花さきて(五)
 花 あやめ やつ橋の(五)
 さきいでゝ まこもがくれに(五)
 さきいでし ぬまのあやめの(五)
 かきつばたおふ 池みづの(七)
 水さしぬけて 花しやうぶ(五)
 あさ澤ぬまに 水ふるまして(七)
 やりよかたなと 立てつらねつゝ(七)
 をのこのいはひと やりを立てゝ(八)
 ふきながし 鯉およ(五)
 はたじるし 家の 紋(五)

たちつるぎ さやをはらひて(七)
 かざりたる 武者人ぎやうを(七)
 ものゝふのみち くにまもる(七)
 國をまもれや 武者共の(七)
 ときはの葉なる かしはのもちひ(七)
 かしはのもちひ ちまきのさゝを(七)
 龍門のこひを かどに立てゝ(八)
 かざる具足びつ むかし忍ぶ(八)
 うまじるし さしものゝ(五)
 あしげなる 二 歳 駒(五)
 たつがしら かざりかぶとの(七)
 のる 駒は れんせんあし毛(七)
 ふるさみだれの をやみなく(七)

ふりつゝきたる さつきあめ(七)
 如法 闇夜の さつきやみとて(七)
 さつきばれ待つ 世の人をゝる(七)
 みかささりつゝ せきもあへず(八)
 さみだるゝそらの 闇となれば(八)
 かきくらし さみだれの(五)
 はれやらす むねもまた(五)
 ぬれまさる さつきあめの(五)
 ふりつゝく 池のみぎはに(五)
 ぬまのいはがき 水こえて(七)
 足たれさがる あまぐもの(七)
 日敷はふれども をやみなくて(八)
 くさりゆくまこも 螢となる(八)

水はしる かは瀬かな(五)
あつ布の くもとちて(五)
川なみの たからかに鳴る(五)
草よ木よ 葉はいきくと(五)
星にまがひて はたる火の(五)
つきめづらしき こよひもや(五)
いさゝをがはを とびゆくほたる(五)
みさをにもえて こよひもほたる(五)
おともせず燃ゆる おもひあはれ(五)
やみぢをてらして 星にまがふ(五)
はれやらぬ よるのやみ(五)
玉とちり つゆとおち(五)
まだ飛ばで くさばに集く(五)

ゆふやみに 草ふみわけて(五)
うちは取りそへ ほたるかど(五)
うちはの風に あへなくも(五)
あしの葉末に ゆふつゆのぼる(五)
みだるゝ玉と ほたるの散りて(五)
ほたるたよくと かせに乗りて(五)
かどの限りなる いのちあはれ(五)
ゆふやみを 縫ひてとぶ(五)
ゆふやみに かけまゐるし(五)
ふみまなぶ まどのもし火(五)
なつの夜は あけやすきさへ(五)
あけやすくして いねられず(五)
あかつきはやく ゆめもなく(五)

ねぐるしなつの夜 ゆめもならず(五)
よひながら夏は あけやすきを(五)
ゆめも成りがたき 夏の夜半(五)
ゆめはやく さめし夜の(五)
みじか夜の つきのかげ(五)
竹に よる つきかげす(五)
月もりて 竹ふくかせ(五)
月になりたる にはのおも(五)
あかつきがたの ねざめにも(五)
ありあけのゆめの いつか絶えて(五)
はかなくさめたる ゆめの戀ひし(五)
はだにしむ あさかせに(五)
あさかせの すいしさに(五)

あけがたは すいしさに添へて(五)
みじかよの いつかあけ行く(五)
夏はよそなる すいしさに(五)
なつのあつさも わすられて(五)
あめのふるかと せみのこゑ(五)
せみしぐれする ゆふがたのそら(五)
むらさめか せみのこゑ(五)
もろこゑに なき立て(五)
聞きなせば あらし吹くかと(五)
なくせみの こゑを雨かと(五)
つゆのいのちと しらぬ身の(五)
はれまを待ちて ひとしきり(五)
なくねすしき せみのこゑかな(五)

ゆふかせになく せみのこゑなく(七)
 たか ぐいと 去らべして(五)
 つゆすひて いくる身の(五)
 やまゝつの えだをすみかと(五)
 すみかななり やまゝつのえだ(五)
 火のくるまゆく 乾 蒸 しの(五)
 そらにきしれる 火のくるま(五)
 みなづきとさへ 名にもいふなり(七)
 かねもとろくる みなづきの(五)
 かせも絶えはてゝ 髪うでかす(六)
 棟なるいらかも もゆるばかり(六)
 汗 しとゝ まひるどき(五)
 まひるどき 目もくもる(五)

たきつせと 汗はながれて(七)
 たきのあせ きぬもしとゝに(七)
 火龍にのりて 祝 融 の(五)
 火龍むちうち 祝 融 の(五)
 世はゆでがまか 火のむろかとも(七)
 ゆだるばかりの 人のくるしみ(七)
 のぼりてのぼれる 寒 暑 針 の(五)
 のぼりてくだらぬ 寒 暖 計(六)
 わきおこる くもの山(五)
 いるく の くものみね(五)
 ゆふだちの くものけはひに(七)
 わき立てる ゆふだちのくも(七)
 しばしの間にも 氷 嚙 む(七)

盛れるこほりの 白 玉 を(五)
 うちはとるさへ ものうきまで(七)
 うちは取るべき ちからも盡きて(七)
 うつせみをさても いかにすべき(六)
 ゆふだちのそらも たのもしげに(六)
 むらさめの 過ぎよかし(五)
 ひとふりの あめのほし(五)
 はためきて なるかみのおと(五)
 いかづちの はためきして(七)
 あめもがなとて いのるなり(七)
 さとふりきたる にはかあめ(七)
 かみ鳴りのたり いなづま飛びて(七)
 盆をかへして にはかに雨の(七)

にはかあめ土砂(七) おしながして(六)
 風さへ荒らか しのつくあめ(六)
 ふきそへる よこかせに(五)
 おほきなる あめのつふ(五)
 いなづまの きらめきてけり(五)
 いなづまの 虚空にはしる(五)
 天地のうごく はためきに(五)
 降るま有りしか はるゝ間の(五)
 はるゝまちかき ゆふだちの雨(七)
 ゆふだちの雨 あとなごりなく(七)
 ふきたつかざおと 山はあれて(六)
 あとはさりげなく 澄める月の(六)
 いはしみづ むせかへる(五)

ふねうけて ゆふすいみ(五)
 秋を引くく たきのいとかな(五)
 さくはすに 風もかをりて(五)
 かをりゆかしき はすいけの(五)
 いけのみぎはに 六 郎 の(五)
 つゆの玉ちる はすのひろ葉に(五)
 にでれるつゆも 玉となりぬる(五)
 にぐりにそまらで きよきはちす(五)
 せろにはおひても せろにそます(五)
 藻による小うをに ゆらぐ花の(五)

◎ 蠟 附は(と)りぐも
 ◎ 蝠 (カモ) 蝠 (モリ)
 ◎ 蚊 (カ)

(五)

◎ 蛇 (ヒ) ◎ 蜂 (チ) ◎ 蟻 (リ) ◎ 蝸 (リ) ◎ ひ (ヒ) ◎ べ (ヒ) ◎ う (ヒ) ◎ 夕 (ヒ) ◎ 晝 (ヒ) ◎ 瓜 (ヒ)

牛 (カヌツ) ね (カヌツ) の (カヌツ) 水 (カヌツ) 顔 (カヌツ) 附朝顔 (カヌツ)

(七)

あつさも知らで
 くさきも知らで

いとひなく けがれを知らで
 よせきつゝ わづらはしくも
 つばさには おへども去らず
 ほどもなく うまの尾につく
 さまたげに また立ちかへる
 めさどきを はへとりぐもの
 するどくて をりを見る目の
 とらへつゝ さすがの蠅も
 かはほりの やなぎのかげに
 日をいとふ やみを去たひて
 ひるのまは 日かけ見ぬ身の
 ゆふまぐれ ねぐらを出でゝ
 蚊となりて つばさおひいで

ぼうむりの ぼうむりむしの
 かやり火に やぶ蚊てふ名の
 かばしらの 蚊のよるのきの
 人の血を うきしづみせる
 へびのきぬ うとまるゝ身の
 くらなはの かくれしのびて
 くさまくら うねりゆく哉
 辨 天女 天女のほこら
 みつばちの 針有るはちの
 くま蜂の さすを恐れて
 ふゆごもり 冬のためとて
 いとねば 蜜をつくりて
 あつき日を たくはふる蜜

いそしみて	まばらぐのまも
はげむ身の	あらしふつのも
かたつむり	身ともろともに
おのがいへ	うき世をやすく
ひるねして	ゆめにむかしを
みなみまど	宰予をまなぶ
すゝかせに	見ぬ世の人を
べにの花	ゆかしきものに
うち水の	すだれにつたふ
やり水に	すこしの風の
にはくさの	庭の草木も
あつさ無き	よみがへりつゝ
ゆふがほの	ゆふがほだなの

したかげに	したすゝみして
世をさけて	あさがほの花
つゆのまの	つゆのいのちの
あさごとに	日影にうとき
とくおきて	のべのひるがほ
立つちりの	つるもしばまぬ
あすの花	あつさ加はる
瓜の香 <small>の</small>	水にひたせる
まくは瓜	氷に似たる
むしの餌に	瓜の皮むく
うるさしと	なつのはへ <small>(五)</small>
むれて飛ぶ	なつの <small>の</small> 蠅 <small>(五)</small>

〔語句〕

とぶさばへ	あつさも知らず <small>(五)</small>
蠅の身の	なつは知らず <small>(五)</small>
くさきも知らで	あつまれる <small>(五)</small>
くされしものも	いとひなく <small>(五)</small>
けがれを知らで	よりあつまりて <small>(五)</small>
わづらはしくも	寄せきて去らず <small>(五)</small>
千里の道ゆく	つばさもつか <small>(六)</small>
おへどもおへども	去らず行かず <small>(六)</small>
にげてまた	ほどもなく <small>(五)</small>
うまの尾に	つきて行く <small>(五)</small>
ふみまなふ	さまたげになる <small>(五)</small>
さまたげに	なると知らずや <small>(五)</small>
おはれてはまた	立ちかへり <small>(五)</small>

ところさだめず	身のまゝ <small>(五)</small>
われにまさりて	めざるとき蜘蛛 <small>(七)</small>
はへとりぐもの	いとめざるとき <small>(七)</small>
そと目するどく	見あやまたず <small>(八)</small>
うかいひてをりを	ねらふまなこ <small>(八)</small>
さすがなる	蠅の身 <small>(五)</small>
はへの身も	餌とぞなる <small>(五)</small>
目をいとふ	かはほりの身 <small>(五)</small>
かはほりの	ひるはかくれて <small>(七)</small>
やみをしたひて	ゆふぐれの <small>(五)</small>
日かげ見ぬ身は	ひるのま <small>(五)</small>
たい待ちくらす	ゆふまぐれかな <small>(五)</small>
ねぐらを出でよ	蚊をおひありき <small>(五)</small>

蚊となるまでには うきしづみに(六)
 うきしづみあまた やがて蚊とは(六)
 ぼうふりの もとの身を(五)
 おひいでし もろつばさ(五)
 もとの身の ぼうふりむしの(七)
 かやり火の たうらめしき(七)
 人はいのちと かやり火を(七)
 かやり火をのみ たのむかな(七)
 蚊のよる軒の ゆふかせす(七)
 のきのしのふに けふりなびきて(七)
 あはれ人の血を すひてくらす(六)
 人の血にうつや したつゞみの(六)
 やぶ蚊てふ 名に負ひて(五)

かばしらの 立つそらに(五)
 かはりては もぬけのからと(五)
 へびのきぬ 枝にかゝりて(七)
 世にうとまるゝ へびの身の(七)
 只くちなはを おそろしと(七)
 おそろしとのみ 世の人は云ふ(七)
 身と外と敵との 世のなかに(七)
 かくれつしのびつ くさのなかを(六)
 かたき多き身の わがくさまくら(六)
 うねりゆく しまへびの(五)
 べんてん女ま めでたまふ(五)
 へび祭る 天女のほこら(七)
 みつばちの つとめはげみて(五)

針 ありて 身をまもるべき(五)
 名もいかめしや くま蜂と(七)
 おそれもはりの ゆゑにこそ(七)
 ふゆごもりする たくはへにと(七)
 冬のためとて つとめはげみて(七)
 かたつむりふたつ あらそふ角(六)
 わが身ともろとも いへを引きて(六)
 わがいへは うきよかな(五)
 世はやすし かたつむり(五)
 ひるねして むかしの人を(七)
 ひるねには 見ぬ世のさまも(七)
 見ぬ世も見て うとく(七)
 ゆめにむかしを みなみ窓(七)

宰予まなぶと そしらばしれ(七)
 夢をすゝかせに はこばせて行く(七)
 優いなりや べにの花(五)
 きけば 只 ゆかしく(五)
 ゆくすゑは いづくの君の(七)
 たが肌はに ふれなん身ぞ(七)
 すだれにつたふ うち水の(五)
 にはのおもてに うつ水の(七)
 すだれをつたふ 水のしづくを(七)
 にはくさにうつ 水のしづくの(七)
 庭なるくさきも 水にぬれて(六)
 くさ木もうれしげ つゆのたる(六)
 ひるのまの あつさ無し(五)

暑さはとは世をへだつ(五)
 花もわが身もよみがへりつ(五)
 ゆふがほの棚のしたかせ(五)
 ゆふがほだなのしたす(五)
 ゆふがほだなのまとぬかな(五)
 うき世をさけてゆふがほ棚の(五)
 ゆふがほだなのしたかけす(五)
 かはらぬあさがほ垣にさけり(五)
 つゆのまつかのまもろきいのち(五)
 あさごととにささかへて(五)
 日のひかりさてつらき(五)
 つゆの身の日かげにうとし(五)
 いさいでよあさがほに水(五)

のべのひる顔てらす日の(五)
 むされてのぼるちりの香(五)
 ちりにそまらぬひるがほの花(五)
 つるもしばますてる目をめぐり(五)
 あすは花いくつ咲かすべきか(五)
 あつさ加はりて瓜のにはひ(五)
 うりの香をかせつたふ(五)
 こけしみづくみとりて(五)
 瓜ひたすいはまのしみづ(五)
 ひやし瓜こほりに似たり(五)

◎初秋(アキ) ◎七草(ナニ)
 ◎萩(キナ) ◎雁(カ)
 ◎虫(シム) ◎露(ユツ)

◎秋風(アキカゼ) ◎霧(キリ)
 ◎秋雨(アキアメ)

〔語句〕

應用例は大抵つぎの秋夜その他の應用例を参考して十分ゆゑこゝに省く

(五) 秋たちて 秋はきにけり
 くる秋の 秋となりては
 秋を去る 秋のたよりの
 桐の葉の 秋のおとづれ
 さり一葉(ひと) 去らせがはなる
 いつのまに おひしげりたる
 やへむぐら こぼるゝ露に
 風わたる 小田ふく風の

風さえて たもとすしき
 袖かるし きぬのかるきを
 西のかせ 身にしみわたる
 秋めきて いっしか秋と
 秋はまだ まだ立ちしとも
 露しげく つゆおきまざる
 露おもく 袖にもつゆの
 あさぢはら をのゝ篠はら
 のべのくさ 只枯れいそぐ
 つゆけくて 露おもくして
 をぎの葉に 葉をふくかせの
 おくつゆの しら露の玉
 そでぬれて ぬれてかはかぬ

秋のいろ
ゆふづきの
くすの葉や
野分きめく
立つきりの
はつぎりの
ゆふぎりの
ながき夜の
かせのおと
あふぎをも
いろづきて
ふくかせの
秋かせの

いろまさりゆく
つきかげしろし
葉うらは白き
のわきだちたる
やまもとの庵
きり立つ夕の
うすぎりの立つ
夜ながとなりて
身にしむおとの
わすれしあふぎ
雁のなみだの
あといと志るき
袖もかるげに

おとづれて
雁わたる
そでのつゆ
ななくさの
はぎの花
みやぎの
あきはぎの
つゆふくむ
小萩おふ
はぎはらに
かれをばな
をばな咲く
すゝきはら

おとづれもなき
なきわたるなり
袖おもりゆく
のべのななくさ
はぎの花づま
のべのいと萩
はぎには鹿の
下ひもときて
こはぎが原の
はぎの下つゆ
はぎのはつ花
をばな浪よる
すゝきはら

しますゝき
まのすゝき
いとすゝき
はたすゝき
ほすゝきの
くすの花
風わたる
かるかやの
ふぢばかま
かにゝほふ
をみなへし
をとこべし
なまめきて

すゝきにわたる
たかの羽すゝき
ますをのすゝき
はなすゝきおふ
ほこにも似たる
くすのうら葉や
うらみの葉とて
みだれくく
たがぬぎすてし
ぬしはたれとも
いろめくのべの
まがきのもとの
なびくを見れば

むすぶかな
うちとけて
たをやめの
あさがほの
ゆふがほの
つゆのまの
なかいきに
紫苑さく
木犀の
とぶかりの
かりがねの
なかぞらの
聲しるく

うしろめたきに
露をおもげに
まくらさだめぬ
日かげをしらぬ
ゆめのいのちと
とくおきいで
はやうらがれて
十五夜ばなの
なくこゑさけば
粟のまとほく
はつかりがねの
くもゐのよそに
田のもにおつる

かりのこゑ
 文字をかく
 秋のむし
 むしかどの
 むしえらみ
 むしのこゑ
 ながき夜を
 きりくす
 まつむしの
 くつわむし
 はたおりや
 かうるぎの
 すいむしを

わたるかりがね
 かりのいつら
 つゆにはかりを
 みやこほちに
 ぬれそぼちつゝ
 ふけゆくまゝに
 すこしかねたる
 うき秋かせを
 ながき夜すがら
 身にしむこゑの
 した草になく
 つゆの底なる
 あはれ名のりて

くさひばり
 くつわむし
 つゆしろく
 しらつゆの
 さむしろに
 よもぎふの
 蟲のこゑく
 をぎを吹く
 あさぢふの
 いかにせん
 むらだちの
 きりの葉を
 ゆふされば

きくとも見えす
 よさむの床の
 やがては霜と
 ゆめ安からぬ
 ねざめわびしき
 こゑもつゆけき
 草のまくらに
 をぎのうはかせ
 秋かせぞふく
 身にしむかせの
 袖ふきかへし
 ねやのひまさへ
 いなだをわたる

ふきみだす
 こがらしと
 ふるさとを
 なき人を
 なるこ引く
 ゆめさそふ
 わが身には
 野わきだつ
 のわきして
 きりこめて
 きりのうみ
 あさぎりの
 ゆふぎりの

はなみをわたる
 ゆめおどろかす
 さむきゆふかせ
 秋のはつかせ
 小田のゆふ風
 露ふきむすぶ
 思ひしりぬる
 つらさのわきの
 きりたちのぼる
 きりのまがきに
 きり立ちのぼる
 山をもこめて
 つりふねの行く

かはぎりの
 あさぎりの
 きりがくれ
 わけいりて
 秋のあめ
 うつおとの
 袖ぬれて

かぢのおとかな
 人かげもなき
 きりがくれゆく
 こゑのきこゆる
 草葉のいろの
 長き夜いと
 ふりくらししてぞ

◎ 秋 (アキ)
 ◎ 鷓 (セウ)
 ◎ 月 (ツキ)
 ◎ 擣 (ウツ)
 ◎ 演 (エン)
 ◎ 遠 (エン)
 ◎ 衣 (イ)
 ◎ 習 (シユ)
 ◎ 足 (ソク)

(五)

ながき夜の
まどろまぬ
いとながき
すがのねの
なく雁の
ともし火の
いねもせで
ねもやらで

◎ 菊
◎ 紅
◎ 葉
〔語句〕

(七)

秋のよながと
ねざめはつらき
ねざめわびしき
ながくし夜の
まのぶにあまる
ありあけの月
まどろみもせず
よわるむしのね

なみだかな
身と共に
おもひいで
身のうへの
身にしみて
うづらなく
かたうづら
てる月の
秋のいろ
つきかげの
つき夜よし
てる月の
かげかをる

まどうつあめの
いさのこる蚊の
ふるさとしのぶ
身のゆく末を
よわるむしのね
うづらのとこに
うづら聲する
てるかけきよみ
秋のなかばと
つきのかつらの
かつらのみやこ
月にさをさし
あきのもなかの

つきふけて
さしのぼる
入る山の
いでしほの
かつらをの
つきのさえ
つきさゆる
くもりなき
みなそこに
夜はふけて
只ひとせに
はしぬして
ありあけの

つきかたむきぬ
つき入るかたの
くまなき影を
としぐに見る
むかしながらの
つきの都に
かたぶける影
夜わたる月の
さえたる影の
をすまきあけて
小夜ふけぬらし
まつのこずゑに
ねよとのかねの

ゆみはりの
かたわれの
上^{じやう} 弦^{げん} の
もちのよの
いざよひの
たちまちの
中ぞらに
さよどろも
うちしきる
夜をかさね
むらぎとの
断腸の
霜夜にも

木犀^{きし}の香^かの
かたわれ月の
下^げ 弦^{げん} のつきの
ねまちの月を
みかづきかゝる
こよひばかりを
まつ程とほき
さよのきぬたを
ねぬ夜のもも
よはのきぬたの
袖をしぼらん
音ぞかなしき
月にうつこゑ

かうろぎの
まごゝろを
よさむにも
思ひやる
さごろもの
秋たかし
うま肥えぬ
といろきて
おほづゝの
きらめくや
たちつるぎ
いなづまの
天柱も

たが遠づまの
心をこめて
はなれしかたの
ゆめつゝませて
むねにもしみて
雲立ちまよふ
こづゝの音の
くつがへすまで
猛火まうくわふき出す
こほりのやいば
つるぎのひかり
大地ゆすりて
爆裂させて

坤軸も
水雷の
水雷火
信號に
吶喊の
突撃を
進軍の
突貫を
つきすゝむ
銃剣を
まつしぐら
偵察に
捕虜となる

ダイナマイトの
微塵となりて
海なりわたり
水といろかす
あひづの旗に
えめすあひづに
ときのことゑして
をめき叫びて
岩もとほれと
鐵もくだけよ
一齊射撃
槍ひきしごき
あやしのものと

一もんじ
またゝく間ま
はだめきの
なる神の
ほねの山
いかづちの
さかまけば
くさまくら
一すぢの
ますらをの
ほばしらに
波をけて
砲門に

おもてもふらず
魚鱗の陣と
はだめく神の
ふるひうごきて
ながす血の川
おと凄ましく
けふりさかまく
野營の月の
川をわたりて
風にのり行く
水をうつ懼
マストに命いのち
いかりのつなの

甲板を
矢を射りて
なくこまの
れんたいき
わきかへる
うなばらに
道のため
遠足とんぞくに
もみぢがり
わらぢはき
のぞみ見て
まのあたり
たびのそら

ポオトおろして
やみにまぎれて
いなゝく駒の
旗はひらめく
いはかど鳴らし
ふみやぶれかし
道にそむかば
ふた夜どまりの
たびねのこゝろ
ふみにて見しを
糧かきとりそろへ
まなびのまどの
まばしなからの

そでのつゆ　しのぶにあまる(七)
 ともし火を　こゝろのときと(七)
 ありあけの月　なほのこる(七)
 いとゝうらみは　ありあけの(七)
 いねもえやらで　むなしく過ぐす(七)
 まどろみもせぬ　このよひくを(七)
 ねもやらで過ぐす　あきのよなが(七)
 むしのねよわりて　ひいにはそし(七)
 そのいのち　ほどもなし(七)
 むしのねの　よわりゆく(七)
 なみだかな　よわるむしにも(七)
 よはのあめ　なみだをさそふ(七)
 まどろつ雨の　おと聞けば(七)

むねもくだくる　あめのおと(七)
 この身とともに　おとろへゆきて(七)
 うきは變はらぬ　おなじ身のうへ(七)
 生のこる、あはれ　蚊の、ありさま(七)
 飛もえで、あはれ　蚊はうごめく(七)
 あはれ蚊よ　ときめきし(七)
 ときめきし　なつの日は(七)
 なつの日も　ありにしものを(七)
 ありにしを　今はよわりて(七)
 よわりく　すくむかな(七)
 すぎこしかたを　おもひで(七)
 おもひいづれば　わがふるさとの(七)
 わがふるさとの　ちよはよと(七)

ちよみはよみ　もとのまゝに(七)
 いかになりゆかん　わが身のうへ(七)
 ゆくすゑを　おもひやり(七)
 身にしみて　思ふかも(七)
 ゆくすゑを　おもへばとほし(七)
 むしのねも　まもによわりて(七)
 をぎのうはかせ　うづら鳴く(七)
 あはれをそへて　うづらなく(七)
 うづらのとこに　この身を寄せん(七)
 うづらのとこの　くさをまぐらに(七)
 あはれかたうづら　ひとり膝をのむ(七)
 うづらのこゑして　くさのいろも(七)
 て　る　月　の　か　げ　き　よ　み(七)

て　る　月　の　か　げ　に　は　ふ(七)
 もちのつき　てるかげきよみ(七)
 秋　の　い　ろ　そ　ら　に　ま　ら　れ　て(七)
 秋のなかばと　なりにけり(七)
 秋のなかばの　つきかげの(七)
 てるつきかげの　いとさよくして(七)
 つきのかつらの　はなぞかをれる(七)
 かつら花さきて　そらにかをる(七)
 かつらの花さく　あきのなかば(七)
 つき夜よし　かせきよし(七)
 つき夜よし　いで舟を(七)
 い　で　舟　を　こ　ぎ　す　め　よ　や(七)
 水　の　ま　ゝ　ふ　ね　を　う　か　べ　て(七)

ふねをうかべて ゆくまゝに(五)
 つきのみやこに さをさして(五)
 つきにさをさし 舟をすゝめて(五)
 てるつきのかげ いとゝかをれる(五)
 てりまさるこよひ あきのもなか(六)
 さりとも知らぬ間^ま つきは更けて(六)
 かたむける よなかすぎ(五)
 ねもやらで ながめつゝ(五)
 さしのぼる かたより赤く(五)
 さしのぼる かげのにはひに(五)
 入るかた近く よこぐもの(五)
 雲さまたげに なるみがた(五)
 入るやまのはに くものたなびく(五)

くま無きかげを 水にとゝめて(五)
 去ははのぼりきぬ 月もやがて(六)
 としぐに見ては おなじかげの(六)
 かつらをの にはやかに(五)
 かつらをの おもかげを(五)
 そのかげは むかしながらの(五)
 つきのさえ さすがに秋の(五)
 さすがの秋とて ひとしほの(五)
 てりそふひかり くまなくて(五)
 つきのみやこに ふねをうかめて(五)
 つきさゆる空 そらすめる月(五)
 かたふけるかげを 惜しとばかり(六)
 くもりなきかげに 塵のあとも(六)

かげきよく くもりなく(五)
 くもりなき かゝみかな(五)
 雁 鳴くや よわたる月の(五)
 みなそこの つきのみやこや(五)
 さえたるかげの うかぶなり(五)
 ながむるかたに 夜はふけて(五)
 をすまきあけて こよひばかりは(五)
 只ひとゝせに たゞひとゝきの(五)
 小夜はふけぬらし つゆは凝りぬ(六)
 はしあするのみの よはのまゝ(六)
 やまゝつ の えだ高く(五)
 こすゑにぞ 月すめる(五)
 ありあけの いろさへまさる(五)

聞きすくす ねよとのかねの(五)
 ゆみはりづきの 影ふけて(五)
 しづみてかゝる もくせい(五)
 木犀のかの 月にかをりて(五)
 かたわれづきの かげほのぐらく(五)
 かたわれづきの かげのうすき(六)
 つきは上弦の かげをえめし(六)
 上 弦 の つきの 弓(五)
 のこるつき 下弦なり(五)
 はりゆるむ 下弦のつきの(五)
 もちのよの 見ごろの月に(五)
 ねまちの月を こよひまた(五)
 ねまちの月よ まよなかの(五)

いざよひづきの くまなきひかり(七)
くものあなたに かゝるみかづき(七)
たちまちの月を さすが待ちて(八)
こよひのかけをぞ 秋のいろと(九)
中 ぞ ら を きしりゆく(五)
中 ぞ ら に 銀輪(五) の(五)
まつほとは たいとほくのみ(五)
とほくのみ たいかもはれて(五)
さよにきぬたを うつおとの(五)
やゝうちそめし さよごるも(五)
きぬた打つく よひく音の(五)
うつさよぎぬた とほねのかなし(五)
うちしきるよはの きぬた音(五)

ねぬよのともとて きぬたをうつ(六)
きぬたうつ つまの身の(五)
むらぎとの こゝかし(五)
征人(七) の なみだなりけり(七)
袖 た も と 志ぼる征人(七)
はらわたを断つ ばかりなる(五)
たゞ断腸の たねとなる(五)
ころもうつぞと 聞くぞかなし(五)
手さきこゆる 霜夜と知るか(五)
志もよもいとはず うつやころも(六)
つきにうつ聲の とほくきこゆ(六)
ともなふは かうるぎの(五)
なくおもひ かうるぎの(五)

たが いへの とは妻のわざ(七)
まごゝろを きぬにうちこめ(五)
心をこめて うつきぬの(五)
よさむのとこの さむしるに(五)
はなれしかたを おもひやりつ(五)
うちしころもに ゆめ包ませて(五)
のこる身のおもひ つゝみおくる(六)
さごるものきぬは よしうすくとも(六)
つまのおもひ むねにしむ(五)
秋 ふ けて うま肥えぬ(五)
秋 た かく うまはいさめり(五)
吹くけふり くも立ちまよふ(五)
こづゝのおとの といろき(五)

つるべて放つ つゝおとに(五)
うみ山かけて くつがへすまで(五)
おほづゝこづゝ といろきなりて(五)
おほづゝ鳴り鳴る 猛火を吹き吹く(六)
きらめくこほりの やいば白し(六)
たちつるぎ 手にとりて(五)
たちつるぎ 國のため(五)
國のため たちとりもちて(五)
きらめくや つるぎのひかり(五)
ひかりさながら いなづまの(五)
大地ゆすりて なりわたる(五)
天柱(七)くだけ 地維切れ飛びて(七)
爆裂させて まよふ硝煙(七)

坤軸くたけて 天柱折れ(六)
 山も岩も粉に ダイナマイト(六)
 水 雷 に 微塵(五) なり(五)
 ふねを捲く 水 雷 火(五)
 しばらくは うみ鳴りわたり(五)
 うみ鳴りて 山こたへつ(五)
 旗にてしめす 信 號 にか(五)
 水おどろかし とゝろかす(五)
 わさも立ちたり 吶喊(五) のこゑ(五)
 あひづの旗に かちをめぐらし(五)
 突撃を、さらば かけん、さらば(五)
 えめされしあひづ こゝろえたり(六)
 進 軍 の らつば鳴る(五)

ときのこゑ わきおこる(五)
 突 貫 に―― よしおくれじな(五)
 はせめぐり をめき叫びて(五)
 つきすゝみけり まつしぐら(五)
 一 齊 射 撃 あやまたず(五)
 偵 察 任 務 身に引きうけて(五)
 やりひきしどき をどりかゝりて(五)
 おどくもとりに されしからは(六)
 捕虜のかすく うつや手繩(六)
 あやしやと 見てとりて(五)
 一 も ん じ きり入りて(五)
 つきすゝむ たゞ一もんじ(五)
 つきいりて おもてもふらす(五)

きりくづしけり またゝくま(五)
 魚 鱗 の 陣 と 立てなほし(五)
 はだめくかみの あれまはるか(五)
 只はだめきの おとばかりして(五)
 なるかみはだめく ととくにして(六)
 ふるひつうどきつ 地軸折れん(六)
 はねの山きづき 血の川堰(六)
 いかづちも かくま(五)
 すなけふり さかま(五)
 くさまくら 野營のゆめ(五)
 ゆめまばし くさをしきね(五)
 野營の月の 血いろなる(五)
 月の血いろも よそならぬ(五)

よそごとならず 只おもはれて(五)
 たゞひとすぢに 君のためとて(五)
 ひとすぢみちゆく ますらたけを(六)
 くにのためすつる いのちなれば(六)
 ますらをの 武者ふりや(五)
 風 に の り はしり行く(五)
 ほばしらに ひらめくはた(五)
 水 を う つ 櫂の調子の(五)
 マストにいのち さゝげたり(五)
 浪をけたてゝ はしらす(五)
 砲門ばつと みなぎるけふり(五)
 いかりのつなの よし切るゝとも(五)
 立ちて甲板の 長 風 裡(六)

ボオトをわろして 矢聲をかけて(七)
 矢を射るよ ボオト飛ぶ(五)
 しのびつゝ くらまぎれ(五)
 風 つ た ふ こまのいなよき(七)
 れんたいき かげのひらめく(五)
 わきかへるなみ のりきりて(七)
 ひづめいはかど ふみならし(五)
 あをうなばらに 羽のすとのり(七)
 ふみやぶれかし くらがねのかべ(七)
 道のためえみし 醜をうた(八)
 みちにそむきたる つみあるもの(八)
 ゑんそくに いでぞ立つ(五)
 夜 ふ た 夜 九りのみち(五)

いで立たん ふたよどまりに(五)
 時 も よ し もみぢがりせん(五)
 しばしなれども 旅にし(七)
 たびのころもを はじめてぞ(七)
 足にはわらぢ かたには行李(七)
 ふみにて見しを まのあたり見ん(七)
 まなびのまどなる 友と共(八)
 いまこそいでたて 旅のそらに(八)
 玄ばしとて かりそめの(五)
 かりそめのの たびねとて(五)
 玄ばらくの たびねながらも(七)
 ことづてよ ふるさと人に(五)
 ゆくさきくに 見るもの(七)

をるそで句ふ きらぎくの(五)
 玄もをふそれす 咲きもにはひて(七)
 うつろはで咲く しらぎくの花(七)
 そのふの玄らぎく いまをさかり(八)
 こゝのへのおくに にほふ菊の(八)
 よろづよも かはりなき(五)
 かはりなく 香に句ふ(五)
 そでさへにはふ 花のいろの(五)
 玄らぎくの さかりひさしき(五)
 かざりとなせる つゆの玉(五)
 さくのはつ花 をりとりて(五)
 これ 延年の ことはぎにとよ(七)
 よはひをのぶる ちぎり久しく(七)

きくの御宴とて 名にきこえしが(八)
 ひなぎくのわかき いろもあやに(八)
 いとへばきを綿 きせかけつゝ(八)
 まめぎくの をさなげに(五)
 聞 知 らぬ 黄菊さく(五)
 小ぎくさく ひがしのまがき(五)
 ころなれや あきの野ぎくの(七)
 くみかはせかし さくの酒(七)
 のこんの菊に つゆつらき(七)
 霜そめあけて もみぢばあかし(七)
 かへでのもみぢ 霜にいろそひ(七)
 もみぢのにしきを 山 は 帳(八)
 はじうるしひとつ いろになりて(八)

は、そ葉の もみぢにも(五)
 つゆしぐれ そめなして(五)
 つゆしぐれ やしほにそめて(五)
 ひとしほの いろをそへけり(五)
 いろをくはへて ゆふ日かげ(五)
 めぐみ思へば つゆしもの(五)
 そめくくくて 山をつゝみて(五)
 ゆふ日さすかた こがねを見せて(五)
 てりはえてゆふ日 かげも見えず(六)
 てりそへるゆふ日 いろを貸せり(六)
 やまひめの おりなせし(五)
 やまひめの にしきか(五)
 はつもみぢ はづかしげなる(五)

まぐれへて 色をくはへつ(五)
 うらあかき は、そはら(五)
 は、そのもりに さすかげの(五)
 た、散るまでの いろとも見えず(五)
 うすぞめこぞめ ひとしほやしほ(五)
 うすくくもみぢ そめわけわけ(六)
 そめわけそめかへ 色をあまた(六)
 しぐれをや おやと見ん(五)
 いかなれば まぐれ染む(五)
 たてぬきに いろをかへつ(五)
 からにしきを 秋おりいだし(五)
 からのにしきを あめつゆに(五)
 山のはまでも そめあげて(五)

つゆごとあめごと 色をそへて(六)
 ぬれいろまされり あめに照りて(六)
 いろそふと いふ間なく(五)
 かせふけば もろくちる(五)
 はじめみぢ 風にかつちる(五)
 おくまもに またそめられて(五)
 かせのまゝ ちらすぞをしき(五)
 いと、いろこく なりまさる(五)
 ゆくみちのべの ちりもみぢ(五)
 そのちりぎはの めでたきもみぢ(五)
 ちりて散りばえ あるかもみぢの(五)
 くれなるのいろに もみぢそふて(六)
 からくれなるなる やまのもみぢ(六)

ひとり占む あきのいろ(五)
 た、もみぢ 秋占めて(五)
 秋をかざれる もみぢばの(五)
 あきのにしきを おりなして(五)
 なる こ 繩 風にゆれ(五)
 ひくいとを たのみにて(五)
 かせなくば なりもえやらぬ(五)
 ひたのなるこに むらすゝめ(五)
 只いかめしき とりおどし(五)
 か、しの人の たゝすめば(五)
 身のつとめとて 鳥をおふなり(五)
 かたちばかりに たましひのなき(五)
 うちさわぐすゝめ おのがはかせ(六)

おのが心がら さわぐすいめが

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
 〔語〕 歳・う・み・冬・千・氷・霜・こ・冬・か・ま・落・ち
 づ・ぞ・の・ が・こ・れ・ぐ・ち
 〔句〕 暮・み・れ・月・鳥・ ち・だ・野・れ・葉・
 火・ し・ち・

(五)

やまかげに
 ちりはてゝ
 ちりしきて
 とびちりて
 ちりて行く
 すさまじく
 しぐれかと
 ふみわけて
 やまぎとの
 しかのこゑ
 しぐれには
 ゆふかせに

(七)

やましたいほの
 もろくちりゆく
 枝やせはてて
 さむき月もる
 月かげのこる
 風をもそめて
 しぐれまじりに
 雨ふりそへて
 ふみゆく道に
 みだれちりしく
 拂ひもあへず
 あへずちり行く

みちもなし
 ふきうづむ
 ふりそめて
 つゆしもの
 雲あしの
 まどを打つ
 ふるさとの
 むらしぐれ
 ひとしぐれ
 おくまもに
 かれ野はら
 かせさむし
 うらがれて

あらし吹くなり
 きほひてちれる
 時雨ふるらし
 えぐるゝまゝに
 日かげさみしき
 よはのしぐれの
 心きえ入る
 えぐれ過ぎゆく
 いたやの時雨
 霜にかれたる
 かれ野の末の
 おなじいろにぞ
 雁かりのなみだに

なつの日の
 しもがれて
 のこる葉も
 松のみぞ
 見えすきて
 えものいろ
 えもばしら
 えもとぢし
 えもがれの
 銀の針
 こほりつめ
 あつこほり
 つらゝあし

かはりはてたる
 千ぐさの花も
 瘦せたるこたち
 折れかゝりたる
 こがらしの聲
 あけがた白き
 うすこほりせり
 かけひの音も
 皆えもがれて
 えろかねの針
 こほりぬにけり
 のきのたるひの
 こほりそめたる

うはごほり
なく千鳥
はまちどり
むらちどり
いそちどり
ゆふちどり
夜をさむみ
あらいその
風あらみ
ともちどり
うらづたひ
なみのおと
かれあしの

むすはれつゝ
さよのちどりの
かよふ千鳥の
ちどり悲しき
うらちどりかな
こほるみぎはの
なきわたるなり
みちくる沙に
さしくる沙に
友よびつれて
夢ぢにかよふ
むれぬる千鳥
あしの葉そよぐ

うらかせに
むらあしの
やまのはの
そらさえて
さむげなる
まも夜には
にひづきの
はらくと
板びさし
うづみ火の
きえゆけど
さよふけて
かきおこす

あしのゆふ風
あらし吹くなり
こはれる月の
ゆきのいろにも
さながらこほる
利鎌とがに似たる
影のさむけき
みぞれふる夜の
たばしるあられ
そた折りくべて
炭さしそへて
としのくれかな
ゆくとしなみの

つかのまに
いとほやき
はかなも
ゆめのまに
としの市
あたらしき
としの物
なごりとして
せはしさに
つごもりの
あすをしも
いそぎゆく
老いのなみ

すぎ行くこまの
こまのあしなみ
はやくも過ぐる
いつしか過ぎて
むろざきの梅
つもればつもる
はかなく暮るゝ
くやしきものは
年もわが身も
大つごもりの
あすをたのしむ
百八の鐘
年のくれぬる

心のみ
よもすがら

〔應用〕
やまかげに おち葉して(五)
葉はあめと ふる 山(五)
雨と ふる やましたいほ(五)
やまのいほ おち葉にうもれ(五)
もろくも風に ちりはて(五)
もろくちるなり 木々の葉の(五)
ちりしくおち葉 にはの見えず(五)
やせたる枝に 月さみしげに(五)
風にまかせつゝ ちりてゆけば(五)
月のみさみしく えだにとまり(五)

ちりて行く おち葉、いざ(五)
 月のこる かれえだに(五)
 風も黄に そまるべきかな(五)
 玄ぐれすと あやまたれつゝ(五)
 玄ぐれまじりに 吹きちりて(五)
 ふみわけて鳴く しかのこゑ(五)
 雨ふりそへて いとゞ淋しく(五)
 かたやま里の ふゆの夕ぐれ(五)
 ふみゆく道さへ うもれはてゝ(六)
 あはれにつたはる 玄かのこゑを(六)
 ふりつみて はらひかね(五)
 ゆふかせに はらくと(五)
 かたもなく あへずなりゆく(五)

みちもなく 足もまよひて(五)
 あらし吹くなり みねのまつ(五)
 ふきうつみたる みちのべの(五)
 きほひて散るよ いそぎて散るよ(五)
 こゑもろともに けふふりそめて(五)
 玄ぐれもふるらし 鳥のさわぐ(六)
 玄ぐるまにく さすがの寒さ(六)
 くもあしも 立ちまよふ(五)
 さす日かげ さみしくて(五)
 まどをうつ 玄ぐれにさめて(五)
 ふるさとを 玄のびいでつゝ(五)
 心きえいる ばかりなる(五)
 玄ぐれすぎ行く やまざとの(五)

ひとしぐれして いたやの軒に(五)
 あへなく霜に かれたる野はら(五)
 かれ野の末なる そらのあかね(六)
 かせいとさむけく 野末あかく(六)
 うらがれて おなじいろ(五)
 なつの日の おもかげも(五)
 そめたるは 雁ツルのなみだか(五)
 なつの日の おもひだされて(五)
 千ぐさの花の あと問へば(五)
 数ふるばかり のこる葉の(五)
 やせたるこだち 霜に曝れつゝ(五)
 まつのみあをく みさをよまもる(五)
 をれかゝる松に 玄もやつらき(六)

はやしのはてまで 見えてすきて(六)
 こがらしの 聲を 君(五)
 こがらしを 何と聞く(五)
 玄ものいろ いとゞ冴えつゝ(五)
 玄もばしら 銀針ぎんぎんを植ゑ(五)
 山のしたみち しもとちて(五)
 かけひの水の おとよわく(五)
 ながれもやらず こほりぬにけり(五)
 あつこほりせる かげの池水(五)
 いけはあつこほり すでに閉ぢて(六)
 軒ばなるたるひ のびにのびて(六)
 つらゝぬし いけのおもに(五)
 いけのおも こほりそめ(五)

庭のいけうは氷せり(五)
 こほりはやむすほれつ(五)
 さよのちどりのなくこゑに(七)
 こゑあはれなりはまちどり(五七)
 かよふちどりのこゑのかなし(七)
 なみもろともにむら千鳥たつ(七)
 いそべのちどりのともを呼びて(八)
 うらちどりなきて風はさむ(八)
 ゆふちどりなみまより(五)
 こほりゆくみぎはにて(五)
 夜をさむみちどりなく(五)
 なきつれてわたるちどりの(五)
 ちどりなくなるあらいのそ(七)

みちるしほになくちどり(七)
 かせいとあらみおきのちどりの(七)
 こたへあはせてなく友千鳥(七)
 ちどりのこゑ聞きうらづたひに(八)
 ゆめぢにかよへるちどりのこゑ(八)
 なみのおとこゑを呑む(五)
 かれあしにかせうごく(五)
 あしのかげむれゐるちどり(五)
 あしの葉にゆふかせうごく(五)
 ちどりなくなるうら風(七)
 あしのゆふかせおと遠く(七)
 むらあしのまになくちどり(七)
 あらしふくなりいそやまつに(七)

やまのはにちかくいでし月の(八)
 こほれるつきかげ銀のごとし(八)
 そらさえて風さむく(五)
 ゆきのいろさながらの(五)
 さむげなる月のみさえて(五)
 つきかげはさながらこほる(五)
 ふすまも冷えてしもよには(七)
 とがまに似たるにひづきの(七)
 さもさむげなるにひづきのかげ(七)
 かたわれづきのかげのさむけ(七)
 あられかみぞれか只はらく(八)
 みぞれふるよはのものおもひ(八)
 いたびさしさをのゆめ(五)

夜はさむくゆめ成らず(五)
 たばしれるあられのおとも(五)
 うづみ火をかきおこし(五)
 そだをりくべてしばらく(七)
 いつしか火さへきえゆけば(七)
 炭さしそへてかたりあかして(七)
 さよふけゆけば身にしむさ(七)
 としのくれわれも人とよも(八)
 うづみ火に似たるあはれわが身(八)
 つかのまにすぎゆきて(五)
 ゆめのまにとしたちて(五)
 すぎてゆくこまのあしなみ(五)
 いとはやきつき日のながれ(五)

いつしか過ぎて はかなくも(五)
 はやくも過ぎて 今(五)はしも(五)
 いつしか過ぎて としの市立つ(五)
 むろざきのうめ ときしりがほに(五)
 あたらしきとしを やがてむかへ(五)
 つもればつもれる かしらのゆき(五)
 としのももの とよのへて(五)
 はかなくも 年(五)はく(五)れ(五)
 なぞりとて ことしもけふを(五)
 こしかたの 只くやしくて(五)
 只せはしさに 日をもわすれて(五)
 としもわが身も おい(五)ま(五)さ(五)り(五)つ(五)
 つどもりの か(五)ね(五)の(五)音(五)

百八の 除夜のかね(五)
 かしつまり 大つどもりの(五)
 あすを 只(五)たのしみ(五)にして(五)
 老いとさるき としのくれ(五)
 こんとしのたい またれつ(五)
 よもすがら人と かた(五)りあ(五)か(五)す(五)
 けふといふけふと 今(五)は(五)爲(五)り(五)て(五)

韻文新體詩の

作りかた

今まだ世の一般は韻文新體詩の
 つくり方はおろか、その本たる
 ダイフ即ち形ち、すなはち格と
 いふものについてもほとんど無
 規律である。折角つくつても、
 それゆゑ、口に聲してうたふべ
 きものともならず、さりとして散
 文と比較しては舌足らずのやう
 に見えるものと爲る。もとより
 委曲のところはわれ／＼とて、

まだ、十分口はゞ廣く云ひ得る
 までに研究を遂げて居ぬが、と
 にかく差しあたり極はめて手近
 いところ、すなはち初學たる人
 のあらかじめ心得て置くべき事
 について、すこしばかり説いて
 見る。

此書を出版した書肆嵩山堂か
 ら嘗て出版した自分の著「美文
 活法」の中にちよつと韻文のつ
 くり方が説いてあつた。まかし、
 それではまだ盡くせぬ所も有り、
 あらためてこゝに大要の心得を

出来るだけ簡畧に之るして見る、

○ いろ／＼に語句を
はたらかせること

いろ／＼に語句をはたらかせる事が巧みにならなければ、殊に韻文で自由自在に物事を述べることはできぬ。散文とちがって韻文には語數、云ひかへれば、音數の制限がいろ／＼有る、また必ずすやかましく云はなければならぬほど有る。散文とちがって、韻文は音律の支配の下に在る、音律の制裁はすなはち音

數の制裁となる、すなはち制限規則といふものが有ると見なければならぬ

いろ／＼に語句をはたらかせるとはつまり同一の意味をいろ／＼に云ひまはすと云ふことで、いろ／＼に云ひまはして始めてその所へあたり前ならば箆はまるぬものも箆まるやうになる。それが巧みに自由に、おのづからのやうに、即ち不自然的でないやうに行けば、その語句はいかにも無理の無い、巧妙なもの

なる。例すれば後鳥羽院の御うた、「人もをし、人もうらめしおぢきなく世をおもふ故にもと思ふ身は」とあるやうな、是は和歌であるがやはりその例の一とも見るべきもので、なか／＼込み入った感情を只その云ひまはしの巧者一つでわづか三十一文字のみじかく小さい坪數の中に、さして窮屈でもなく、綽々たる餘裕が有ると云ふばかりに巧みによく述べ盡くしてある。和歌も、一切の意味についての韻文の、

一つである。他の、即ちわれわれが今後の時代に發達させやうと思ふ新體詩もまた同じ例とし、同じ理法によるべきものと見なければならぬ。散文とちがって韻文には、前云ふとほり、とにかくまづ第一に語數の制限が有る、その中で奔放自由な思想の發揮を遂げやうとするには是非とも云ひまはしの巧者になるべきを要する、和歌者流は和歌には餘情の有るのを美とすると説いた。餘情は何か。含蓄である。

その含蓄は何か。云ひまはしの巧者によつてゐる。

まからば如何にして云ひまはしを巧者ならしめるかと云ふに、素より云ふまでもなく習練只一つであるが、その習練も無目的無手段ではやはり甲斐が無い。まかるべく方針を立て、まがて習練を経るそれが實に何よりで、その、まかるべき方針を立て、まの習練といふのは即ち云ひまはしの巧者になるやうにとの習練である。この書にまづ語句の簡単なもの

を擧げ、ついで應用の部をまうけてゐる／＼にそれを云ひまはす所を示したのは此韻文上達の何よりの骨法を只明白にあらはし、その秘密を秘密でないやうにするためである。くれ／＼も、韻文に桂冠の榮を得やうとされる人には此云ひまはしの巧者と云ふ、實にちよつと聞けば、何でもないやうな事を決して何でもないと見ず、十分神聖に見て、全幅の精神をこの一點に集注されるべきである。

○句格總論

和歌には既に總音數三十一もしくは三十二、總句數五、かういふ一定の典型が有り、發句にもまた總音數およそ十七、總句數およそ三、かういふ定めが有る。いはゆる韻文の新體詩はどうかと云ふ、にまだ一定の典型は十分出來て居るとは云へぬ。七五調のもの有り、五六調のものあり、七七調のもの有り、七五調のものあり、數へ立てればすこぶる多い。まからば、それは不規律とでも云

ふべき事か。不規律といふ語を惡、劣などの意をふくむものとして、そして扱さう不規律であるとは流石云へぬが、とにかくまだ何人によつても明白に方針を示されなかつたのは事實で、それだけ學者の少數を除くのはかの一般は猶まだ音數をいかやうにするものか、句數をいかやうにするものか、ほとんど分からぬ位になつて居るのみで、只、それゆゑ、やむを得ず、まづは「七五の四句」たる今様をのみ土

臺にするやうにして居るばかり、そのうへ思ふさま奔放自在な句格を用ゐるまでに至らぬ。すくなく見つもつても、此事實が韻文の發達をことのほか遅々たらしめる第一の原因である。

○句格の四種類

こゝでは成るべく學理一方の講釋にかたむかぬやうに云ふ氣ではあるが、それでも兎角して學理にからんだ、無味な説明にかたむきたがる處も有る。そこらの斟酌は然るべく此書の讀者の

根氣づよい玩味研究にどこまでも任せなければならぬ事としてさてわれ／＼はこゝに日本韻文の句格として下に述べるす四種のものを其最も重要なもの、むしろ云はゞ原始のものと便宜みとめたが宜しからうと考へるすなはち、五、六、七、八、の四種。

○五、六、七、八、の四種の句の説明

五は口頭によつて發する音の數が五つであるもの。すなはち、

くうやねんぶつ

八はおなじく、八つであるもの。

はうるくてうれん

にじふるくやまぢ

以上例として示した丈で、なほこれに付いては多く云ふべき所が有る。

○二、三、の五言

はじめが二音、つぎが三音、その二つで一句となるものをわれわれは二、三の五言といふ。

前例にも見えたゆふあらしといふ語についてこれを云ふなら

みなみかせ さくらばな
ゆふまぐれ さよあらし
六は、おなじく、六つであるもの。すなはち、

ゆみはりづき

いそやまゝつ

つくばおろし

よしのしづか

七は、おなじく、七つであるもの。

からおりにしき

かぎをりえぼし

おきつしまもり

ば、ゆ・ふ・あらしはゆ・ふといふ一
 名詞とあらしといふ一名詞と相
 合つて去かるのち出来た語で、
 その前のつゝりのゆ・ふは二音、
 その後のつゝりのあらしは三音、
 すなはち便宜名づけて二・三の五
 音といふものである。

この例で推して云へばあ・さ・ざ
 くら、つばすみれ、やまおろし
 など此二・三の五音で、このたぐ
 ひの語は數へ切れぬほどなほ澤
 山有る。

○三・二の五言

これははじめが三音、つぎが二
 音のもので、すなはち前例に見
 えたさくらばな杯である。

○三・三の六言

これは初めが三音、つぎも三音
 のもので、すなはち前例に見え
 た、つくばおろし、よしのしづ
 か杯がそれである。

○二・四の六言

○四・二の六言

○二・二・二の六言

此三つは韻文に用ゐたうへ、そ
 の音律におよぼす結果はほとん

であるのは明白である。

さらに細かく解剖して見たら

ばどうか。

い・そは二音、や・まも二音、ま

つも二音であると見る外になほ

數をそれと違つて數へて、そし

てそれも決して無理でない事實

もあらはれるのである。

すなはちい・そ・や・ま・ま・つ・はい・そ、

や・ま、ま・つと分解し得るほか、

な・はい・そ・や・ま、ま・つ、即ち四・二、

又はい・そ、や・ま・ま・つ、即ち二・四、

斯うも分解し得る。

と皆同一で、さして事々しく區
 別するにも及ばぬやうではある
 が、なほそれをさう區別するだ
 けの智識を備へて居るといふ一
 事が實に韻文作者に取つて必須
 の條件とすべきものである所か
 ら、やはり兎もかく各個別々のも
 のとたしかに見て考へなければ
 ならぬ。

前に引いたい・そ・や・ま・ま・つにつ
 いて例して見る。その語はい・そ、
 や・ま、ま・つの三名詞から成る。
 その點から云へば二・二・二の六言

いそやまといふ一個獨立の名詞は日本語の一として正當に存在するものと認められる。またやままつもさうである、まからば、いそやままつは右二言語を合併したものであるが、まかしいそやまのやま松と、あたり前ならばくどく云ふべきを、同數相扣除減殺するとの數學の定論とおなじ理によつてやまの重複になるのを避けて、言語上の扣除減殺が試みられ、すなはちどちらか一方のやまが略されて、

つひにいそやままつとなつたと云ふのがそもくその語即ちいそやままつの産出もしくば發達の順序である。

さて何ゆゑ二四の四二のと同じやうな音數のものを二種類にまで區別するかと云ふに、音調の場合ひによつては是非ともその區別を知つて居なければならぬ事が有るゆゑである。こゝで一々ちがった樂譜の音階を見せるまでも及ばぬが、とにかくいそやままつと二四にしなけ

ふつ杯がそれである。

○四三の七言

これは初めが四音、つぎは三音のもので、すなはち前例に見えたからかりにしき、かざをりえばし杯がそれである。

○二五の七言

これは初めが二言、つぎが五言でそれで一句となるもので、下にしるすやうなのである。

はな わらふとき
ゆめ さむるまも
わが そでながら

れば、その前後の他の句と音律の調和ができぬ場合ひも有り、また或ひはいそやままつと四二にしなければ、やはりその調和のできぬ場合ひも有る、それらの場合ひのためには、即ちそれらの區別だけの智識をかならず持つて居なければならぬのである。

○三四の七言

これは初めが三音、つぎは四音のもので、すなはち前例に見えたおきつしまもり、くうやねん

やよ ほとたる、こよ

○五二の七言

これは初めが五言、つぎが二音でそれで一句となるもので、下にしるすやうなのである。

ゆふしぐれ ふる

あきかせに ちる

とはやまを 見て

おもひでよ また

右例に示したものについて些し云ふところが有る。こゝろみに一目して瞭然たるやうに前の

はなわらふときから後おもひいでよまたに至るまでのものを音数によつてあらはせば、正に下のやうになる。

はなわらふとき……………二三、三

ゆめさむるまも……………二、三、二、一

わがそでながら……………二、三、三

やよほとたるこよ……………二、三、二

ゆふしぐれふる……………二、三、二

あきかせにちる……………二、二、二、二

とはやまを見て……………二、二、二、二

おもひでよまた……………三、二、二

右挙げた例は、そのもとは二

五、および五二で、互ひに全たぐ違つた組み立てがあるにも拘はらず、その組み立てのまた前の組み立てにはぐして見れば、わづかの相違の見えるほか、さして際立つたところもなくなつて来る。もとよりこゝに示したのはわづかに四五の例に過ぎぬが、如何なる他の七言を二五又は五二體に組み立てて見ても、これとおなじやうな、つまり二五、五二共にはなはだしい相違の無いものになつてしまふ。そ

の譯は日本語にもとく二、もしくは三の單音の語がきはめて多く、それが元となつて他のいろくの語を互ひに相抱合してこしらへ出すに至つたからで、こゝでは只それだけを云へばよろしいのである。それゆゑ二五の七言と五二の七言とは其双方の五が双方相おなじな組み立てでありさへすれば、正に同一の律にあてはまるものとして用ゐて大抵はなはだしい差しつかへはなく、すなはち韻文作者に取つ

ては殆んど望外な利便の有るものと云つてよろしい。

○四四の八言

これは初め、つぎ、共に四音づつで、それで一句を成すもので、下にゑるすやうなのである。

「ゆふぐれ さみしく」

「そのふの はるかぜ」

「すみぞめ ころもの」

「かりがね きこゆる」

○三五の八言

これは初めが三音、つぎが五音で一句を成すもので、下にしる

すやうなのである。

「あらし 吹くときは」

「君 に ことづてん」

「いでや ふるさとの」

「ねむる はなのかは」

○五三の八言

「ものすこき ゆふべ」

「こゑあぐる ひばり」

「ひる瀬なき なみだ」

「われもまた きみを」

一首としての句格の一二

和歌ならば五七五七七をもつて一首としての句格とし漢詩の五絶句ならば五五五五をもつて一首としての句格とする、それらとかなじく、また新體詩にも一首としての句格の幾種かを大かた定めて置かれるのが初學に取つての便利である。こゝにその一二を示すのは其心をもつてたよりにもと思ふためである。まかし、つぎにゑるすとはり四

句のものを例として見せたものの、それは作者の便宜上三句にして二句にしても乃至また五句以上として宜しいのである。只一つの句格ではじまつたならば、特別の場合ひでない以上、かなじ句格で一首、もしくは一篇をおしとはして形ちづくるやうにするとの事を成るべく大切な注意として心得て置かなければならぬ。

其 一 五の四句

五の四句とは五言をもつて一句

とする、その一句が四脚有ッて、それを一首(もしくは)とすもの、稱へである。

「巢を戀ひて……………(五)

鳥は飛ぶ……………(五)

君戀ひて……………(五)

われは行く……………(五)

また

「あめ晴れて……………(五)

やまあをし……………(五)

ゆふ日かけ……………(五)

水に入る……………(五)

ちればゆめか……………(六)

其三 七の四句

七の四句とは七言をもッて一句とする、その一句が四脚有ッて、それを一首(もしくは)とすもの、稱へである。

「雪は降る……………(七)

さよは更けゆく……………(七)

かへるわがつま……………(七)

いかに寒けき……………(七)

また

「ゆめになりとも……………(七)

其二 六の四句

六の四句とは六言をもッて一句とする、その一句が四脚有ッて、それを一首(もしくは)とすもの、稱へである。

「はなのかげに……………(六)

ゆめはさめて……………(六)

蝶は消えぬ……………(六)

ゆめか、てふか……………(六)

また

「はなのゆめは……………(六)

かくもあだか……………(六)

さける花も……………(六)

逢は、かもはし……………(七)

あは、おもふか……………(七)

むしろ死なばや……………(七)

其四 八の四句

八の四句とは八言をもッて一句とする、その一句が四脚有ッて、それを一首(もしくは)とすもの、稱へである。

「つがひはなれたる……………(八)

あはれをしどりを……………(八)

やもめ見ては泣く……………(八)

やもめ見ては笑む……………(八)

つゞき

「われも亦と泣く……(八)

友も有りと思む……(八)

泣きて思みて泣き……(八)

思みて泣きて思む……(八)

其五 五七の二句

五七の二句とは初め五言、そのつぎ七言、此二言の連続したのを一句とする、その一句が二脚有つてそれを一首(もしくは曲)とするものゝ稱へである。

「そらに何……(五)

戀ひしきつまの……(七)

待ちぬるか……(五)

矢と飛ぶひばり……(七)

其六 五七の四句

五七の四句とは五七の二句の二つ連続したものゝ稱へである。

「みき見れば……(五)

やさしきはなの……(七)

咲くとしも……(五)

おもはれぬ藤……(七)

おもひえる……(五)

かくまでの花……(七)

其八 七五の四句

これはいはゆる今やうで、例すれば唱歌「はるのやよひ」などがそれである。

其九 八六の二句

八六の二句とは初め八言、そのつぎ六言、此二言の連続したものを一句とする、その一句が二脚有つて、それを一首(もしくは曲)とするものゝ稱へである。

「ひととせの……(八)

おもひいかに……(八)

あなをけふいづる……(八)

咲かせんと……(五)

かくはねじけし……(七)

其七 七五の二句

七五の二句とは初め七言、そのつぎ五言、此二言の連続したものを一句とする、その一句が二脚有つて、それを一首(もしくは曲)とするものゝ稱へである。

「べにのはな見て……(七)

老女泣く……(五)

はなは變はらず……(七)

べにとなる……(五)

へびのおもひ……(六)

ついき

ねふりよりさめて……(八)

おもふまゝに……(六)

たくはへしちから……(八)

やがてふるふ……(六)

ついき

たくはへしちから……(八)

やゝいまより……(六)

ふるはんとすなる……(八)

おもひいかに……(六)

ついき

ねふりしは暴れん……(八)

ためとばかり……(六)

昏睡に年を……(八)

あゝ經し蛇……(六)

以上例として説明したので大かたの句格の模様はそのおもふきを盡くし得たらしいとも思はれる。それゆゑ、なほ八六の四句、九の二句などその他一二の格例は残つても居るが、それらは大抵讀者の一目して理解し得る事と考へ、省略することにし、その代はり、凡そ是からわれわ

れが用ゐて便利な句格を表にして引きくるめて下のやうに擧げて置く。一句の中の五ならば五を二三又は三二などに分けて見せたのは寧ろ煩らはいいかも知れぬが、つとめて要を知得する事の便利を思つた故である。

句格表

○五の四句

五 五

五 五

五 五

二三二三 二三二三 二三二三 二三二三

二三二三 二三二三 二三二三 二三二三

二三二三 二三二三 二三二三 二三二三

二三二三 二三二三 二三二三 二三二三

(丁)(丙)(乙)(甲)

○六の四句

六 六

六 六

六 六

三三三三 三三三三 三三三三 三三三三

三三三三 三三三三 三三三三 三三三三

三三三三 三三三三 三三三三 三三三三

(甲)(乙)(丙)

○七の四句

七 七

七 七

七 七

四三三四 四三三四 四三三四 四三三四

四三三四 四三三四 四三三四 四三三四

四三三四 四三三四 四三三四 四三三四

(甲)(乙)(丙)(丁)

○八の四句

八 八

八 八

八 八

三三三四 三三三四 三三三四 三三三四

三三三四 三三三四 三三三四 三三三四

三三三四 三三三四 三三三四 三三三四

(甲)(乙)(丙)(丁)

六六六五五五四四四三三三二二二	八	八	○ 前の七六の二句をそのまま二つ つながらせたもの。
二二三三三四四四五五六六	八	即ち	
四三二四三二四三二四三二四三二	六	六	
二三四二三四二三四二三四二三四	六	六	
六六六五五五四四四三三三二二二	八	八	○ 前の八六の二句をそのまま倒さ つながらせたもの。
二二三三三四四四五五六六	八	即ち	
四三二四三二四三二四三二四三二	六	六	
二三四二三四二三四二三四二三四	六	六	
(土)(金)(木)(水)(火)(癸)(壬)(辛)(庚)(己)(戊)(丁)(丙)(乙)(甲)			

三二四三二四三二	六	六	○ 前八六の四句 つながらせたもの。
三四二三四	六	即ち	
四四三三三二二二	八	八	
四四五五六六	八	八	
三二四三二四三二	六	六	○ 前七五の四句 つながらせたもの。
三四二三四	六	即ち	
四四三三三二二二	八	八	
四四五五六六	八	八	
(辛)(庚)(己)(戊)(丁)(丙)(乙)(甲)			

こみ入るゆゑ、とにかく一々表にして列べて置く。

七	○ 五七の二句	五	○ 五七の二句	五	○ 五七の二句	八
七	○ 七五の二句	七	○ 七五の二句	七	○ 七五の二句	八
即ち		即ち		即ち		
七		七		七		八
七		七		七		八
五		五		五		八
五		五		五		八
(乙)(甲)		(乙)(甲)		(乙)(甲)		(丁)(丙)(乙)(甲)

前の五七の二句をそのまま二つ
つながらせたもの。

七	○ 七六の二句	七	○ 七六の二句	七	○ 七六の二句	七
七	○ 七六の二句	七	○ 七六の二句	七	○ 七六の二句	七
即ち		即ち		即ち		
七		七		七		七
七		七		七		七
六		六		六		五
六		六		六		五
(己)(戊)(丁)(丙)(乙)(甲)		(己)(戊)(丁)(丙)(乙)(甲)		(己)(戊)(丁)(丙)(乙)(甲)		(乙)(甲)

前の七五の二句をそのまま二つ
つながらせたもの。

語を述べた丈で韻文の一脚即ち一句をつぶしつひやす。そこへ至ると、九音だけの長いものが極はめて有利となる。九音の利を説くに、多く辯をつひやすまでもなし、要は右云ふだけで盡きる。作例に九音のがいろく有るのも此故である。

○九の四句

其一 二七の九

二七 二七 二七 二七(甲)

其二 三六の九

するやうなのを避けるやうに心を付けるべきである。これについて吾々は一つ自分の失策談をするのが却って近路と考へる

われくが明治二十年からまだ一二年前に作った韻文に、今日「敵は幾萬」と題して世にわたはって居るのが有る。その今つたはって居るのは三曲であるが、もとはそれより曲数が多かった。玄かるに、其傳はらなくさせられた曲の中に斯ういふのが有った。曰く、――

三六 三六 三六

其三 四五の九

四五 四五 四五

其四 五四の九

五四 五四 五四

其五 六三の九

六三 六三 六三

其六 七二の九

七二 七二 七二

○用語の音調についての注意

韻文に用ゐる語の音調については其成るべく他の語と意味の混

「ゆきを 孕める あさ風に

ひかッて 嘶く うまの 聲。

こいゆる 手先 取りしめて

吹きぞ 合はする 喇叭の音

これらの響き 聞く ときは

鈍き 心も また いさむ……

下 略

自分で評するでもないが、右の曲、雪や馬などを出したのは戦場の景物としてわるくもない。さりながら作者その人をして、それにも拘はらず、その曲全體を捨てなければ爲らぬ迄に決心

するに至らしめた事が、はし無くも、有ったのである。
すなはち第五句に「これらのひいき」とある、その「これら」といふ一語、實にその語が痼疾の元たる毒液であつた。

此韻文全體の調子として（學術的の名目を用ゐずに云へば）、毎句そのはじめが上聲、すなはちアガル音で始まつて居たので、それ故毎句のはじめは殊にその資格有る音、即ちアガッテ差し支へ無い音のものでなければ爲

まり得ぬものと云はなければならぬ。

それも、まかし、便宜上強ひて用ゐて、これらの本來は第三上の音なのにも拘はらず、無理に第一上即ちアガッテしめて用ゐてもし我慢のなるものならば、なるほどさうしても宜しい。われ／＼はそれを如何にと試験したが、やはり無望。
これらのことを強ひてアガッしめて見ると、意外にも、さて駭くべくも、それをさうアガッし

らぬのである。何ぞ知らん、「これら」では其目的にかなはぬ。

これら即ち是等の今日のもつとも普通の音調はこれらのらがアガル音になる。即ちわれ／＼が日本大辭書をつくる時第三上として定めた音調それである。その語はこれらの第三音のらが先天的にアガルべき音なのに、その用ゐられるべき處は前云ふ如く第一音のこがアガッべき箇所なのである。まからばこれらは逆もその韻文のその場所には

めた爲めに語の意味がまるで變化してしまふ。

すなはち、第三音が上聲の時のこれらならば是の複數、すなはちこれ／＼の意味があらはれるが、第一音のこが上聲になれば、まるで變はつた意味の語、すなはち虎列刺とかなじやうに聞こえて来る。虎列刺はそのはじめ虎があがる、すなはち第一音の上聲、すなはち第一上である。是等のこをあげるとなると、その耳にひいき聞こえる結果は

どうしても病名の虎列刺のほか何ものをも思はせなくなるのである。

さりながらその時われ／＼は代用の語をどうしても思ひ付けなかつた。つひにやむを得ず、只それ一つの原因で、全體の一曲こと／＼を全く譜を付けぬものとして葬つてしまつた。

韻文を作るとなると、このやうな事はたび／＼有る。曾てわれ／＼は「手に持つ」といふ言葉について大に困つたことが有る。

その時の句は「手に持つるぎぬきはなち」といふのであつた。

然るに其時の曲譜は前後の關係上是非とも第二音の^をアゲなければ爲らぬのであつた。さて^をアゲて見て困つたと云ふのは外でもなく、さうすると「手に持つ」がどうしても「手荷物」と聞こえるやうになる事であつた。「手荷物」といふ語が無いならば格別、すでに有つて、そしてその語は第二上すなはち荷^にの

のところであがるもと既にわづから定まつて居るところなのを、さて他に何とも手の下しやうは無い。すなはち斷然他の然るべき語に「手に持つ」を變へなければ爲らなくなつた。

以上はわれ／＼のまたくしく接觸した例で、われ／＼は此われわれの懷舊談がすくなくも韻文學者に一の参考となるのを疑はぬ。

特に重要な件の一としてそのいろ／＼の中から殊に此一條を

斯くの如くわれ／＼はこゝに述べたのである。

(作 例)

作例としてこゝに挙げたものは悉く著者の作で、まかもこゝには成るべく、その短かくて、且またいろ／＼の句體を成すものを併はせ示すやうにとの方針でそれ／＼二三を示した。作例は全くその名の如く例として見るべきもの、それからそのまゝ語句を取つて、さらに新曲をつくと云ふいはれも無く、かなら

すしも際限無く、澤山なのを要
することもない。

新年

その一、元日あけふの朝あさ

松に かど(五)

せまく なりても(七)

さて うれし(五)、

朝 おそく(五)、

里は ねふれど(七)

こゝち よし(五)。

おもしろや(五)、

やみも 光りと(七)

見ゆる かな(五)

あたらしき(五)

としの はじめの(七)

この こゝち(五)。

その二、懸ひけ鯛たう

今も山里にはかけだひと稱
へ、ほした魚を新年のもの
として飾るところが有る。

みやこは 知らぬ(七)

まづが のき(五)

懸けたる 鯛の(七)

名を おやに(五)

その 子は 問へり(七)

その四、筆はじめ

ふではじめ(五)

一の字 かゝん(七)

一の字 を(五)、

人の はじめと(七)

よむ 一を(五)、

もと なる かすと(七)

よむ 一を(五)、

はじめ わすれぬ(七)

こゝろにて(五)。

もとを 忘れぬ(七)

こゝろにて(五)。

やまがつ の(五)

夏は 小結の(七)

香も 知るを(五)。

その三、ざふに

かたち たゞしや(七)

ざふにもち(五)、

こゝろは直なき(七)

ふと箸の(五)

折れず、まがらす(七)

いざや われ(五)

ことしも 是よ(七)、

かくと 只(五)。

その五、同上

おそろしの(五)

こゝろならねど(七)

ふではじめ(五)、

あらたまる(五)

こゝろならねど(七)

ふではじめ(五)、

腕より ふでの(七)

わなゝくよ(五)、

人には 何を(七)

玄めすべき(五)、

こぞの 反古ほんこの(七)

まされるを(五)。

雪

巢の わらを(五)

簀すいに 着よ(五)、

さむげなる(五)

ゆきの 鳥(五)!

鳥は いふ(五)、

おぞましや(五)、

もとよりの(五)

衣きぬは 有り(五)。

雪は いふ(五)、

みのならば(五)、

つもりてん(五)。

はねは 否いな(五)。

玄くろはぐもり(五)、

いづれの 春に(七)

まねかれて(五)、

いそ菜は 早く(七)

おひぬらん(五)

霞

その あたり(五)

松 書きたしと(七)

おもはせて(五)

一ひとはけ うすき(七)

とほざとの(五)

かすみは 何の(七)

いざ いかに(五)、

人の 身は(五)

はだかにて(五)

死にも せじ(五)。

この こゝろ(五)

ともすれば(五)

忘れつゝ(五)

あゝ われも(五)。

磯菜

晴れても 降れる(七)

なみの 雪(五)、

かすみとも 見ん(七)

ふでを 待つ(五)。

袖に つゝみて(七)

いつ 山の(五)

ねふり さますよ(七)?

さよかせに(五)

水 ぬるむ(五)、

うを うごく(五)、

その 日こそ(五)、

その 日に ならば(七)

花の ふうじを(七)

解き去りてこそ(七)。

若草

身に たづね(五)、

こゝろに くらべ(七)

目に とへば(五)、

みなみの えだに(七)

一りんの(五)

笑みぞ なにをか(七)

こたへぬる(五)。

椿

つばき! つばき(六)!

あすは さく 咲く(七)

あす 咲く、と(五)

待たせ、待たせて(七)

のべの いろに(六)

はるは 見えて(六)、

みどり ゆかし(六)、

ゆかし、すべて(六)。

花は 咲かぬ(六)

くさも あれど(六)

實にも なる(六)

すべて 見えて(六)。

梅

うめの つばみの(七)

きのふ けふ(五)

かせの ぬくみを(七)

待たせてぞ(五)

わづかに 笑みを(七)

もらしてぞ(五)

あすは 咲く 咲く(七)

あすは 咲く(五)。

あすは いくかぞ(七)

さて いつぞ(五)、

つばき つばき(六)

待ちそめし 日は(七)

わすれけり(五)。

つばみ より(五)

あゝ つばき(五)

さく はせの(五)

とほきかな(五)。

柳

つゝみは ながし(七)

川 ながし(五)。

やなぎの いとは(七)

いと 長し(五)。

眉 やゝ ながし(七)。

日は 長し(五)。

ながめ行く 身の(七)

のびしかな(五)。

鶯

いぢらしや(五)

うぐひす(四)。

いと ねふき(五)

あけぼの(四)。

さめやらぬ(五)

うつゝに(四)

聞くなとて(五)

うたふか(四)。

まくらべの(五)

はなの香(四)。

窓 しろき(五)

ざんげつ(四)。

はけきやうの(五)

舞ふも 空(五)

立つも 空(五)。

舞ふ まへも(五)

空にして(五)。

立つ のちも(五)

空なれや(五)。

ありと 見し(五)

かげ さらば(五)

かげ 何ぞ(五)

そも 空か(五)。

空ならば(五)

きえも せじ(五)。

色 なくば(五)

色しき 即そく 是ぜ 是(五)
空くう 空くう (四)。

濟度さいどに(四)

陽炎

はかなきを(五)

たのしむか(五)。

はかなきを(五)

かなしむか(五)。

かげろふは(五)

舞まひをどり(五)。

かげろふは(五)

くるひ立つ(五)。

さめも せじ(五)。

生まれずば(五)

死にも せじ(五)。

うつくしく(五)

生まれずば(五)。

かの小町(五)

小町とて(五)。

菜花

たにの 菜の花(七)

知らぬ ゆふぐれ(七)

よその いろあひ(七)

あけの 鐘なり(七)。

つきに やうく(七)

いろは 曇りて(七)。

やがて あさ日に(七)

かげは 晃めく(七)。

蕨

やさしき 手を あげ(八)。

まねく わらび(六)。

こゝ折れ こゝをと(八)

節を しめす(六)。

首陽の やまぢに(八)

汝を 見たる(六)

伯夷と 叔齊(八)

何と 見けん(六)。

春の野

踏まるとか(五)

えらねども(五)。

かせには 折れぬ(七)

たんぼゝの花(七)。

つばすみれ(五)。

れんげさう(五)。

野を ともにして(七)。

春を ともにし(七)。

足る ことを(五)

ともに 知る(五)。

やま松を(五)

うらやます(五)。

歸雁

くる かりを(五)

むかふる うたは(七)

おほくして(五)

春 ゆく かりを(七)

おくる うた(五)

敷 いかほども(七)

なき 世かな(五)。

みやこは 花に(七)

あこがれて(五)。

ひなは 早苗に(七)

夜も いねす(五)。

秋は むかへし(七)

その 人の(五)
心は うつる(七)

つばくらめ(五)、

やど 貸す(四)、

巢 貸す(三)

のきば(三)

貸す(二)、

雁は 行け！まゝ！(七)

かへれ！まゝ！(五)

燕

いで つばめ(五)、

みち 何里(五)、

とび きしど(五)

人の 身に(五)

その つばさ(五)

もたせなば(五)

いかならん(五)、

人の 身に(五)

その つばさ(五)

もたせなば(五)

人も 飛べ(五)。

飛ぶ、さばれ(五)、

あゝ あはれ(五)、

この 世界(五)

かぎりにて(五)。

うみ 越えて(五)。

かへり ゆき(五)、

ゆき かへり(五)、

たち かへり(五)、

たち もどり(五)、

一生しちうに(五)

なんぢ 行く(五)

みちのりや(五)

なん萬里(五)、

おほらみも(五)

飛びて 越す(五)。

たかやまも(五)

飛びて 越す(五)。

春夜

ざんげつや(五)、

田にしの うたを(五)

まくらにて(五)、

伽羅きやらの 餘香よかうに(七)

まどろみも(五)

ならの むかしの(七)

おもかげを(五)

しのべと 瓶びんの(七)

やへざくら(五)、

とこの ありあけ(七)

いろ にほふ(五)。

蛙

かはづ 鳴くか(六)

かた、かた、かた(六)。

鳴くか、よぶか(六)、

かた、かた、かた(六)。

こひし つまを(六)、

かた、かた、かた(六)。

こたへ あはせ(六)、

かた、かた、かた(六)。

なくか、よぶか(六)、

戀ひし つまを(六)

よぶか、泣くが(六)

かた、かた、かた(六)。

戀ひし つまを(六)、

戀ひし つまを(六)。

蛇

窓は あきぬ(六)。

いでよ、あぶ(五)!

蛇は ぶぶぶ(六)、

窓を さらす(六)。

などで 出ぬぞ(六)、

いでよ、蛇(五)!

蛇は ぶぶぶ(六)

まどを ついみ(六)。

窓を ついみ(六)。

ゆるし みづぐるま(八)。

若鮎

やいばの 冴えか(七)、

たにの 水(五)、

やいばの 冴えか(七)、

鮎か、飛ぶ(五)。

秋の その 日は(七)

見えぬかな(五)。

雛

あばらやの ひなに(八)

さしぐむよ、なみだ(八)。

蛇は ねむげ(六)、

われも ねむし(六)。

蝶

てふの 兒(四)

やうやう(四)

ひいらひら(五)、

吹くとも(四)

知られぬ(四)

のべの 風(五)。

花の 香(四)、

水の おと(五)、

よし野なる 内裏（八）、

まさつらの すがた（八）。

音は せぬ 管絃（八）、

そのまゝと 見えて（八）、

あゝ 悲し（五）

潮干（九）がり

きのふの 玄はひがり（九）、

けさ 見る 朝かゝみ（九）、

くろみし かほの いろ（九）、

あゝ いかに せまし（八）。

桃に寄せて姫のゆく末を

雲は おぼろの（七）

金すなご（五）、

そらに 色紙（七）を

はるの夜の（五）

月の あゆびも（七）

ゆるきかな（五）。

更（七）へも えやらぬ（七）

はなの袖（五）、

かげに かざして（七）

よもすがら（五）。

春曉

閨やゝ いづる（七）

もゝの 天々（五）

やうやうに（五）

ひめも やがては（七）

人の つま（五）、

みのりて 兒（七）

西王母（五）、

王母、その母（七）

母と なれ（五）。

春月

うた ひとつ（五）

あはれ 書きたし（七）

ひさかたの（五）

はなの顔（五）

にはには 露（七）

あさゝくら（五）

人は（三）

まどけなし（五）、

花は（三）

おもはゆげ（五）、

山は（三）

うすぎぬ（五）

かすみ（三）、

風は（三）

ゆるく 吹く（五）

かをり（三）、

それとも(四)

知れぬ(三)

笙しやうの音ねに(五)

こゝろは(四)

そこか(三)

はた空そらか(五)

春雨

鯛たいに 鹽しほせよ(七)

はなのあめ(五)

消ゆる ま おそき(七)

掛け香かぎかに(五)

いのちを ちぎれ(七)

やがて咲く(五)

はなも 散る まの(七)

おそかれと(五)

董

ひとふさ つみし(七)

つぼすみれ(五)

こゝろに ちぎる(七)

えもんごめ(五)

その むらさきの(七)

いろも 濃く(五)

ふたへを ひとへ(七)

ひとへにと(五)

海棠

いつまでか(五)

ねふるらん(五)

うなだれて(五)

海棠の はな(七)

たをやめは(五)

やゝ おきて(五)

捨てまくら(五)

餘香よかを 含む(七)

櫻

待てばこそ(五)

待たざらば(五)

何を かも(五)

惜しむべきかと(七)

咲く までは(五)

ひたすらに(五)

心を しひぬ(七)

さきぬれば(五)

咲く ほどの(五)

みじかきを(五)

待ちし 日敷の(七)

ながきにて(五)

いとしく(五)

さても わりなき(七)

つばな

問はん(三)。

こたへよ(四)。

のべの(三)

つばな(三)。

きらめかす 鎗(七)

とぎすます 戟(七)。

こたへ(三)

聞けかし(四)。

のべの(三)

ひばり(三)。

やりの ちづくに(七)

おひ たちし われ(七)。

問はん(三)。

いかなる(四)

おもひ(三)

ありて(三)。

やり きらめかす(七)。

ほこ とぎすます(七)。

やりの(三)

ちづくは(四)

人の(三)

ちしほ(三)。

むかし、この のべ(七)

修羅の には なり(七)。

はなの(三)

石榴(五)

あかくは 染めじ(七)

はむら立つ(五)

夏の あつさを(七)

まさらせて(五)。

文珠と 名のる(七)

聖者あり(五)。

かくは 思ひの(七)

まゝに いふ(五)

「あかく 染めじと？」(七)

おもしろや(五)。

さらば いかなる(七)

白、さむげ(五)。

いのちは(四)

らしは(三)

なるを(三)。

花を のみ 見て(七)

血を わすれしか(七)

色二つ

「われ 神ならば(七)

このつゝじ、

あかくは 染めじ(七)。

ほとゝぎす(五)

吐く てふ 血しほ(七)

おもはれて(五)。

われ 神ならば(七)

あを うれはしげ(七)、
くる、怖(こほ)げ(五)。

ひらさき おもく(七)

紺 にぶし(五)。

水 いはまより(七)

さゝやきつ(五)。

聖者 ことばは(七)

なか／＼に(五)、

おもて のみこそ(七)

赤 まされ(五)。

水 玄づやかに(七)

かたるらく(五)、

「神は 無色(むしよく)を(七)」

もとゝせり(五)。

空(くう)を 無色(むしよく)と(七)

さだめたり(五)。

そも いる 有るか(七)

水の 身に(五)。

無き ゆゑにこそ(七)

いろは 有れ(五)。

われ その ゆゑに(七)

まことの もとは(七)

變幻(へんげん)の(五)

いつはりの(五)

花の しづく(七)

玄めす なり(五)。「

聖者 いまさら(七)

あをばみぬ(五)。

金丸(きんぐわん) 西に(七)

すべり ゆき(五)、

つゝじ、石榴(じきりう)(七)

いと 榮えぬ(五)。

金丸 にしに(七)

すべり 入り(五)、

つゝじ 石榴(七)

黒ずめり(五)。

星 虚空(こくう)より(七)

のぞき 来て(五)、

つゝじ、石榴(七)

目に 見えず(五)。

有りとほ 名のみ(七)

有らず 只(ただ)(五)。

色 なき 水は(七)

もとの 身の(五)

無き その いろの(七)

いろにして(五)

不變(ふへん)の ものと(七)

なりにけり(五)。

藤

からみつく(五)

その いは(四)。

まといつく(五)

その みき(四)。

切りは せずや(六)

くびりて(四)。

すさまじき(五)

ちからの(四)

ありげなる(五)

ふぢかな(四)。

花の 穂や(五)

いかなる(四)。

その はなや(五)

いかなる(四)

その いろや(五)

いかなる(四)。

その みきに(五)

その 花(四)。

その 花に(五)

かの いろ(四)。

あゝ かもひ(五)：

あたらず(四)。

杜鵑

ころ きかぬ(五)

のみを 花なる(七)

ほととぎす(五)。

雲に とほやま(七)

絹の もの(五)

見る たびに(五)

さしぐむは(五)

なみだ かな(五)

あゝ かひこ(五)

あゝ かひこ(五)。

その 絹を(五)

人は 着る(五)。

そのむしは(五)

つちと なる(五)。

あゝ かひこ(五)

あゝ かひこ(五)。

蠶

人の ため(五)

身は 烹られ(五)。

ひかり 有る(五)

いとゝ なる(五)。

あゝ かひこ(五)。

あゝ かひこ(五)。

つちと なれ(五)、

○ その つちは(五)

とこしへに(五)

世を 肥やす(五)。

あゝ かひこ(五)、

○ あゝ かひこ(五)。

人は いざ(五)

○ その 絹を(五)

いたづらに(五)

着し 人は(五)。

あゝ かひこ(五)、

あゝかひこ(五)

桐の花

人に(三)

見よとての(五)

いろは(三)

まめさねど(五)、

桐は(三)

咲く 時を(五)

たがへ(三)

あやまたず(五)。

人に(三)

鶯うぐいすげとての(五)

名は たかし(五)。

おもふ(三)、

超こゝろ凡ぼんの(五)

きみ よ(三)

きりの 花(五)、

なまじ(三)

よのつねの(五)

ものは(三)

友と せず(五)。

笛

とへ はたへ(五)

皮に つままれ(七)、

かをり(三)

吹かねども(五)

桐は(三)

ときをしも(五)

待ちて(三)

かをりけり(五)。

徳に(三)

となり あり(五)。

いつか(三)

鳳凰の(五)

友と(三)

さへ なりて(五)

はなの(三)

そだち ゆく(五)

竹のこを 見よ(七)。

その 皮は(五)

愛の 皮なり(七)。

道の 愛(五)。

仁人の 愛(七)。

蛇いちご

草 まばらなる(七)

いし の 道(五)。

まひるの ほてり(七)

火を 吹いて(五)。

色もえ まさる(七)

へびいちご(五)。

ひそめる 蛇の(七)

あり なし を(五)

問はで 只 名の(七)

おそろしき(五)。

おはれ、いちご(六)。

さては 人に(六)

おのが 名にて(六)

うとまるゝか(六)。

おもへ、その 名(六)

人は 付けぬ(六)。

おのれ つけて(六)

おのれ うとむ(六)

夏曉

端山に 満月(八)

ながく 掛かる(六)。

みじか夜 うらむか(八)。

めでよ 朝を(六)。

みどりになく 露(八)

玉子に 澄む 空(八)。

たもとの すゝ風(八)

せみも やうやく(七)。

蚊帳

よひの うき世は(七)

かやの そと(五)。

よはの わが 世は(七)

かやの なか(五)。

かやを へだてゝ(七)

見る 月は(五)

紗に つゝむ(五)

美玉(三)。

かやに 吹き くる(七)

ゆふかせは(五)

打ら寄する(五)

波か(三)。

日傘

かさ 無くば(五)

何の おのれが(七)

をんなかな(五)

またかけの(五)

花は うつくし(七)

石楠花しよくんげ(五)

今ぞ 知る(五)

あま夜の 鐘の(七)

ものすこさ(五)

團扇

おや竹の(五)

もとを(三)

はなれ(三)

身の はねは(五)

ちい(三)

割られ(三)

つけらるゝ(五)

糊のりの(三)

おさへ(三)

貼はられたる(五)

紙の(三)

ちから(三)

あゝ 竹の(五)

するは(三)

見えぬ(三)

夢 えばし(五)

夏の(三)

いくか(三)

あきかせは(五)

やがて(三)

立たん(三)

おとろへや(五)

おもて(三)

よごれ(三)

はねのの(五)

折るゝ(三)

末期まうち(三)

班婕妤(五)

いまも(三)

のちも(三)

病葉ヤバク

あに おとゝ(五)

ひとつ えだなる(七)

葉の なかに(五)

身は わくら葉と(七)

なり はてゝ(五)

秋をも 待たで(七)

えぼむかな(五)

つき そめし(五)

蟲 うらめしと(七)

いまさら(五)

云ふて かへらぬ(七)

もとの 色(五)

緑の さかり(七)

知らずして(五)

うき世を 黄にて(七)

をはるかな(五)

牡丹

いま 散るか(五)

いま 散るか(五)

きのふ、また(五)

きのふ(三)

やうやくに(五)

けふ 散るか(五)

けなげなり(五)

牡丹！(三)

咲く までに(五)

待たせ つゝ(五)

散る までに(五)

待たせ つゝ(五)

けなげ なり(五)

牡丹(三)！

うんめいは(五)

ひとに(三)

問はず(三)

うんめいは(五)

ひとり(三)

知れり(三)

けなげ なり(五)

牡丹(三)！

いとねど(五)

あざむかれ(五)

かひ やられつゝ(七)

立たせられ(五)

くろがねの(五)

かせは のど元(七)

繩は腰(五)

泣けばとて(五)

こゑも 得 立てず(七)

なき あへぬ(五)

はかなき 身かな(七)

げにも鶉か(五)

鶉

わが ものと(五)

かもひし うをは(七)

うばはるゝ(五)！

人の ため(五)

道を 盡くすは(七)

うくも 此(五)

うぎ世に うまれ(七)、

名さへ 鶺鴒と(五)

うをを うばはる(七)

世を うらむ(五)、

うめけば 聲も(七)

うるむかな(五)。

鶺鴒 あゝ 鶺鴒。

螢

かぎり なく(五)

はたる 飛ぶ(五)。

いり みだれ(五)、

はたる 飛ぶ(五)。

むれ たちて(五)。

はたる 飛ぶ(五)。

みぎ ひだり(五)

はたる 飛ぶ(五)。

かぎり なく(五)、

いり みだれ(五)、

むれ 立ちて(五)、

みぎ ひだり(五)、

はたる 飛ぶ(五)、

飛び(二)、

飛びて(三)

おもしろや(五)、

いかに 見る(五)、

世の中の(五)

人界は(五)

木に よりて(五)

うをゝしも(五)

もとめんと(五)

するも 有り(五)。

蠅

はへは 手をもみ(七)、

あしを する(五)。

かしらを 撫でつ(七)、

はね 志どく(五)。

おとも せず(五)、
まづかなる(五)
はたるかな(五)。

雨蛙(アマガヘル。一)
(名、エダカハツ)

えだかはづ(五)

木に 住みて(五)、

あめを 呼び(五)、

木に よりて(五)

むしを 食む(五)。

さても 問ふ(五)、

えだかはづ(五)、

なれや そも(五)

ほこりに 爲りし(七)

身の きよめ(五)、

蠅は 怠る(七)

ことの なき(五)。

蠅は かくてぞ(七)

身を きよむ(五)。

蠅は きよめて(七)

怠らず(五)。

さるにても(五)

おもひやれかし(七)

その 蠅は(五)

けがれと 人の(七)

いとひ見る(五)

腐れし ものに(七)

またつゝみ(五)

うちて 世 わたる(七)

むしなるを(五)。

蚤

あはれ のみ!

よし 人の 身を(七)

食へば とて(五)、

人の いのちに(七)

およぶまじ(五)。

ましてや 砂も(七)

たゞ ならぬ(五)、

人と くらべて(七)

かす ならぬ(五)

はかなき むしと(七)

うまれ きて(五)

とらへられては(七)

最期 とよ(五)。

人てふ ものは(七)

ふさはしき(五)

あらしひ 知らぬ(七)

妖魔 かな(五)。

むしを 殺すは(七)

つみならで(五)、

掟は 人の(七)

うへに のみ(五)

問ふ べき ものと(七)

さだめたり(五)。

おのれに ばかり(七)

さだめしを(五)

天理と 見つゝ(七)

あやしまず(五)。

蚤とて 人の(七)

血を すへと(五)

そも く 天に(七)

ゆるされて(五)

この 世に 生まれ(七)

いでぬらん(五)。

さるを いかにぞ(七)

のみの 身は(五)

道を ふみても(七)

仇に 死ぬ(五)。

玉子に 石を(七)

おとさるゝ(五)。

のみよ、 うらみの(七)

こゑ 無きか(五)。

目連 むしに(七)

血を 吸はせ(五)、

熱地の 沙上(七)

大悟 あり(五)。

その のち 有りや(七)

もくれんは(五)。

そも いくたりの(七)

もくれんは(五)。

蝙蝠

おほかたは(五)

こゝろ 細しと(七)

ゆふぐれを(五)

かうもりの 身の(七)

いたはしき(五)。

身の ほご 知れば(七)

うらむまじ(五)。

怨むまじとは(七)

ふでにさへ(五)。

莊周の(五)

なめくじ

なめくじや(五)

ばんじやくの(五)

くづれて おほひ(七)

かゝるとも、さて(七)。

子子

今は(三)

ぼうふり(四)

やがては(四)

かもへども(五)。

あさ日の にはひ(七)

はなの いろ(五)。

さだかに 知らで(七)

死ぬ 身かな(五)。

蝸牛

いそがねば(五)

つまづかぬ(五)

かたつむり(五)。

身も いへも(五)

死ぬ までは(五)

はこび ゆく(五)。

蚊と なる(四)

浮くも(三)

うれしげ(四)、

まづむも(四)

うれしげ(四)、

浮くも(三)

うれしげ(四)

まづむも(四)

うれしげ(四)

のぼり(三)

はつれば(四)

蚊と なる(四)

たのしみ(四)。

にぞり(三)

みづより(四)

はね 伸す(四)

ゆふ風(四)

こうた(三)

うたふて(四)

のきばに(四)

をぞりつ(四)。

初夏

あをだふみ(五)、

新茶 煮て(四)、

つりしのぶ(五)

つゆ 垂る(四)。

くるか けふ(五)

はつがつを(五)。

賣りに くる(五)

やぐるま(四)。

よし屏風

紙と(三)

かはらぬ(四)

風の(三)

へだて(三)、

透けば(三)

すいしと(四)

菝の(三)

びやうぶ(三)、

暗さ(三)

かみより(四)

いとと(三)

なるを(三)

こころ(三)

のみにて(四)

こころ(三)

あざむく(四)。

ひるね

おもてを かくす(七)

絹うちば(五)。

いつか 假り寝の(七)

たをやめは(五)

かすみは こめし(七)

あさ ざくら(五)。

花の その人(七)、

はなの ゆめ(五)。

梅雨

さみだれに(五)

おどろきつ(五)。

およそ(三)

およその(四)

およその(四)

みどりの(四)

いやが(三)

うへに(三)

まげり(三)

まげれる(四)

その 意地の(五)

いと つよき(五)。

早苗

さなへ(三)

とりつゝ(四)

むねさへ(四)

あらは(三)

来るは(三)

こひ人(四)、

こはそも(四)

いかに(三)。

くると(三)

まりなば(四)

泥には(四)

せぬを(三)。

さなへ(三)

取る 手は(四)

乳房を(四)

いかに(三)。

ちぶさ(三)

かくすか(四)、

ちぶさは(四)

どろよ(三)

ちぶさ(三)

まめすか(四)、

そは又(四)

逆も(三)。

とせん(三)、

かくせん(四)、

すべも 無や(五)、

うしろむき(五)。

夏羽^おお^り
なつばお^り(五)、

人 着れば(五)

すいしげに(五)、

われ 着れば(五)

なほ 暑し(五)。

はづかしや(五)、

これも また(五)

あさましき(五)

うらやみの(五)

こゝろかな(五)。

蟬^{せみ}

なき 立ちて(五)

そろふ こゑ(五)

一山^{さん}に(五)

ひとつ こゑ(五)。

こゑ ひとつ(五)、

ひとつ こゑ(五)、

あゝ ねふし(五)、

まづけさに(五)。

蛇^{へび} 衣^きを ぬぎ(五)

すてに けり(五)、

蛇 解脱^{げだつ}(五)。

身は端然^{たんぜん}と(七)

ねふる かな(五)。

さもあらばあれ(七)、

身外^{しんぐわい}の(五)

一切^{いっさい}の 敵(七)

何 ならん(五)。

ひととせ ごと(七)

解脱^{げだつ}して(五)、

あらたに 進む(七)

まろが 身を(五)

にくまば 憎め(七)

打たば 打て(五)。

たゞ 知る この 身(七)

おもひ 切り よき(七)

うき世 かな(五)。

ふるきは ゆめの(五)

假りの きぬ(五)。

つちに かへして(七)

つち 肥やす(五)。

かくて おのれは(七)

草を縫ふ(五)、

木に 添ふ(五)

水に(三)

すぢを 繰る(五)。

山したみづに(七)

垢離^{こり} 取りて(五)、

草を 縫ふ(五)。

たゞ 知る 水に(七)

筋を 繰る(五)。

たゞ 一向の(七)

専念に(五)

木に 添ふ(四)。

のぼる(三)。

草に 倚る(五)。

岩 切り くゝる(七)

あなに 入る(五)。

のぼれば 山の(七)

みね までも(五)。

くだれば谷の(七)

そこ までも(五)。

時を 待ちては(七)

たゞ ねふる(五)。

黙悟を 禪と(七)

あぢはひて(五)

大達 つひに(七)

大蛇ぞよ(五)。

いで おほかたの(七)

蟲ぞもは(五)

その 目を いか(七)

見ん づらん(五)

扇

川と なる(五)

うもれみづ(五)。

ゆふだちを(五)

たすけかな(五)。

ふらす 水(五)。

わかづ 水(五)。

ゆふだちは(五)

問はぬ かな(五)。

夏の夕

入り日を ふくむ(七)

なつの 雲(五)

きんぷくりんの(七)

あふぎの(四)

かせも(三)

あだには(四)

買へ(三)。

うごかす(四)

手にて(三)

やうく(四)

買ひ得(三)。

うごけば(四)

あせよ(三)。

その 汗(四)

値なり(三)。

ゆふだち

螺鈿らてんな (五)。

あすも 晴れぞと(七)

そらの いろ(五)

あつさに 擦をりも(七)

あかめしか(五)

とけて こがねの(七)

ながるゝか(五)。

金華きんくわ きらめく(七)

ゆふばえ(四)。

夏なつの月つき

あかりは つけじ(七)

いつ までも(五)。

あかりは つけじ(七)

蚊かは きても(五)。

すだれを もれて(七)

金きんの いと(五)

たゞみに 引きし七

つきの かげ(五)

あかり つけなば(七)

消きえも せん(五)。

夏なつの朝あさ

なつは 今(五)

はやおきを(五)

をしへけり(五)。

花 見せて。

はすの 花(五)。

あさがほの 花(七)。

氷こおり 玻璃盤はりばんの(五)

こほり(三)。

吹き かくる(五)

いさは(三)

寒ひやく(三)

吹き かへる(五)。

あはれ、有あり(五)

なつも(三)

ゆきげ なる(五)

かせの(三)。

初秋はつあき

秋 立つか(五)。

秋の そら(五)

その いろは(五)

さて 夏と(五)

かはらねど(五)。

たゞ 見れば(五)。

たゞ をかし(五)。

病やまみも せぬ(五)

目の かすむ(五)

こゝちして(五)。

初[●]裕[●]

あさあらし(五)。

はつあはせ(五)

身に されば(五)、

うら がなし(五)。

ほのかなる(五)

微^のの 香^の(五)

かをりつゝ(五)。

まづむ そら(五)。

ちかき鐘^の(五)。

くれないとぐ(五)

とりの かげ(五)。

秋[●]思[●]

こゝ 經て 秋へ(七)

わたれとて(五)

あまのがはらや(七)

かけはしの(五)

人を さそひて(七)

見ゆる かな(五)。

夜も つきかげも(七)

ふけて ゆけ(五)。

いのちを きざむ(七)

かうろぎも(五)

一こゑ ごとに(七)

せまり 行く(五)。

年も それほど(七)

ふけよ とて(五)。

年も それほど(七)

ふけよ とて(五)。

なにとも(四)

見えも(三)

せざりし(四)。

秋か(三)。

あはれに(四)

けふは(三)

見えぬる(四)。

浦[●]の[●]秋[●]

うらの(三)

とま屋の(四)

のきの(三)

千魚^の(三)

夏は(三)

露[●]

世のなかに(五)

うれしき ものは(七)。

ぬれて さへ(五)

うれしき ものは(七)

たゞ あきの(五)

つゆ のみにして(七)。

秋雨

あきの あめ(五)

ゆかし(三)、

もみぢ葉を(五)

あかく(三)

染め なすと(五)

おもへば(四)。

あきの あめ(五)

かなし(三)、

ちらすとして(五)

さなきだに(五)

なつの ゆめ(五)

淡く、たゞ(五)

見 はてぬを(五)、

いとしく(五)

また 霧の(五)

身と 共に(五)

こゝろ まで(五)

鎖すかな(五)

朝顔

はかなしと(五)

たれか 云ふ(五)

あかく(三)

染め なすと(五)

おもへば(四)。

霧

ほゞ 近く(五)

啼く からす(五)

影 さがす(五)

あきの 霧(五)。

やはらかき(五)

櫓の こゑは(五)

紗の 幕に(五)

まよひ 入る(五)。

いさましき(五)

あさがほを(五)。

いかほどの(五)

根の ちから(五)

月 まで(五)

行く おもひ(五)。

つて 有らば(五)

その かぎり(五)

つばみ もち(五)。

花 はこぶ(五)。

あだばなに(五)

なるは 無し(五)。

かならずの(五)

實とぞなる(五)

ながからぬ(五)

日のいのち(五)

咲く ために(五)

こそ 玄ぼめ(五)

咲く までの(五)

やすみ とて(五)

秋夕

野すゑ(三)

ちかく(三)

月は(三)

いでぬ(三)

蹴まり(三)

ほどの(三)

月は(三)

いでぬ(三)

潮と(三)

ともに(三)

おこり(三)

きたる(三)

かせに(三)

つれて(三)

まぎの(三)

とは音(三)

川の(三)

うねり(三)

はるか(三)

白し(三)

いでや(三)

釣りを(三)

やめて(三)

歸れ(三)

人は(三)

いへに(三)

われを(三)

待てり(三)

稲の花

それ 花か(五)

いねの はな(五)

有るか(三)

無さかに(四)

咲く(三)

うるはしき(五)

いろも 無し(五)

こゝら(三)

よき 香も(四)

無し(二)

みのりては(五)

いか ならん(五)

おもへ(三)

實と なる(四)
する(二)。

鶏頭

秋は(三)

ふけゆく(四)、

鶏頭(四)

肥え、ゆく(四)。

はなの(三)

こゝろは(四)

あきをや(四)

おくる(三)。

ふゆを(三)

ちかくと(四)

肥え、肥え(四)

行くか(三)。

肥えて(三)

ふゆをや(四)

こゝろに(四)

呼ぶか(三)。

まもに(三)

あひなば(四)、

いのちは(四)

無きを(三)。

まもに(三)

逢ふとて(四)

肥え、肥え(四)
行くか(三)。

蟲

ひるは(三)

日あしの(四)

みじかきに(五)

おはれ(三)

おはれて(四)

こゝろ なく(五)

○

よるは(三)

夜ながを(四)

せめてもの(五)

こゝろ(三)

やりにと(四)

おもへども(五)。

○

よるの(三)

おはれは(四)

いとゞしく(五)

むしの(三)

鳴く 音に(四)

くはゝりて(五)

○

ふとふ(三)

やるべき(四)

かたも 無き(五)

うたて(三)

おもひを(四)

いかに せん(五)

○

鳴くな(三)

むし、むし(四)

われも さぞ(五)

あはれ(三)

おもひは(四)

おもひ やる(五)

○

鳴くか(三)

むし、むし(四)

われにもと(五)

つれて(三)

なく 友(四)

かたらふか(五)

○

鳴くか(三)

むし、むし(四)

よはの かせ(五)

まもを(三)

はらみて(四)

身に しむか(五)

死ぬ ものを(五)

鳴くな(三)

むし、むし(四)

ぢやうみやう 定命を(五)

よしや(三)

鳴くとも(四)

いかに せん(五)

○

鳴くな(三)

むし、むし(四)

身の つとめ(五)

いまや(三)

はたして(四)

月

つきを(三)

待ち 待ち(四)

そら 見れば(五)

くも(三)

さまざま(四)

見なさる(五)

○

つきの(三)

むかへに(四)

わさ いで(五)

かげを(三)

まもれと(四)

いふ くもか(五)。

○

つきを(三)

まづかに(四)

むかへ 取り(五)。

のせて(三)

くるよと(四)

いふ くもか(五)。

○

つきを(三)

ねたみて(四)。

さまたげて(五)。

かげを(三)

くもれと(四)

いふ くもか(五)。

○

つきに(三)

おもふき(四)

添へん とて(五)

ふせい(三)

おほくと(四)

いふ くもか(五)。

○

人を(三)

ぢらして(四)。

おもはせて(五)。

くらく(三)。

あかるく(四)。

する くもか(五)。

朝寒

そで(二)

やゝ(二)

おもひ(三)

あぢ…(二)

ぢぢ(二)。

石(二)

切る(二)

のみの(三)

おと(二)

冴ゆ(二)。

やま…(二)

ぎは(二)

とほく(三)

さえ(二)

たり(二)。

はじ…(二)

の 葉(二)

はやく(三)

さる…(二)

づく(11)。

草履(三)

はく(11)

あし…(11)

もと(11)。

つめたさの(五)

きは…(11)

たつ(11)。

露か(三)

えも(11)。

目に(11)

まだ(11)

見えねども(五)

あゝ(11)

寒(11)。

秋意

もす(11)

鳴くや(三)

よこに(三)

さす 日(三)。

目も(11)

冴ゆる(三)

そばの(三)

はなは(三)

日を(11)

うけて(三)

すと(三)

ちむく(三)。

雁

くに(11)

さつこ(三)。

かり(11)！

さま(11)

よその(三)

ちばし(三)

やど(11)

ならぬ(三)

やど(三)

たつ(11)

ちばし(三)

さだむ(三)。

○

やど(11)

有りて(三)

無き(11)。

かり(11)！

さても(三)

あはれ(三)。

その(11)

かりの(三)。

やどに(三)

雌雄(二)

子 まで(三)

ともに(三)。

なるこ

ゆふ日(三)

なる子に(四)

さす(二)。

なる子(三)

ひかる(三)。

かせは(三)

なる子に(四)

吹く(二)。

なる子(三)

ひらく(三)。

ひかり(三)。

ひびきて(四)。

たゞ(二)

なる子(三)

威 有り(三)。

ひかり(三)。

ひらくも(四)

たゞ(二)

綱を(三)

さす(三)。

かなし(三)。

たよりと(四)

なる(二)

つなの(三)

なき 身(三)！

やもめ(三)。

みなしご(四)。

あゝ(二)。

なる子(三)

よりも(三)。

擣衣

いまの 世は(五)

聞きも せず(五)。

聞かねども(五)。

あゝ きぬた(五)。

いにしへの(五)

うたに 知る(五)。

おもひ やる(五)。

目に うかぶ(五)、
耳に 冴ゆ(五)。

かけ 有らば(五)、

うどくと も(五)、

いろ 有らば(五)、

うつる とも(五)、

まざくと(五)

おもはるゝ かな(七)

○

その ことは(五)

なにを 打つ(五)。

その ことは(五)

情 愛を(五)

うち こめて(五)、

こむる とて(五)。

○

霜 さゆる(五)

夜 なり とも(五)

打つ 槌の(五)

かさなりて(五)、

ひらはれぬ(五)

ぬくみ やは(五)、

こもり 得ぬ(五)

まこと やは(五)。

その ぬくみ(五)

縁に 入る(五)、

その まこと(五)

筋に 入る(五)。

その ぬくみ(五)

縞に 入る(五)。

その まこと(五)

色に 入る(五)。

○

千萬里(五)

たびを 経て(五)

あゝ 褪めじ(五)。

あゝ 消えじ(五)。

わが 人の(五)

はた 觸れよ(五)。

わが 人よ(五)

かせ 引くな(五)。

はゝの 手よ(五)。

つまの 手よ(五)。

うつり香も(五)

こゝろ して(五)

きえ、 さめず(五)

つたはりて(五)。

その 肌(五)

觸れよ かし(五)。

この かもひ(五)

何に しも(五)

たぐふべき(五)。

一心は(五)

手も 冷えず(五)。

あたゝ まる(五)。

あせと なる(五)。

情熱に(五)

火花 あり(五)。

ひかり 有り(五)。

金色の。

あゝ きぬた(五)！

その おとは(五)

かなしき か(五)。

いな、昔は(五)

たゞ なみだ(五)

さそふ なり(五)。

なみだ 只(五)

かなしみは(五)

なき なみだ(五)。

なみだ 只(五)

うれしさの(五)

ゆかしさの(五)

いとしさの(五)

たゞ 涙！

おとし水

はるの 若菜の(七)

かた ばかり(五)。

霜 おきぬ(五)。

おもひ える(五)

よべの こゑ(五)

こほろぎの(五)

よわりしを(五)。

まかすがに(五)

はだ さむし(五)。

かさねても(五)

うすき かな(五)。

この 霜も(五)

いまは 只(五)

日を 待たで(五)

床にもと(五)

土を かわかす(七)

おとし水(五)。

おとし水(五)！

せきの かなたに(七)

ながれて(四)

ゆく／＼(四)

春を むかへて(七)

いち はやく(五)

かへれ かし(五)。

霜

すてわらぢ(五)

あさ 白し(五)。

消えて ゆく(五)。

日は よわる(五)

かせは 吹く(五)、

あさ寒は(五)

ほねに 入る(五)。

まもは また(五)

なほも 凝る(五)。

凝りて 消ゆ(五)、

消えて 凝る(五)。

消し あへず(五)

凝り かさむ(五)、

いつしかに(五)

針と なる(五)。

まろかねの(五)

くざと なる(五)。

名さへ 呼ぶ(五)

まもばしら(五)。

やまかげに(五)

打ち 込めば(五)、

ばんじやくの(五)

根も ゆるぐ(五)、

ばんじやくも(五)

宙に 浮く(五)。

大地 その(五)

おもみ 無く(五)、

大地 また(五)

こほり とて(五)

すな ほどの(五)

ちから さへ(五)

なきを霜(五)！

菊

わが やどの(五)

菊に(三)

はな いまだ(五)

咲き いでず(五)。

○

わが やどの(五)

菊に(三)

さゝげ らる(五)。

岩 何ぞ(五)。

きり とほせ(五)！

ありと 有る(五)

水を 錐(五)。

おし るぐり(五)、

こぢ くだく(五)。

あゝ 時に(五)

あへば 霜(五)

おそろしき(五)

ちから かな(五)。

夏ならば(五)

やま ほどの(五)

無し、いそぎ(五)

さく けしき(五)。

わが やどの(五)

菊は(三)

おもむろに(五)

花 咲かす(五)。

わが やどの(五)

菊は(三)

よのつねの(五)

花ならず(五)。

わが やどの(五)

菊は(三)

おそれずよ(五)

つゆしもを(五)。

柿

とり(二)……

たくも あり(五)

柿の實(五)。

とり(二)……

たくも なし(五)

柿の實(四)。

かきのみ(四)。

あぢ(二)

思はるゝ(五)

あからみ(四)

とり(二)……

たくも あり(五)。

かきのみ(四)。

いろ(二)

うつくしき(五)

あからみ(四)

とり(二)……

たくも なし(五)

椎

のこせ(三)

からす(三)！

ついはみ(四)

のこせ(三)！

すこし(三)

のこせ(三)！

まひの實(四)

のこせ(三)！

いま 山(四)……

もり は(三)

たぐはへ(四)

にとて(三)

おぼつか(四)

なくも(三)

針さへ(四)

はこび(三)

ふくろを(四)

ぬひて(三)

ひたすら(四)

なるを(三)

氷

はるは(三)

わか水(四)

いまは(三)

こほり(三)

はるは(三)

わかやぐ(四)

ものと(三)

云ひぬ(三)

いまは(三)

あさまし(四)

うとむ(三)

ばかり(三)

みづは(三)

まわ 寄る(四)

ほねは(三)

立ちぬ(三)

人は(三)

おそれて(四)

目をも(三)

くれず(三)

冬の夜

痩せひぢの(五)

木は ふるふ(五)

こがらしは(五)

吹き すさぶ(五)

とき あげし(五)

そらの いる(五)

つきの 反り(五)

ほしの 稜(五)

一年の(五)

する 緊めて(五)

ふゆは 又(五)

人の 身を(五)

しめ しめて(五)

さらす かな(五)

堪へ しのぐ(五)

わが あとに(五)

次々 是るを(五)

わすれ ゆく(五)

ふゆ ならず(五)。

枯れあし

枯れぬるか(五)

ぬまの 芦(五)。

折れ、くだけ(五)。

たふれ 伏す(五)。

たふれしは(五)

みづに 入る(五)。

こほり とづ(五)。

起き 居るは(五)

ふる ゆきに(五)

わな、けり(五)。

世を 見れば(五)

人 いかに(五)。

かつら 焚き(五)。

蘭奢 燃す(五)。

かれあしの(五)

うんめいを(五)

おもひ やる(五)

かたも 無し(五)。

これ とても(五)

なつの よる(五)。

かせ わたる(五)

水の 襲(五)

根の もとに(五)

あげ さげて(五)。

めい月の(五)

銀を 浴び(五)。

晩涼に(五)

うそふけり(五)。

人 訪ひぬ(五)。

たづね きぬ(五)。

○

ふねに さへ(五)

あしわけの(五)

名を つけて(五)

紅顔の(五)

共乗りに(五)

羅綾なる(五)

香も 分けぬ(五)。

ゆめ さむる(五)

かりの こゑ(五)。

暮れ はやし(五)

ゆふもみち(五)。

みね いつか(五)

雪と なる(五)。

たづね くる(五)

人は 無し(五)、

人かげは(五)

世を へたつ(五)。

生きながら(五)

この 世には(五)

亡^ちき あしの(五)

身なり けり(五)。

親ぐきの(五)

折れし かな(五)。

友の 葉の(五)

枯れし かな(五)。

根は うきて(五)

ながれ 去る(五)。

まづみては(五)

泥と なる(五)。

只 斯くて(五)

あしの 身は(五)。

あゝ 斯くて(五)

あしの 身は(五)。

煤^{すす}は^{すす}き

おもしろや(五)

すゝ(二)

はく 音(四)

はた、はた、はた(六)。

おもしろ(四)

はた、はた、はた(六)。

さわがしく(五)

せよ(二)、

すゝ はき(四)、

はた、はた、はた(六)。

その おとは(五)

そこ(二)

さわがし(四)、

はた、はた、はた(六)。

さわがしさ(五)

たゝ(二)

遊^{あそ}戯^{あそ}

撃たるゝと(五)

知りも せば五

みづとりは(五)

かりも せじ(五)

枯れあしの(五)

まげき かげ(五)、

いもとせの(五)

たのし ゆめ(五)

やはらかに(五)

むすぶぞと(五)。

あゝ あはれ(五)。

うたるとが(五)

ためにとて(五)

刑 場 に(五)

おるゝかな(五)。

つみ なくて(五)

いのち なり(五)。

うつ 人は(五)

いもとせを(五)

撃ち 切りて(五)。

たのしめり(五)。

おやと 子を(五)

うちとめて(五)

よるこべり(五)。

あゝ、道の(五)

ためならば(五)。

わが 肉も(五)

そぐべきを(五)。

あゝ、おのれ(五)。

おのが 身の(五)

たのしみに(五)

つみも 無き(五)

ものどもを(五)

あゝ、さまで(五)。

餅つぎ

おや 泣かす(五)

おとどとも(五)

おもはねば(五)

かべどなり(五)

さいめきて(五)

もちを 搗く(五)。

○

子は おやに(五)。

おとを 問ふ(五)。

なにを 搗く(五)

おとかとして(五)。

こたへ なき(五)

おやに なほ(五)。

○

火の くるま(五)

めぐり かぬ(五)。

おもひ には(五)

さむさにも(五)

おやの 身は(五)

燃ゆるかな(五)。

● 歳暮 ●

三百六十(七)

五六にち(五)。

一年の(五)

いのちのかずは(七)

刻々の(五)

きざむ音(五)

時計の針に(七)

はね、はねて(五)

はね やりて(五)

けふ 百八の(七)

ぼんなうの(五)

かねの こゑ(五)

すぎこしかたを(七)

いで おもへ(五)

かへりみて(五)

こぞより 道に(七)

つくせしか(五)

無かりしか(五)

花は 咲きけり(七)

實と なりき(五)

道 遂げき(五)

日は 萬物を(七)

そだてにき(五)

道 遂げき(五)

花も 日も たゞ(七)

道の ため(五)

道 遂ぐる(五)

おもひ のみ なり(七)

ひたすらに(五)

たゆたはず(五)

咲く ま ○ おそしと(七)

なじられぬ(五)

わらはれぬ(五)

風に よわしと(七)

そしられぬ(五)

わらはれぬ(五)

もろき いのちと(七)

せめられぬ(五)

わらはれぬ(五)

その こゑ 花は(七)

聞きにけり(五)

やすらかに(五)

くもり ○ おほしと(七)

なじられぬ(五)

わらはれぬ(五)

雨に 堪へずと(七)

そしられぬ(五)

わらはれぬ(五)

暑さ はげしと(七)

その せめられぬ(五)。

こゑを 日は(七)
聞きにけり(五)、
やすらかに(五)。

花も 日も 扱(七)

道 遂げぬ(五)、
やすらかに(五)。

世に のこしたる(七)

徳は 有り(五)

道 遂げぬ(五)。

實になり、ものを(七)

そだて ける(五)。

道 遂げぬ(五)。

さて ひとゝせを(七)

をはるとして(五)

悔いも 無し(五)。

新體詩歌作例終

明治三十九年五月三日再版印刷
同 三十九年五月八日再版發行

著 作 者

山 田 武 太 郎

新體詩歌作法

發 行 者 兼 印 刷 所

東京市日本橋區通一丁目拾七番地

青 木 恒 三 郎

著 作 權 所 有

發 行 所

大阪府西區新町北通壹丁目六十五番屋敷

嵩 山 堂 印 刷 部
電話西七八二番

大阪府東區心齋橋筋博勞町角

青 木 嵩 山 堂
電話東二五〇番

發 行 所

東京市日本橋區通一丁目角

青 木 嵩 山 堂
電話園本局七八九番

定價金五十錢

一管の筆元無機物のみされど此に書に驅られては忽ち風雨を叱陀して撼天の動地の妙文と成らん

山田美妙君著

散文美文活法

洋裝美本全一冊紙數四百頁特別正價四十錢稅八錢

美文の妙を盡くし精を蒐む。四季、山水、天地、人倫、戰鬪、祝賀は更にも言はず。宇宙天地の荷しくも文にすべきものその秀句を擧げて遺憾無し。況んや著者は斯道の泰斗その載する所のもの悉く著者が常に其錦囊に貯へられしものなるを故さらけに割愛して此書に臚列せられしを又況んや其範圍ははめて廣く今日大に流行する韻文にも相及ばせしをや。句例有り活用例有り。宛ら變化の妙をさしはめ。著者多年の經驗により、よく達文の捷徑たる神祕を示せるものなり。散文韻文に篤志の人幸に一書を購ひて、したしく著者に近づきて示教を受くると同じき利益を受けたまへかし。

三惜道人編

美文精英

西洋綴全一冊正價十六錢稅四錢

萬朶の櫻も、人跡の絶へた高影に咲いては、誰も眺めるものは無い、保津川の流れ潺々たる處に開けばこそ、嵐山の春は賑ふのである、文章も同じことで、如何に心血を凝いで作つたとして、其文辭に艶麗の衣を飾らなかつたなれば、恰も棘を咬むが如きで更に妙味が無い、本書は其文章に滿飾を施すため、驚天動地の文章を作るに於いて、これを常に修養しつゝ、案に臨まば、驚天動地の文章を作るに於いて、これを常に修養も易く、直ちに文章家の名譽を博取せらるゝのである。